

生徒会の会議

東條九音

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは、生徒会の庶務・古詠夜海や役委員たちにより繰り広げられる、生徒会活動やそのほか日常を描いた物語。

基本は一話完結、毎月11日に投稿予定です。

※2018年1月11日に、本編完結しました。

以降は、様々な人物の視点で話しを第二節として、不定期で投稿するかも、です。

目次

第1話	身の無い会議	1
第2話	委員会活動	9
第3話	報告会	23
第4話	研修会とボランティア	28
第5話	庶務と会長	33
第6話	放課後	36
第7話	送る会の準備	39
第8話	入学式	42
第9話	生徒総会	45
第15・5話	Extraく七夕祭りく	48
第10話	朝的一幕から	53
第0話	Extraく始めたきっかけは……く	56
第11話	かくれんぼ	66
第12話	机上の空論	70
第13話	部活巡り	74
第14話	暁荘	78
第?話	Extraく秋華祭のアリスく	85
第15話	変わらない考え、変わりゆく考え	90
第16話	終業式	93
第17話	空論の続き	96
第3・5話	Extraくバレンタインデーく	99
第18話	赤城莉桜	104
第19話	サマーフェスティバル	108
第20話	聖と夜海	110

第21話	美音と夜海	113
第22話	雪姫姉妹と夜海	117
第23話	修羅場の解決	123
第24話	柑條と夜海	128
第25話	お泊り会く方針決定編く	132
第26話	お泊り会くお風呂編く	135
第??話	ExtraくVRな脱出ゲームく	140
第27話	お泊り会く包囲網編く	147
第28話	赤城の提案	150
第29話	体育祭の準備	155
第30話	体育祭	160
最終話	裏側	167
Extra話	追試に向けて	177
Extra話	勉強後、その帰りに	179

第1話 身の無い会議

「と言う事で、役委員決めをするよ」

引き継ぎが3日程前に終わり、昨日は引き継がれた資料を整理していた。

そして今日、やっと本格的な活動を始める事となった。

「ちよつと待て、その前に改めて自己紹介をするべきだろ」

「ミー君……。全員知り合いでしょ」

会長・柑條美玖かんじょうみくはどこか、残念な子を見るような言い方をしてくる。

まあ柑條とは長い付き合いだから、お互いの事は知ってはいるけども。

「その眼はやめろ。とにかく、自己紹介はして貰わないと困る」

「何で？」

おかしいな、長い付き合いだからわかるだろうに。

「柑條お前さん、俺が必要最低限の事しか記憶しないって事、忘れていく訳じゃないだろうな？」

そう、俺は人の名前や話などは余り憶えていない。

何故なら、名前を覚えてなくても会話は成立するし、話の内容は特に身の無い事だ。だから、殆ど聞き流している。

けどこの事は、少しは反省している。そのせいで、友人と呼べる存在がほとんどいないからだ。だからこそ、柑條は数少ない友人と言える。

「そういえばミー君って、興味ない事は特に覚えてなかったね」

まあ、確かに興味がある事だけは、無駄によく記憶していたな。

「それじゃあみんな、仕方がないからして上げようか」

仕方ないと言った感じだが、自己紹介をしてくれるらしい。

「柑ちゃんも大変だよね。それじゃ私から。ハロハロ、私は副会長の如月きげんらぎ天音だよ」

「如月：天音……。ああそーいや、柑條の友達にいたな」

ハロハロ〜とか、なんかいろいろと独特の雰囲気を持っていたから何となく覚えたんだった。

「全くよ。それにしても、隣の席なのに、覚えてないのかしら」

「姉さま、それ、仕方ない事。それでこそ、夜海先輩だから」

何かサラツと、酷い事を言われた気がする。

「確かに、その通りね。それじゃ改めてだけど、わたしは副会長の雪姫ゆきひめ雪乃ゆきの。この子は、妹の月乃つきのよ」

しかも、なんか納得されている。

「書記。姉さまの妹、月乃です。夜海先輩、私の事も、覚えていない？」

お構いなしのようだ。

だが思い出した。雪姫さんって言ったら、ペア学習の時いつも組む人だ。

なぜか他の人からの誘いを断って、いつもペアを組んでくれるもんだから、憶えようかなあ〜って、思っていた人だ。そう言えば何で組んでいるのдар。

ツツキーは覚えている。困っていた所を助けてあげて、その時少し話したら意気投合して、今でもよく話をしている後輩だ。

それに雪姫姉妹と言ったら、姉は美女、妹はマスツコツトで、人気だったはず、多分。

「会計の歌風美音かふうみおです。と言うか先輩、この間助けて頂いた時に、お話ししたばかりですよね」

「そういえば、そんな事があったような」

「先輩にとつては、そんな事程度だったんですね。出来ればちゃんと、憶えていて欲しかったです」

この後輩は確か、真面目で成績優秀者なのだが、たまに見せるドジな所が、可愛らしいと周りの男子が言っていたな。

「最後は引きこもりの書記、赤城莉桜あかぎりおで全員だよ」

柑條の視線の先には、チャットが開かれた状態のパソコンが置いてあった。

「引き籠りなのに生徒会って、おかしい気がするが、なぜ役員になったんだ？」

「それがね、先生がスカウトしたんだって」

俺の質問に、柑條はそう言っ、「詳しい理由は、先生に聞くのが早いよ」と付け足した。

それよか、先生たちって俺以外の人にもスカウトしていたんだな。

あの時は、そんなこと全く言ってなかったのに。

と言うか俺のスカウトのされ方、あれはおかしかった気がする。

まあ、今思い出す必要のない事だが。

「赤城先輩とは、どんな人ですか？」

歌風さんが柑條に、一番気になっていた事を聞いた。

姿が見えないとなると、一体どんな人物か気になってくるものだ。

「それが私たちと同学年という事以外、私も良く分らないのよ。去年同じクラスだった人の話だと、必要な出席日数分は来るらしいけど、ホームルームの時しか見かけなかったって」

「不思議な人ですね。授業で見かけないと言う事は、授業には参加していないと言う事ですよ。それなのになぜ、出席がついているのでしょうか？」

「不思議だよね。あ、あとミー君たちと同じクラスらしいよ」

歌風さんの疑問に対する答えは、如何やら先生のみぞ知る、と言っただころだろう。

そう言えば、後ろの席がいつも空いていたな。てつきり空席なのかと、思っていたが赤城の席だったのか。

「ちゃんと仕事は、して貰えるのですか？」

歌風さんの質問に、柑條は「それは、大丈夫」と答えた。

「議事録と書類整理を中心に、コンピュータ関係の仕事を引き受けてくれるらしいよ」

成程つまりは、その電子系分野を評価されているから、特別枠なわけだ。

それにしても、仕事をちゃんとするか気にするあたり、歌風さんは噂通りの、真面目な人だな。

「あとこれが、メールアドレスだよ。これで、莉桜に連絡取れる筈だから」

柑條は、赤城のアドレスを全員に配った。

そのアドレスは、どこか見たことある気がするものだった。一体、どこだったかな。

「それと会議には、チャットを使って参加するらしいよ」

その事を聞くと、全員納得と言った顔で、頷いていた。

ん？チャット？そうか、思い出した。

珍しくオンラインゲームやっていた時に、何か気に入られて、その時アドレス交換したんだが、それと全く同じだ。

何でも、チャットを開く時そのアドレスをパスワードに使っているとか何とか言っていた。

さて、全員の自己紹介が終わった訳なのだが……。

「さてミー君」

「何でしょう」

聞き返すとそこには、何やら不穏な空気漂わせる人たちがいた。

「えーと、みつくん質問するね」

「先程の自己紹介は、本当に必要だったのかしら？」

「……夜海先輩、本当に、覚えていない？」

「先輩、本当の事言っ下さいね」

「誤魔化したらどうなるか、分かるよね？ミー君」

やばい、結局柑條の言う通り、全員知っていた。しかも、思い出した事がばれている。

こういう時は、経験上買収するのが手っ取早かった。

「全員分の飲物で、手を打たないか？」

「よし、なら今すぐ買ってきてね」

買収に成功した。気が変わらぬ内に買いに行こう。

と言うか、一時離脱しよう。帰って来るまでにどうにかなっていればいいけど……

「よし、ミー君が居なくなった事だし、本題に戻りますか」

「いいの、柑ちゃん？」

ミー君が出っついていて直ぐに、会議を再開しようとして、今度は天音に止められた。

「良いじゃないかしら。自ら買いに行くと言ったのだから。」

「雪乃の言うとおりだよ。それに時間は有限、有効に使って行こうよ」
「確かに、柑ちゃん言う通りかもね〜」

うん、如何やら納得して貰えたみたいだし、会議を続けようかな。
「それじゃあ、みんなは担当したい委員会はあある？」

「委員長を、サポートするだけよね〜。ならどこに就いても、一緒だからなく」

天音がそう言うと、他の皆もどうやら同じような意見みたいで、頷いていた。

「それなら、先生から配置の要望が出ているから、それで良いかな？」

「はい、私は構いません」

「私も、異論はないわ。月乃はどうかしら？」

「私も、異論、無し」

「うん、だったら決まりで良いんじゃないかな〜。そもそも私が、どこでも良いって、言ったわけだしね」

よし、莉桜については殆どこちらで決めて良いと、本人の了承も取れている。これで、一名を除いて満場一致。

「それじゃあ役委員は、先生が準備していたもので。詳しいのは、この紙を見てね」

私は、先生から受け取っていた紙を全員に配る。

「美玖会長、この会議必要なかったのでは？」

「……まあこの後は、ミー君の奢りでゆっくり過ごせるからいいでしょ」

確かに風ちゃんの言う通りなのだけど、私の真の目的は、親睦会を開く事だからなく。

生徒会室でする親睦会って、憧れていたんだよね〜。

でも、風ちゃんって真面目さんだから、反対するだろうなって。

でもどうしても親睦会をしたいから、ミー君の事、利用しちやった

けど、そのおかげで、自然な流れで親睦会が出来そうだから良いよね。ま、知り合いばかりだから親睦会と言うより、お茶会っぽいけどね。あとは、お茶が届くのを待つばかりだね。

飲み物を買って戻って来ると、会議は終わっているようだ。

証拠に机の上には、お菓子が広げてあった。

「いや〜待っていたよ。それじゃ早くお茶にしようか」

「いやいや柑條さん、会議はどうした?」

「それなら、賛成多数で先生の準備したものになったわ」

「結局この会議は、意味の無いものだったのか」

「プリントに詳しい事が書いてあるけど、聞きたい事はある?」

渡されたプリントを確認すると、ペアと担当する委員会、その他注意事項が書いてあった。

注意事項の一つに、妙な事が書いてある。

「柑條、使用条件の『生徒会での使用時は大部屋、委員会での使用時はペアが原則で指定の部屋』と言うのは、一体何のことだ?」

大部屋とか指定の部屋って、何のことだろう?なんか嫌な予感しか、しない状況になってきているような…。

「そのままの意味だよ?校内に泊まり用の寮が在って、そこを使う時の注意点だよ」

「そんなのあったか?」

そう言うと、柑條は呆れた風な顔をしていた。

「やっぱり、憶えてなかったか。体育館に行く道の途中に、木造の建物があるでしょ、あれの事だよ」

体育館に行く途中にある、木造の建物って言ったなら、今じゃ使わない校舎、みたいなやつか。まさかそれが寮とは、思わなかったな。

「まあでも、使うのは書類が溜まり過ぎた時か、行事ごとの時だけだから大丈夫でしょ?」

「いや、大丈夫じゃないだろ」

柑條は簡単に言うが、事は簡単ではないはずだ。何故なら…。

「委員長は、殆ど女子」

ツツキーが言う通り、委員長は殆ど、と言うより全員女子だ。つまり、その中に自分が居るのはおかしいだろ。

「なら私たちは、生徒会で泊まる時だけ心配すれば良いと言う事でしょうか」

ま、歌風さんの反応、それが当然の反応だな。と言うか、ペアが確実に女子ってどうかと思うぞ。

まあ委員会は、仕事を溜めなきや大丈夫だろう。けれど、絶対に余計な事を言うであろう人物が、この場にはいる。

「それなら、大丈夫。ミー君なら、全く危険は無いと思うよ」

そう、柑條だ。付き合いが長いが故に、感覚がマヒしているに違いない。

「そうね、夜海なら大丈夫ね」

と思った所にまさかの、雪姫さんも問題ないと言うではないか。

一体どういうことだ？

「姉さまの、言う通り、安心、出来ます。それに、夜海先輩の事、嫌いでは、無いので」

「柑ちゃんやユツキー、ツツキーの言う通りだよね。みつくんなら、大丈夫。むしろ私は、OKだよ」

「先輩方が、そこまで言うなら大丈夫そうですね」

いつの間にか、歌風さんまで納得してしまった。

何かと、信頼されている様だが、全く持つて心当たりがない。

一体何がどうなったら、こんなに信頼される事になるのだろうか。

自分の事ながら、全く分からない。

「それじゃあ、他に質問はあるかな？」

皆、特にはないようだ。

そりや一番の問題の、ルームシェアに付いては解決したのだから、これ以上の物は他に出る事は無いだろう。

にしても、寮なのだから男子と女子を、分ければいいものを。そうしない理由は、一体何なのだろう。

「無ければ、次回は委員会の委員長と顔合せして、そのまま作業をし終えたら、各自下校する様にね」

「それじゃあ柑ちゃん、今日はもう解散でいいのかな？」

「そうなるね」

如何やら本日は、特に身の無い会議をして終わりらしい。その証拠に柑條は会長として、こう締め括った。

「それじゃあこれにて、本日の業務は終了ね。みんなお疲れさま。

さあ、ミー君が買ってきた飲み物とこのお菓子で、親睦会をしよう！」

第2話 委員会活動

〜生活委員会〜

「これから、生活委員会の会議を始めます。私は、生活委員会委員長にしもとのあの、西元乃彩あです。みんなさん、これから一年間よろしくお願いしま

す」

「アーちゃん、硬すぎだよ。いい？こんな感じにするんだよ」

「アーちゃんの自己紹介、重いなく。自己紹介するなら、親しみやすいのが一番だよね。」

「では、ハロハロ。私は生徒会副会長の、如月天音だよ。生活委員会の副委員長も務めるからみんな、これからよろしくね」

「天音さん、少し落ち着いて。みんな戸惑ってるわ」

「よし、それじゃ出席確認するよ。まずは、一年生からね。A組の人いるかな」

「あ、は、はい、います」

「よし、どんどんいっくよー」

「アーちゃんが何か言っているけど、いいや、次に話を進めよ。」

「ちよ、天音さん待って、ストップストップ」

「点呼していたら、アーちゃんに名簿を取られちゃった。」

「仕方ない、話を聞いてあげよう。」

「なんだい、アーちゃん。私は、アーちゃんのためを思って、会議を進めていたのに」

「天音さん、それは有り難いんだけど、もう少し私の言う事も聞いてね」

「分かったよ。それじゃ出席確認の続きだよ。えーつと、二年B組からだったね、いるかい？」

「何事もなかったかのよう、点呼が続いていく。」

「天音さん、本当に言うこと聞いてくれるのかな？」

何だか、心配になってくた。

天音さんって、掴み所がないって聞いていたんだけど確かに、そうかも知れない。

こんな人でも、成績上位者なのだから、信じられないよ。もしかして、今年の生徒会は変人が多いのかな？

「アーちゃん、終わったよー。あとは、頑張つてねー」

「え、ええ。では、活動内容についてのプリントを配ります。それを見ながらの説明になりますので」

「委員長、プリントならもう、配られていますけど？」

「え？そんなはずは…」

確かさつきまで、ここに置いて在ったはず…一体どういう事？

「プリントなら、私が出席確認しながら、ちやちやつと配つておいたのだよー！」

まさか、さつき私が考えているうちに…

「ほんと、天音さんの行動には驚かされるわ。では、」

「その前に、いい加減そのキャラやめなよ、アーちゃん。今後もそのままだと、疲れちゃうよ？」

まさか、気付いているなんて……

「そうかもね、じゃあお言葉に甘えて。生活委員会の目標は、『いつも大きく爽やかな挨拶が出来る学校』です。そのため今月は、服装チェック期間になります」

天音さんの言う通り、こんな重い感じで続けるより、明るい方がいいかも知れない。

話す雰囲気を少し少し変えただけで、みんなの雰囲気もこんなにも変わるなんて。

私いつの間に、こんな息苦しくなる話し方していたんだろう。

「この事は、クラスの人たちにも伝えておいて下さいね」

「うんうん。まだ固いけど、最初よりはいい感じだよ、アーちゃん。それじゃあ、私からは言う事は、チェック期間の詳しい事はプリントに書いてあるよ。それを見てくれたまえ」

「委員長、それじゃあ今日の会議は終わりですか？」

「ええ、もし質問があれば遠慮しないで聞きに来てね。天音さんから、最後に何か言う事ある？」

「んーっと、そうだね、みんな初めての事もあるだろうから、お互い助け合っっていいこうね」

ほんと、天音さんって変わった魅力がある人なのかも。

だからなのかな？いつの間にか、緊張していたことを知らないうちに見抜かれて、今は最初よりリラックスしていられる。

また頑張ろうって、思えるな。

でも、天音さんのキャラってやっぱり、ブレブレで掴み所がないよ
うな……………

〜整美委員会〜

「えーっとでは、整美委員会を始めます。僕は整美委員長の、姫神ひめがみ菜華さいかって言います。一年間よろしくね。次は、雪姫さんお願い」

「ええ、私は生徒会副会長、雪姫雪乃よ。今回は整美委員会の、副委員長をさせて頂く事になったわ。妹も、生徒会役員だから私の事は、名前前で呼んで貰えると助かるわ」

雪乃さんって、とつてもしっかりした人だね。これなら、早く終わる事が出来そうだね。

「それで、これからどうするんですか」

その後で、雪乃さんと話してもっと、仲良くなりたいたいなく。

「姫神さん？続けてもらえるかしら？」

「あ、ごめんなさい。では、出席確認をします。呼ばれたクラス役員さんは、前に来てください。今回の会議で使う、プリントを配ります」

「それでは一年A組の人、来てください」

危ない、危ない、今は会議中だった。終わってからゆっくり、話を

すればいいだけなものね。恋バナとか、話したい事はいっぱいあるし……つと、今は会議に集中しなきゃ。

「姫神さん、配り終わったわ。会議を続けていいわよ」

「ありがとう。では、整美委員会の今月の目標は『担当掃除場所に行き、しつかり掃除をしよう』です。この事は、クラスみんなに伝えておいてね」

「連絡は以上よ。この後の作業は、自分のクラスの掃除用具の点検・補充をしてもらいます」

「終わったたら、どうするんですか?」

「そうね、ここに私たちが居るから、報告しに来て貰えるかしら。姫神さんも、それでいいかしら?」

姫神さんの方を見ると、何か考え事をしているように見える。

この会議の間、ぼうつとしていている事が多い。

何か考え事をしているみたいだわ。

一体何を考えているのかしら?

「姫神さん?」

「あ、うん。報告が終わったクラスから今日は、終わりにします。では、整美委員会の会議は終了です」

「では皆さん、点検の方よろしくお願いします」

会議は無事に、終わったわね。

あとは、点検の結果を待っただけだわ。

その間に、何を考えていたのか聞くべきかしら。

「雪乃さん、話があるのだけど?」

「同学年なのだから、雪乃でいいわ」

姫神さんも話そうとしていたのね。丁度よかったみたいね。

「うん、なら僕の事も姫神さんじゃなくて、菜華って呼んで」

「分かったわ、菜華さん。それで、話って何かしら?」

「実は雪乃と仲良くなりたくな〜って、思っていたんだ。それでね、点検の報告も終わったたら、二人で帰らない?」

もしかして、会議中何か考えていたのって、その事なのかしら？
会議は問題なく進んだから、良いのだけれど、もう少し集中して貰
いたかったわ。

でもお互いを知る為の提案としては、悪くないかもしれないわね。

「ええ、いいわよ」

「やった、女子トークいっぱいしようね、雪乃」

「ほ、ほどほどにして頂戴ね……」

女子トークとときいて、早速挫けそうになってしまった。

なかなか、そんな会話をする事が無いから、自信が無いのよね。

ちゃんとして行けるかしら……

～保健安全委員会～

「全員おるね。なら、始めよか」

「あの～委員長、その喋り方は……」

ん？さっそく質問やね。

「気にせんでええよ。癖みたいなものやから」

「そ、そうですか……」

この喋り方、いつからしとったかな？

ま、ええか。

「じゃ改めて、ウチは結城咲夜ゆうきさくやって言います。今回は、保健安全委員の
委員長をやらせて貰います。そしてこの子は生徒会書記の、雪姫月乃
ちゃんです。みんな、よろしゅうな～」

「…月乃です。よろしく、お願いします」

月乃ちゃん、緊張しとるのかな？ま、委員長のウチが、しっかりし
とけば大丈夫か。

「じゃあ、手元のプリント見てな～。今月のウチらの目標は『手洗いう
がいをこまめにしよう』や」

「あと、ストーブの管理…」

「そうそう、ストーブの管理もウチらがするからなく。そんで他に伝える事ある？月っち」

「…保健安全委員は、昼休憩に、保健室待機。一月は、三年B組」

「そうやった、昼休憩勤務の事言うのかなあ。」

「えーっと、詳しい勤務日時はプリントに書いてるけど、ようは四月～七月は一年のA～D組、八月～十一月が、二年のA～D組、十二月～三月が、三年のA～D組って事や」

「この先輩、天音先輩と気が合いそう……」

「でも、天音先輩と違って、何だか疲れる。」

「早く姉様たちに、会いたい。」

「なんか、質問ある人おるかな。なければ、今日は終わりや」

「終われるなら、それに越した事は無い。」

「この後、どうしよう。直ぐに家に帰るか、それとも、図書室に寄ってみようかな。」

「うん、なさそうやね。それじゃあ今日の会議はしまいや。皆、気を付けて帰ってな」

「みんなさん、お疲れ様です」

「無事、終わった。」

「これから一年、結城先輩のペースに合わせるとなると、大変そう

……

「みんな帰ったな。よし、ウチらも帰ろうか、月っち」

「私は、寄る所が、あるので、ここで…」

「一緒に帰るとか、言われるのは、困る。」

「さすがに、疲れた。」

「何や、仕方ないな。それじゃあ、また今度にしようかな」

「はい、それでは、今日は、お疲れさまでした」

「うん、お疲れさまな」

「やっと、放れる事が出来た。」

結城先輩といると、なぜか普段より疲れる。

「やつぱり、図書室に行こうかな…」

夜海先輩とも、話したい事あるし。

まだ、図書室にいるかな、夜海先輩……

レク体育委員会へ

「それでは、レク体育委員会を始めるね。八弥は委員長わたぬきの、四月一日八弥やって言います。気軽に、八弥やって呼んでください」

うんうん、いい感じだね、八弥ちゃん。

これなら任させて、大丈夫そうだね。

「私は、生徒会長の柑條美玖だよ。今回この委員会の、副委員長を務めるよ。よろしく」

さて、自己紹介は終わったけど、この後どうするのか？

確かそこまで話す事は、無かったと思うけど……

どうしよう、特に伝える事ですね。

こういう時は、目標言って解散、で大丈夫でしょうか？

ま、やってみれば良いですよ。

「えーっと、集まってもらったんですけど、今日はやる事はありませ
ん」

みんな驚いているなく。フリーズしたみたいに動かないや。

「と言う事で、八弥からは備品を大切に使うように、呼びかけをお願い
するのです」

「え……、それだけですか……他には、無いんですか……」
「うん」

フリーズから戻った子が聞いてきたけど、無いんだよね。

この後どうしよう？美玖さんに任せようかな。

「美玖さん、他にはなかったですよね？」

まさかの行動だよ。

そのまま、丸投げするとは。

「確かに、今日はないよ。けど、今後は備品点検や球技大会、体育祭の時に仕事があるからね」

「だそうです。では今日は、お疲れさまでした」

終わっちゃった。

速攻で帰っちゃった。

仕方ないか、する事なかったもんね。

来月はあるといいな。

「つてこのままじゃ、だめなんじゃないかな…」

誰にともなく呟いた言葉の通り、このままじゃダメな気がするな
……

あ、生徒会のみんなに委員会の様子報告してもらおう為に、明日集まるように連絡しておこう。

みんなはどうだったか、聞きたいしね。

く広報委員会く

「では、これから広報委員会の会議を行う。私は委員長の六むげんりくど幻陸斗だ、よろしく。そしてこの場にはいないが生徒会から、赤城莉桜が副委員長を務める」

「赤城君が副委員長と言う事は、りっちゃん一人でやるの？」

「ああ、そうなる。赤城は一応、学校のホームページを、委員会の仕事としてやるらしい」

ま、実質一人で会議を進めねばならないと言うのは、変わらないな。

全く、なぜ引きこもりなんかが生徒会にいるのか、謎ではあるがまあ良い。

「では、会議を続ける。手元の資料を見てくれ。私たちの目標は、校内の掲示物を充実させる事だ」

「委員長、具体的にはどうするんですか？」

「そうだな……まずは、メッセージを集めようか」

「なるほど、お世話になった人にお礼を言える場を作る訳ですね」

「それに、名前を書かずに出してもらえば、普段恥ずかしくてお礼を言えなかった人も、お礼の気持ち伝える事が出来ますね」

よしよし、いい感じに意見が出てきているな。

「では、今月中にメッセージを集め、来月の中頃掲示板に掲示しよう。何か異論があるものはいるか？」

「問題ありません」

「いいと思います」

とりあえず、賛成多数のようだな。ならこのまま進めよう。

「よし、なら決定だ。今日の会議は以上になるが、何か質問があるものはいるか？」

質問があるか聞いてみると、一年生たちが集まって、何やら話していた。

やがて話がまとまったのか、一人が手を挙げた。

「なんだい？」

「あのお……六幻先輩って女性ですよね？」

「ああ、そうだが、どうした？」

今更どうしたのだろう？

何やら言い難そうだ。

すると別の者が、引き継いだ。

「なぜ、男装しているんですか？」

何だそんな事か。

まあ確かに聞きにくいかも知れないが、別に大した理由じゃないからな。

「そんな事か。こちらの方が、動きやすいからだ」

「りつちゃんたら、またそんな事言つて。学校の時くらい、女の子らしい服装にしなよ」

そんな事を言われても、動きやすいのが一番だ。

「いいだろ別に。校則で女子が男子の制服を着てはいけないと、なつていないのだから。それで、他にはないのか」

本当にそれだけなのか。

ならまあ良い。

「では、終了だ。お疲れさま」

いい感じで終わる事が出来たな。

しかし、男子の制服を着ている事が、そんなにおかしいだろうか？

く学習委員会く

「では、学習委員の会議を始めたいと思います。私は生徒会会計の、歌風美音です。副委員長を、務めさせていただきます。みなさん、よろしくお願いします」

いつも通りすれば大丈夫なはず。

それに美夏咲先輩の、手伝いをすればいいのだから、難しい事は何もないですね。

「噂通り、真面目ちゃんなのね、美音さんつて。まあいいや、私は佐上美夏咲。学習委員会の委員長です。みんなよろしく」

噂って何のことでしょう？

気にはなりますが、今は会議に集中しなくては……

「それじゃ、手元のプリント見ながら聞いてね。美音さん、お願い」
「はい、美夏咲先輩」

確か今日の流れは……あった、これですね。

「では、学習委員会の目標は『一人ひとりが集中し、落ち着いて学習に取り組めるようにする』です。そして、今月の目標は『寒さに負けず、

授業に集中しよう』です」

「美音ちゃん、ありがとね」

役に立てて何よりだけど、本当にこんな感じでよかったのでしょうか…

「美音ちゃん、真面目過ぎるとチャンス逃しちゃうかもよ」

「え…」

考えていたら、先輩が小声で何か言ってきた。

殆ど聞えなかったけど、真面目過ぎとか、チャンスとか言っていた気がする。

あとで、聞いてみようかな…

「今日はしてもらう事は無いから、これで終わるけど、私から一つ。改めてだけど、これからよろしくね」

話が終わりました。

みなさんが帰るのを見送ってから、美夏咲先輩に、先程の事を質問してみましよう。

「気を付けて帰ってね」

「はい、委員長たちもお疲れさまでした」

最後の一人を見送って残るは、私と美音ちゃんだけになった。

「さて、私たちも帰ろうか」

「はい」

うふふっ、アドバイスしてあげた辺りからずっと、質問があるって顔しているな。

「何か聞きたい事が、あるんでしょ？」

「え…もしかして、顔に出ていましたか？」

「うん、バツチリね。それで、何についてかな」

「はい、先輩、噂とか先程のチャンスと言うのは、何の事ですか？」

やっぱりその事か…

「教えてあげてもいいんだけど、やっぱり自分で気付くのが一番かな」
うん、こう言うのは人から教えて貰うんじゃないかって、自分で気づか

ないよね。

「え、教えてくれるんじゃないんですか。あ、ちよ、ちよつと先輩、どこ行くんですかー」

ふふつ、今後どうなっていくか楽しみね。

「ちよつと先輩!! 待っててくださいい。教えてくださいよ」

「そんなに知りたいなら、生徒会の人たちに相談した方が、いいと思うよ」

↳図書委員会へ

「…うん、全員来ているね。それじゃあ図書委員会を、始めるよ。…つて、ミー君本読んでないで、仕事してよ」

うん? いいところなのだが、仕事なら仕方ないか。

「副委員長の古詠夜海、趣味は読書。じゃあ、本読んでいるから、終わったら言っつてね、鷺ノ宮さん」

さて、続き続きつと……

「まったく、ミー君つたら仕方ないな……あ、私は委員長さぎのみやの、鷺ノ宮せんり千里だよ」

ミー君つたら休憩中も本読んでいるのに、飽きないのかな。

「それで委員長、何するんですか?」

「うん、えつとまず目標は、三つ。一つ目が『全校が本に親しめる学校づくり』二つ目が『朝読書を推進する』三つめが『図書館の利用を進める』だよ」

「図書委員としては、最後のだけで十分なんじゃ……」

確かにそうかもしれないけど、学校が決めたことだしね。

「ま、あくまで目標だからね。で、活動は昼休憩の間、貸し出しの管理

をしてもらいます」

まあほとんど、カウンターに座っているだけになりそうだけどね。

「誰がいつやるんですか？」

「それは、渡したプリントに書いてあるよ。今月は3—Bだね。基本私もいるから安心してね」

「わかりました」

「ほかに何か質問がある人はいますか？」

言っではみたけど……特に手は上がらないかな。

「それじゃあ、今日はお疲れさまでした。明日から、よろしくお願いします」

「「お疲れさまでした」」

会議は終了したけど、これから新刊の確認作業があるんだよね。

でもまあ、ミー君が手伝ってくれるし、何とかなるよね。

「ミー君、会議は終わったよ。あとは、新刊の確認作業だよ」

うくん、やっと終わったか。

ちようどいい、この本も読み終わったとこだしな。

「はいはい、それで何冊あるわけだ？」

「確か、十〜二十冊ぐらいだったかな。ほら、さっきまで休んでいたんだから、しっかりと働いてよね」

ならさっさと、司書室に移動して、作業しますか。

と言っでもすぐ隣ののだが…

「そう言えば、今日は何読んでいたの？」

「ん？ああ、タスクから借りたゲーム制作についての本だ。なかなか面白いと思うけど、実際にやるとなると、別物なんだろうな」

椅子から腰を上げ、隣の部屋へ移っていると、読んでいた本の事を聞かれた。

タスクの事は、まあそのうち紹介するとして、今は新刊の整理をしなくては。

「タスク君ね。何者なの、部活掛け持ちの上、助っ人もして、家事も

出来てって。何か女子力でも、負けている気がする」

「気にするな、それより早く確認取って、並べよう」

「……うん、そうする……」

そ、女子力を考えたら、アイツはなぜか高い……

そんなやり取りをしていると、司書室の扉が叩かれた。

「鷺ノ宮さん、お客が来たようだが」

「はあ、ミー君が出てくれる？」

あー、だいぶ根に持っているのかな。

さて、お客さんを待たせるわけにも、いかないか。

「はいはい、今開けますよ。お、ツツキーか」

「ミー君、誰が来たのって……月乃ちゃんじゃん。外は寒いでしょ、中に入ってお出でよ」

「ありがとうございます」

中に招き入れて、座ってもらった。

「そっちの会議は、うまくいったのかい？」

「はい、ですから、会いに来ました」

良かった、会議はうまくいったみたいだな。

ツツキーのこの委員長と言えば確か、結城さんか。

癖が強かったよな、あの人。

「結城先輩、なぜか、疲れます……」

「あはは、月乃ちゃんもお疲れさま。もうすぐ終わるから、読んでいると良いよ」

そう言うと鷺ノ宮さんは、確認し終えた新刊をツツキーに渡した。

「読ませて、もらいます」

平和だね、まったくもって。

そんな事を考えていたら、メールが届いた。

「ん？ツツキー、明日、今日の会議の報告会するってさ」

「分かり、ました」

柑條の奴、一体何考えているのやら……

第3話 報告会

「みんな、昨日の委員会はどうだった？」

「どうだったって、言われてもな」

現在は放課後。

昨日、メールであった通り報告会をするために、生徒会室に集まった。

しかし、言われても特に問題もなく終える事が出来たので、特に報告するような事は無い。

そもそも何で、しようと思ったのだろうか？

「美玖、そもそも報告会をする必要は、あるのかしら。会議の内容はすでに、生徒会のネットワークに提出済みの筈よね」

会議の内容は全て、学校の生徒会専用のネットワークに提出する事になっている。

勿論、委員会の会議の内容も、例外ではなかったはず。

「赤城先輩が『雪姫姉の言う通り、すでに預かっている』と、言っています。と言うか、赤城先輩が管理していたんですね…」

「そんな筈はないよ。生徒会専用ネットワークと言っても、あくまで学校が管理しているものだからね」

と言う事は、赤城の奴ハッキングでもしているのか？

聞いて見る必要があるな。

「歌風さん、どうして知っているのか聞いてみてくれ」

「はい……つて先輩、『学校のネットワーク自体を、僕が管理している。だから知っていて、当たり前だ』って、返信が来ていますけど」

「ハッキングじゃなくて、盗聴しているのかよ」

「『学校のコンピュータ関係は全て、僕が管理を任されている。そこから音を拾っているだけだ。よって問題はない』だそうです」

「大ありだよ」「大ありね」「問題、あり」「ありですね」

女子の意見が揃った。

そして、その通りではあるが、一つ謎が解けた。

赤城が授業に殆ど出ない理由は、学校の機械を通して、授業を聞い

ていたからと言う事。

「ねえねえ、そろそろ話し戻そうよろ。柑ちゃんも、そう思うでしよ〜」

「と、そうだよ。天音の言う通り、話を戻すよ」

そう言えば、話がずれていたな。

赤城の発言の内容が衝撃的だから、すっかり忘れていた。

「で、結局何で報告会をしようと思った訳だ？」

「うん、私が知りたいのは会議の内容じゃなくて、委員長さんの事とか、場の雰囲気とかだよ」

そう言う事か、確かに提出した書類に会議の内容は書くが、場の雰囲気や相手との相性などは書かない。

と言う事は、柑條は何か愚痴りたい様なことがあったって事か。

「うくん。天音さんのここでは、特になかったよ。ユツキーはどうだった？」

「私もないわ。終わってから、菜華さんとお話をしたくらいね」

「お、菜ちゃんと何話したの？」

柑條が雪姫さんの、話にくいついた。

そこまで気になる物でもないと思うのは、俺だけだろうか。

「何と言われても……：しいて言うなら、ガールズトークかしら」

「意外だな。雪姫さんも、ガールズトークをするのか」

「古詠君、失礼じゃないかしら。私だってそれくらいするわ」

「そうですよ、夜海先輩」

しまった、口に出てた。

しかし、本当に意外だ。雪姫さんが話しているときと言ったら、受け答えをしている時しか見た事が無かったからな。

少なくとも、それ以外の話をしているのを、隣にいる限りで聞いた事は無い。

ともあれ、このままでは不味い。

「歌風さんは、どうだったんだ？」

「あ、はい。実は佐上先輩から、私についての噂が在ると聞いたのですが、みなさん何か知っていますか？」

あく、例の真面目とか何とかの奴か。

別に教えてもいいと思うが、なぜその佐上と言うやつは教えなかったんだ？

「風ちゃん、佐上さんは他に何か言っただけでなかったかな？」

「え〜っと確か、チャンスが何とかと。あと、自分で気づいた方がいい、どうしても気になるなら、生徒会の人に聞いてみると良いと」

「あく、なるほど。ミー君と風ちゃん以外集合」

そう言うのと、集まって何か話し出した。

俺はなぜ、外された？まあ、いいけど。

「古詠先輩は何か、思い当たる事ありますか？」

同じく外された、歌風さんが聞いてきた。

どうするか、こう言うのは女子同士で話して解決して貰うのが一番かな。

となるとやっぱり、俺が言うべきでは無いだろう。

「噂って、色々あるからなく。いちいち、自分の利益になりそうにないものは覚えてないな」

「変な所で、ブレませんよね、先輩って……」

まあ、それが俺だからな。

そうこうしているうちに、話がまとまったらしい。

「風ちゃん、私たちの意見は、そのうち分かるから、今は気にしないのが一番、って事だよ」

「はあ、分かりました」

「それでなんで、俺は外されたんだ？」

「先輩は、知らなくても、いい」

うーん、結局分からずじまいだが、まあ良いか。

「そう言えば、月ちゃんは如何だった？」

「結城先輩、良くしゃべる。だから、とても疲れた」

「あく、結城っつちか。ま、悪い人ではないと思うよ〜」

「そうだよ、天音の言う通り。テンションは、天音にも負けないから大変かもしれないけど……」

ツツキーを見てみると、すでに納得済みのようだ。

まあ、納得しているならいいが、テンションが高い奴と一年間組むのは、俺は出来ねなあ。

「そう言えば柑條、お前はとうだったんだ？何かあるから、始めたんだろ」

「そうだよ、そうなんだよ」

あ、こりやあ大した話じゃなさそうだな。

「特に何もせずに、終っちゃったんだよ。八弥ちゃんに、殆ど丸投げされて、終わったんだよ。だから、みんなはどうだったのか聞こうと思つて」

「はいはい、分かった分かった。ようは、会議らしい事も話し合いも無かった事が、不満だった訳だ」

大体こんな事だろうとは、思っていた。

「だって、丸投げされているんだよ」

「それは、頼られていたって事だろ」

と言うか、柑條の話に付き合わされるのは、もう慣れているから、あしらい方も手馴れてしまったな。

「むー、そう言うミー君は、とうだったの？何かないの」

「ないな」

「言い切ったわね」

「まあ、古詠先輩ですからね」

そう言われても、無いものはない。

結局昨日の会議は、ずっと鷺ノ宮さんに任せて、本を読んでいた。

「いやな、会議が終わってからは、新刊のチェックをしていただけだし。まあ途中、ツツキーが来たけど」

「あら、そうなの月乃？」

「はい、新刊、読ませて、貰いました」

「まあそういう訳だ」

これが事実なのだから、これで納得してもらうしかない。

途中で鷺ノ宮さんが、輔の男子なのに女子力が高いと言う現実に負けそうになっていたが、言うほどではないだろう。

女子の名誉的に……………

「ならいいや。今日はこのぐらいにしようか。明日も会議があるし」
ん？今日は？明日も？

「ちよつと待て、今日はって、どういう事だ。明日もっていったい……」
「ん？今日は報告会であって、正規の生徒会の仕事じゃないんだよ」
と言う事は、あれか。わざわざ、柑條の疑問解決のために、居残りをしたのか。

「って事で、明日改めて会議を開きます。内容は、リーダー研修会とボランティア活動について」

「分かったよ。それにしても、面白い話も聞けたし、良かったよ」

「確かにそうかもね。莉桜について少し、知ることが出来たものね」

「さすが、チータ先輩」

「ですが、少し考え物だと、思いますよ」

他の役委員たちは、放課後に残らされたことを、気にする様子がない。
い。

俺の感覚がおかしいのだろうか。

早く帰って、本が読みたかったのに……

「まあ、今日はこれで解散ね。みんな、お疲れさま」

結局、今日は一体なんで集まったのか。

報告会というより、駄弁りに近かったな……

第4話 研修会とボランティア

「みんな」苦労様。今日は昨日言っていた通り、リーダー研修会とボランティア活動について話し合うよ」

昨日に引き続き、会議が開始された。

今日こそ、早く終わりたいな。

「それで？具体的に如何するんだ？」

「うん、先ずはリーダー研修会について。これは、私と副会長、あと一人で行く事になるんだけど……雪乃と月ちゃん、頼めるかな」

「ええ、かまわないわ。月乃は、どう？」

「はい。大丈夫、です」

「一体どういう、人選なんだ？ツツキーが悪いとは言わないが、ここは歌風さんの方が適任だと思うが？」

他校と交流がある事を考えると、真面目で頑張りやな歌風さんの方が、良いと思っただのだが。

「まず、雪乃な理由は単純だよ。天音は、ああいう場に合わないから」

「うんまあ、分かる」

「ちよつとちよつと、酷いじゃないか。天音さんだって、やる時はやるよ。……多分」

うん、やつぱ駄目だろうな。

「それで？ツツキーな訳は？」

「書記の人を連れて行きたいと思ったんだけど、莉桜は出て来ないから、月ちゃんにしようかな。……つて」

何とも返答しづらいな。

確かに、莉桜は出てこないし、来たとしてもコミュニケーションが上手く取れるのかが、未知数だ。

いや、取れそうにないか。

「あと、姉妹の方が連携取り易いだろうしね」

「確かに、連携は取れるだろうな。人選については、分かった。それで、研修会で何を話してくる訳だ？」

「議題は二つ。一つは『尾道しぐさ』について。もう一つが『街づくり』

「についてだよ」

成る程な、ここでもう一つの議題のボランティア活動が関わってくる訳か。

「中学生に、一体何を求めているんだろうね。退屈そうだよ、行かなくて正解だよ」

「天音先輩、そんな事言わないで下さい。会長たちが研修会に行っている間、私たちも仕事がありますよ」

「え、めんどいよ。みつくんも、そう思うよね」

同意したいところだが、歌風さんや雪姫さんたちの威圧感と言うか、まあ逆らえそうにない雰囲気がある。

「ミー君。分かっているよね？」

うん、やっぱりそう言ってくるよな。

「分かっているよ。それで、その二つの議題とボランティア活動が関係して来るのか？」

「その通りだよ。どちらの議題も、町のために中学生が、何が出来るかを話し合おうんだよ」

「要はそこで、ウチの学校は何をしますって、宣言するんだね」

「天音の言う通り。そこで、ウチは何をしていくかを話し合おう！」

「でも会長、ボランティアをするのは、決まっているんですよ？」

「そうだよな、そもそも前もって言っている以上、ある程度は決まっているって事だろう。」

「うん、暁先生が『この方が、貢献していますよって、感じが出るだろう』って」

「相変らず、とんでもない事を言い出す顧問ね」

「でも、する事はしっかりしているよね。私は、嫌いじゃないよ」
暁先生か。

本当に仕事をしているのか、疑いたくなる行動が多いが、しっかりとこなしており生徒からの人気も高い。

そう言えばその、生徒会顧問の暁先生は、来ていないな……

「その暁先生は、何処にいるんですか？」

「いうだけ言って、技術室に行っちゃった」

「あれ、あの先生って、技術の先生だったか？」

「暁先生は、世界史の教師だよ」

「じゃあなんで、技術室に行ったのだろう？」

「何でも、趣味で色々と作っているみたいだよ。で、発明品は生徒にあげたり、学校のどつかに置いてあるらしいよ」

「自由な人だな。まあ人の事言えそうに無いが。」

「そ、そうですか……。まあ、ボランティアをすると言うのは、確かにいいと思います」

「そうなのよね。理由や行動はともかく、意見としては真面目なものなのよね」

「と言う事で具体的に、ボランティアで何をするかを決めたいんだよ」

「そうだね、無難にゴミ拾いとかな」

「フムフム。あ、月ちゃん、ボードにメモよろしく」

「分かりました」

「そう言うところツツキーは、ボードにメモを書き始めた。」

「ほかに何かないかな？」

「募金はどうかしら。地域活性化のためには、資金が必要になるもの」
「却下だ。資金が必要と言うのは分かるが、直接集めるのはどうかと思うぞ。それにこの場合、募金をボランティアと言って良いのか？そもそも、俺が払いたくない」

「絶対に払いたくない。」

「何でこんな事で、金を出さないといけないんだ。」

「即答ですね、古詠先輩。そこまで払いたくないんですか……」

「あはは……。ミー君って本を買う為に、お金を使っているから、余計な事で使いたくないんだろうね」

「そう言う事ですか。それじゃあ先輩、否定するなら、何か良い案があるんですよ」

「無くはないが、どこまで足しになるかは、分からないから……」

「アルミ缶って、確か金になっただろ。これならゴミ拾いと資金集めの、両方が出来るだろ。まあ、どれだけになるのかは、分からないがな」

「成る程く。確かにそれなら、地域貢献しながら、資金を得ることが出来るね」

「なら、ウチはアルミ缶回収って事でいいかな？」

いつの間にか流れが、アルミ缶回収をする流れになってきているな。

本当に、これで良いのだろうか？

「いいと思うよ。ただゴミ拾いをするよりは、面白そうだよ」

「ええ、私も良いと思うわよ。これならわざわざ拾いに行かなくても、生徒に家を出たアルミ缶を持って来て貰えば、効率よく集められるでしょう」

「はい。クラス対抗にすれば、参加してくれる生徒が、さらに増えると、思います」

「そうですね。そうすれば、資金もより集まると思いますよ」

「よし、と言う事は、アルミ缶回収をするんだな」

「うん、そうだよ。これで決定……って、暁先生?! いつの間にいたんですか?」

見るといつの間にか、部屋の入口のところに、暁先生が居た。

全く気付かなかったな。

どうやら、雪姫姉妹と歌風さんも気付いてなかったようだが、如月さんは違うようだ。

「私が、『無難にゴミ拾いとかどうかなく』って言った頃から居たよ」

「流石如月、気付いていたか」

「もちろんだよ。って言うか先生も、私が気付いている事、知っていたでしょ」

「まあ〜な」

何て言うか、あれだな。

きつと波長が合うのだろうか……

「さあて柑條、そんじゃアルミ缶回収で話を進めるんだな」

「あ、はい。そうです」

「それじゃあ、俺は上の人らに伝えて来るからな。そろそろ切り上げて、家に帰れよ」

そう言うとき先生は、部屋から出て行ってしまった。

「結局何で、来ていたんだ？」

「「さあ？」」

何で気付かなかったのかとか、何をしに来たのかが全く分からなかったな。

「ん〜？実験しに来ていたみたいだよ。何の実験かまでは、教えて貰えなかったけどね〜」

触れない方が良さそうなく、きつと……

その意見に、他の人も賛成だったのだろう。

特に突っ込む事なく、話を切り替えた。

「それじゃあ、まとめるよ。研修会に行くのは、私、雪乃と月ちゃんの三人」

「ええ」「はい」

「議題一で、ボランティアをする事を、議題二で、活動資金を集める為に、アルミ缶回収をする事。で、私たちが行っている間に、ミー君たちはその間に平和慰霊祭で吊るす千羽鶴を作ってね」

「ん？平和慰霊祭って夏休みにあるだろ？もしかして、研修会って夏休みにあるのかよ」

「言って無かったけ？そうだよ。発表内容を提出しないといけないから、早めに話しておく必要が合ったんだよ」

そうですか……わざわざ先の内容の事を話し合っていたのかよ

……

「夜海先輩、どんまい」

何かツツキーは、察したように言ってきた。

「ミー君の落胆はまあ、何時もの事だからほっとくとして、しばらく会議は無いから、自由だよ。何かあったら、そのつど連絡するから。じゃあ、お疲れさま」

第5話 庶務と会長

最近休憩を、生徒会室で過ごす事が多い。

作業が無くても、部屋を使う事は出来るので、静かに本を読むのは丁度いい。

教室だと周りがうるさくて、落ち着けない。

そんな訳で、今日も生徒会室に来て本を読んでいたんだが……

「ミー君、その書類取って〜」

「はいはいっと、これか？」

「うん、ありがと」

確か、仕事は無いって聞いていたんだが……

「柑條、仕事は無いんじゃないか？」

「うん、会議は無いけど、雑務はあるよ」

そう言うと、先程渡した書類を見せてきた。

よく見るとそれは、使用許可書と書かれた紙だった。

「他にも、備品申請書とかもあるよ」

「それは分かったが、何で昼休憩にしているんだ？」

わざわざ休憩時間にしなくても、放課後にすればいいのに。

「そもそも、雑務って事は俺の仕事だろ」

「そうかも知れないけど、私たちの仕事とも言えるんだよ。ま、そんなに気にするのなら、手伝ってよ」

「休憩時間は、休む時間だろ。頼まれたら、別だがな」

俺の基本スタンスは、最低限やり切るか頼まれたらやる。

頼まれた場合、最後までキッチリとやり切る。

まあ、よほどの事が無い限り、頼まれると言う事も無いが。

「それじゃあ、昼休憩の内に終わらなかつたら、放課後に手伝ってよ」

「まあ、それは良いが、そこまで無いだろ？」

見た限りでは、殆ど終わっている気がするが。

「申請書が終わったら、今度は生徒会室の掃除をしておかないと。来週にはまた会議が在るからね。こういう時に、しておかないとする暇が無いからね」

と言うと、最後の一枚に手を付けた。
ほんと、柑條つて昔からよく働くよな。

こう何て言うか、みんな中心になって、みんなのために何かする……人のために何かが出来る人って言うのかな。

「俺には、出来ないな……」

思わず、小さな声でそんな事を言ってしまった。

「ミー君は、ミー君のままでもいいよ。知っているよ、ミー君が陰から人を支えていること」

すると、最後の一枚を終え、柑條は此方を見ながら諭すように言ってきた。

「前にも話した事があったよね」

「そうだったかな」

「そうだよ。周りからは目立たない仕事、けれどそれが出来ていないと上手くいかない事もある。そんな目立たない仕事は、誰もやりたがらない。だって、評価される事は殆ど無いのだから」

だろうな。そりゃあ、誰も見ようとはしない、と言うか気にも留めない様な事が殆どだろうから。

「でもミー君は、そういう陰から支ええる仕事を進んでやっている。だから私は、いや私たちは、安心して進めることが出来るんだよ」

「そんな大層な事は、していないよ。自分が気に為ったからやったとか、そんな感じだ」

「例えそうであっても、少なくとも私は感謝しているんだよ。だから、気にする事なく、ミー君が出来る事をすればいいんだよ」

昔から、人の事をよく見ている奴だな。

こんな奴だから信頼されて、着いて行く奴いるんだろうな。

ま、今では俺もその一人って事か。

「雑務は終わったんだろ？だったら、掃除は俺がしておくよ」

「私もするよ。一人より、二人の方が早く終わるでしょ？」

「そうかい。じゃ、放課後にな」

「うん、放課後にね。あ、ミー君。いつかは昔みたいに美玖って呼んでよ」

そう言うと、柑條は教室に戻っていった。

第6話 放課後

「それじゃあ、掃除を始めよう♪」

「おう！」

現在放課後、予定通り掃除をする事に為ったのだが……

「夜海、何ボーっとしていいのかしら。早くしないと、日が暮れるわよ？」

「そうですよ、古詠先輩。早く働いて下さい」

「なあ柑條、何でみんな居るんだ？」

生徒会室には、赤城を除いた生徒会役員全員が来ていた。

「一人より二人の方が良いって、言ったでしょ？だから、全員で掃除した方がもつと、早く終わるでしょ？だから、読んじやった♪」

確かに一人より二人と話はしたが、まさか全員でやるなんてな。

結局、いつも通り放課後に全員で集まっているな。

「夜海先輩、早く終わらせて、お話しませんか？」

「そうだぞ、みつくん。早く終わらせて、遊ぼうではないか！」

何か目的がずれている人もいるが、まあ良いか。

「ま、時間も勿体無いから、始めるか」

「おー！」

こうして、生徒会室の掃除が開始された、のだが……

「で、生徒会室の掃除って、何やるの？」

「柑ちゃんが知らないなら、私も知らないよ？」

「普通に部屋を掃いて、ゴミを取ればいいじゃない？悩む必要はないはずよ？」

「そうですよ、会長。それに、他に何かありましたか？」

「そうなんだけど……ほら、こんなに人が居るのに余っちゃうから……」

そうだろうな。生徒会室はそこまで広くはない。

普通教室の半分在るか、無いかぐらいだ。

掃除するにしても3〜4人居れば十分だろう。

さて、これから如何するのやら……

「そう言う事ね。それなら大丈夫よ、詳しい人がここには居るから」
「成る程、確かにそうだね」

へえ、そんな人が居るのか。掃除に詳しい人って一体……って、
何でこちらに視線が集まって来ているんだ？

「夜海、あなたの出番よ」

「俺なのかよ！」

「？他に適任者は、居ないと思うのだけど？」

「その通りだと思いますよ、先輩」

確かに、暇な時に備品の配置を変えたりして、簡単な模様替えをし
てはいる。

けれどそれが、掃除に詳しいと言う事に繋がるとは、思えないのだ
が……

「夜海先輩」

「ん？ツツキー、如何した？」

「物は、試し。指示を、出してみても、下さい」

ん〜まあ、このまま時間を食うよりは良いか。

「それじゃあ、柑條は窓拭きを頼む。雪姫さんは床を掃いてくれるか
な。如月さんと歌風さんは、ゴミ捨てに行ってきた。ツツキーは俺
と、備品のチエックをしてくれるかな」

「お〜！流石、ミー君。裏方の仕事に慣れているね。よし、それじゃあ
改めて、掃除を始めるぞ〜」

「そうね、始めましょうか」

「よくし、フーちゃん。ゴミ捨て行くぞ〜」

そう言うのと、如月さんは部屋を飛び出て行った。

今の指示で納得したのか？

「あ、待って下さい、天音先輩！先輩、これって、天音先輩の監視役を
押し付けた訳では無いんですよね」

歌風さんが、確認を取ってきたが、うん、歌風さんの言う通り、監
視役なんだよね〜。

そんな訳で、思わず顔を背けてしまった。

「やっぱりそうなんです。酷いですよ、古詠先輩！」

「悪い、今度歌風さんの言う事一つ聞くから頼むよ」

「むう、分かりました。その言葉、絶対忘れないで下さいよ」
「もちろんさ」

ほんと、悪いと思っている。

けど、如月さんを一人で行かせると何が起こるやら。

自由と言うか、掴み所が無いと言うか……まあ、そう言う人にはお目付け役が居た方が安心できるしな。

「夜海先輩、早く作業、しましよう」

「ん、ああ、そうしようか」

この後指示のお陰かは分からないが、滞りなく掃除を終える事が出来た。

第7話 送る会の準備

「それじゃあ、今日は三年生を送る会と、卒業式の準備をするよ!」
「いつにも増して、張り切ってるね、柑ちゃん」

柑條が張り切るのも無理はないだろう。

この学校では卒業式の前に、在校生たちが『三年生を送る会』と言うものを開く。

これは日頃お世話に為った先輩方へ感謝を伝えるとともに、卒業を心から祝福する会なのだ。

この会は生徒会執行部を中心に、企画・運営をしていく。

よって柑條はいつにも増して張り切っている訳だ。

「三年生を送る会とは具体的に、何をするんですか?」

そういえば、ツッキーと歌風さんは初めてか…

「簡単に言うと、三年生を送る会は執行部を中心に、在校生が卒業生に感謝を伝える場だよ」

「成る程。執行部を中心に準備するから、会長は張り切っているんですね」

「そう言う事だな。それで柑條、何をするのは決めてあるのか?」

まあ、毎年在校生が歌を送るのは決まっているから、他に何をするかを決めるだけだけど。

「うん!ビデオレターとメッセージツリーをしたいなー、って思っているの!」

「良いんじゃないかしら。内容は如何するつもりなのかしら?」

「ビデオレターは各部から先輩たちへのメッセージで、ツリーは掲示板にメッセージを貼っていいこうと思っっているよ」

成る程な。

ビデオレターはサプライズとしては申し分ないし、メッセージツリーは単純明快なお祝いを示すのには丁度いいだろう。

「ここまでで反対な人はいるかな?」

今更ながら、このまま進めても良いかの確認を取ってくる。

「よく考えてあるし、良いじゃないか?」

俺は別にいいと思う。

そもその所で、お世話になった先輩が余り居ない。

人付き合いが得意じゃないし、居たとしても余り憶えていないだけかも知れないが。

そんな訳だから、他の人が納得できるものになれば俺はいいかな。

「面白そうだし、私は賛成だよ」

「私も問題ないわよ。月乃は如何かしら？」

「ハイ。私も、良いと、思います」

「私も良いと思いますよ、会長」

如何やら他の人たちも賛成のようだ。

ま、気持ちを伝えるならビデオレターやメッセージにするのが、一番良いだろうしな。

「でも確か送る会まで後、三週間ぐらいしか無いですよね？メッセージは大丈夫だと思いますけど、ビデオレターは間に合うのですか？」
「そうだね、部活の都合を考えると、撮影期間は二週間だと、会場準備と通し練習もあるだろうから、一日以内で編集しないと厳しいかな」

「そうなると、編集の出来はかなり低いものになりそうですね」

「そうね……確かに、私たちが撮影して編集する事を考えると、間に合わないかもしれないわね。月乃、あなた確か編集出来たわよね？」

「姉さま、私では、間に合わないかと……」

「そうだよな。」

よく考えると、撮影は出来ても編集となるとそれなりに編集ソフトを使いこなせないといけないだろう。

俺はそこまで機械に強い訳では無いし、困ったな……

悩んでいると、チャットに連絡が入った。

「ちよつと良いか？赤城から連絡が来たぞ」

「赤城先輩、現状を知っているんですか？」

「チータは、盗聴で会議に参加しているからね」

「そうでした……」

そう言えばそんな事、言っていたよな。

それが許されている学校ってどうなのだろう…

「それで、莉桜は何って言っているの？」

「ああ、『編集は僕に任せろ。一日あれば、編集程度余裕だ』ってさ」
よく考えたらそうだろうな。

管理を任されるぐらいなのだから、本当に余裕なのだろう。

「なら、解決だね。メッセーヅリーのメッセーヅは、明日各クラスに連絡して、出来たら先生に預かって貰う事にしよ。ビデオレターも明日各部の都合を聞いて、取り始めよう！」

こうして準備した、三年生を送る会は無事成功した。

その時の出来事は、また別の機会で話そう。

第8話 入学式

「それじゃあ今日は、明後日ある入学式での役割の確認をするよ！」
もうそんな時期なのか。

学年も一つ上がり、三年生となって今日で三日。

明後日には新一年生が入ってきているのか。

「それで、柑ちゃん何するの？」

「天音、何だか眠そうだね？」

「ん、暖かくなってきたからね。寝ちやう前に早く終わらせよ」

こいつは、相変わらず自由だな。

まあ、暖かくなって来ていて眠くなるのは分かる。

「話を続けましょう。私たちは一体、何をするのかしら？」

「うん、私たち生徒会役員は当日、受付の作業をする事にしているの」

「会長。分担は既に、決まっているんですか？」

「えーっと、私が新入生に歓迎の言葉を、天音と雪乃は来賓の受付と案内を、ミー君が月ちゃんと風ちゃんと一緒に保護者の受付の案内をする事にしているよ。他に、質問はあるかな？」

「私は…ないよ」

そう言うと、如月さんはパタリと倒れこむ様に寝てしまった。

そこまで眠かったのか。

「私も問題ないわ」

「姉さまと、同じく」

「はい、私も大丈夫です」

「俺も問題ない。それにしても、もう入学式か。オープンスクールが懐かしいな」

「そうだね。オープンスクールは前年度の執行部と一緒にやった、唯一の行事だもんね」

柑條の言う通りオープンスクールは、引き継ぎを行なう前に前年度の生徒会と一緒にやった唯一の行事だ。

一緒に活動する事で、執行部の活動を理解してもらおう事が目的だっ

たらしい。

簡単に言えば、お手本を見せて貰ったって事だな。

「それに、あの時は大変だったね。特にミー君が」

「そうね、夜海は特に、大変だったでしょうね」

「それは、言わないで貰えるだろうか。俺自身、ビックリな出来事だな」

ほんと、あの時は焦った。

まさかアイツがオープンスクールに居るなんて思いもしなかった。

「会長、何があっただんですか？私と月乃ちゃんは、別行動でしたから良く分からないのですが？」

みると、ツツキーも歌風さんの発言に頷いていた。

「ん、何て言ったらいいのか？」

「そうね……」

「言うなよ。どうせそのうち分かる事だが、今は気にする様な事じゃない」

と言うか、俺自身あの時の状況は良く分からない。

何と言うか、久しぶりに会ったらああなったとしか言えない。

「先輩。そのうち、教えて下さい」

「ま、本人が居る時にな。その方が、話が早いから」

オープンスクールであつた事は、また機会があつたら話そう。

だが今は、入学式の話を進めなければな。

「で、柑條。前日準備でする事はあるのか？」

「あ、忘れるとこだった。フーちゃん、莉桜は今チャットにログインしているかな？」

歌風さんは柑條に言われてチャットを確認し始めた。

赤城にもちゃんと、仕事が在ったのか。

アイツも出て来るのだろうか？

「はい、ログインしています」

「じゃあ一応、広報委員会の人たちに入学式の前日に、一年生の教室の飾り付けをお願いって、伝えておいて」

『了承した』だそうです。相変らず、聞いているんですね……」

早いな、さすが赤城と言うべきなのかな。

いつかは、顔を見てみたいものだが素直に出て来る訳ないよな。

「雪乃は整備委員の人たちに、広報部の手伝いと一年生教室の掃除を伝えておいて」

「分かったわ」

「その他の人たちで、会場の準備をするからね。他に何か、聞きたい事はあるかな？」

眠っている者を除き、全員大丈夫そうだ。

っていうか、如月さんは熟睡しているな。

「それじゃあ今日は、解散だよ。みんな、明日も頑張ろうね」

第9話 生徒総会

「それじゃあ今日は、生徒総会で取り上げられる質問・要望の回答を考
えるよ！」

今回は近々行われる生徒総会での、質問・要望の回答を考えるらし
い。

考えるのは良いが、どこで総会を開くのだろうか？

「でも会長。今年は何処で開くんですか？確か体育館は、耐震工事中
でしたよね？」

歌風さんの言う通り去年まで総会を開いていた体育館は今、耐震工
事のため使用できないのだ。

タイミングが悪かったとしか言えないのだが、まあ学校のスケ
ジュールがあるからなく

「それなんだけどね、今回は校内放送を使って総会を進める事に為っ
たよ」

「成る程、じゃあさっさと回答を考えるか」

人前に立つ必要が無いなら、堂々と原稿を見ながら進める事が出来
るから楽でいいな。

「それじゃあ一つ目の要望はこれだね。『休憩中に使用できるボール
を増やして欲しい』理由は、『数が少なくて足りないから』だって。
さあ、回答を考えようか」

柑條は一つ目の要望を読み終えると、意見を求めてきた。

けどこれって、生徒会が答えるべきか？

どちらか言くと、専門部委員会の様な気がするが……

「柑ちゃんこれって、レク体育員会の人が考えるべきじゃないかな
？」

「そうね、そうなると担当の副委員長は確か……」

「美玖先輩、どうぞ」

そう言くと、全員の視線が柑條に向いた。

まあ要望の内容が、専門部委員会に対してだからそうなるよな。

「そうだね、『ボールの未返却や紛失があるので、増やす事は出来ま

せん。皆さん、譲り合って使用しましょう』かな」

「次に行くか。えーっと、『掃除時間に流れる音楽を、変えて欲しい』理由は、『新しい気分で掃除がしたいから』だよ」

俺が今読んだものも、専門部委員会あてだな。

内容からするに整美委員会あてだ。となると、次は雪姫さんだな。

「ユツキーの答えはいかに？」

「そうねえ、『変える方向で、検討していきます』かしらね」

流星だな。

変えますじゃなくて『変える方向で、検討します』か。

これなら、今すぐにはないが変える気はあると言う事を伝える事が出来る。

「よし、次に行こうか。『窓に網戸を付けて下さい』理由が、『虫が入って来るから』だっつ〜」

如月さんが読んだ要望は、学校全体の問題だな。

「あ〜、分かるよ、ほんとよく虫が入って来るよね。よし、『すぐに取り付けます』」

「良いんですか、会長？これって先生方にも話を通す必要があるのでは？」

「あ、そうだった。それじゃあどうしよう…」

歌風さんの言葉を聞いて、柑條は考え込んでしまった。

柑條の意見は分かる。

だがこの場合は、歌風さんの意見が正しい。

取り付けの工事をする事に為るのだから、先生にも話す必要がある。

「先生に設置の相談をし、検討中であることを伝えればいいんじゃないかしら？」

「それだ！雪乃、ナイスだよ！えっと、次でラストかな」

「はい。『部室のドアのカギを直して欲しい』。理由、『着替えている時に勝手にドアが開くから』だ、そうです」

「これもさつきと同じ様に、『先生方と相談し、検討して貰います』でいいだろう」

「そうだね。質問・要望の回答はこれで良いかな」

「ええ、大丈夫だと思うわ」

柑條の問いに答えた、雪姫さんの言葉に全員頷く。

「それじゃあ、進行役は天音と月ちゃん、生徒会代表あいさつが雪乃、生徒会方針案・年間行事案についてミー君、各専門部・委員会活動について私が、生徒会会計予算案を風ちゃん、質問・要望の回答の回答を私と風ちゃんで行るよ」

これで、今日の内に決めておくことは全部終わっただろう。

回答を考えるとと言っても、半分は先生に相談が必要な案件だったけどな。

「それじゃあ、今日はこれで終了だよ！みんな、お疲れさま！」

第15. 5話：Extraく七夕祭りく

「遅いですよ、夜海先輩！早く行きましょう！」

今俺は歌風さんと一緒に、商店街の七夕祭りに来ていた。祭り自体は嫌いでは無いが、あまり進んで行きはしない。

なぜなら人混みが好きじゃないからだ。

よって普段は友人に誘われない限り、行きはしない。

まあ友人も、そこまでいないが……

そもそも何で歌風さんと祭りに来ているかと言うと、その理由は数日前まで遡る。

「夜海、お客さんが来たわよ」

昼休憩、今日は本を読まず昼寝をしていたところ、雪姫さんに起こされた。

来客らしいが、生憎心と辺りは無い。

「一体誰さね。人が寝ている時に……」

「美音よ。話があるって言って待っているわよ？」
はて？何の用だろう？

俺一人が呼ばれたと言う事は、生徒会関係ではないのは確かだよな。

不思議に思いつつ、教室から廊下に出るとそこには、歌風さんが居た。

「休憩中にすみません、夜海先輩」

「気にする事は無いよ。それで？何の用だい？」

「先輩、約束は覚えていますか？」

不安そうに、こちらの表情を窺う様に歌風さんが聞いてきた。

約束？そう言えば、前に言う事一つ聞くとか言った気がするな。

「ああ、もしかして生徒会室を掃除した時のかな？」

「そうです！良かった。ちゃんと覚えていたんですね」

そう言うのと歌風さんの表情が明るくなった。

俺ってそんなに覚えてないと思われているのか…

まあ記憶力が無いって、自分で言っているからなく

と言うか、その件で来たって事はお願いが決まったって事か。

「ん、それで決まったのかな？」

「はい。夜海先輩、今度商店街である七夕祭りに、一緒に行って貰えますか？」

まあ約束だし、その位だったら問題ないだろう。

「いいよ。それで合流する？」

「駅の銅像前に十七時集合で、どうでしょう？」

「K。それじゃあ当日はよろしくな」

「はい！よろしくお願います！」

そう言うのと歌風さんは嬉しそうに、教室に帰っていった。

「先輩？何か考え事ですか？」

いつの間にか歌風さんが隣へ来ていた。

今日の彼女の服装は、青色をベースに朝顔の柄が入った浴衣姿だ。

しかし女子が浴衣を着ていると言うのは、何と言うか良いな。

今まであまり考えた事が無かったから、とても新鮮な印象を持つと

言うか……

何とも言えない良さがある気がする。

「いや、歌風さんがそんな風に、はしゃいでいるのが珍しかったからな」

それに普段真面目な歌風さんが、こんな風に楽しそうにはしゃいでいると言うのが、珍しく見えたのだ。

「そ、そうですか。お恥ずかし所をお見せしました」

「いや、可愛らしくて良かったよ」

「……そう言うの、ズルいですよ、先輩……」

「ん？何か言ったか？」

「いえ、何も言っていないですよ。それより早く行きましようよ、先輩」

おかしいな？何か言っていたと思ったのだから？

まあ本人が何も言っていない、と言うのだから言っていないのだから。

せつかくの祭りだし、目一杯楽しむか。

そう思い歌風さんに手を差し出した。

「そうだな。久しぶりの祭りだし、色々見て回るか」

「えっ…は、はい！」

逸れないよう差し出した手を、歌風さんは一瞬戸惑いながらも掴んだ。

私はしばらく、夜海先輩と一緒にお祭りを見て回りました。

商店街でやっている祭りなのでそこまで規模は大きくはありません。

「そろそろ帰ろっか。あまり遅くなったら、家の人心配するだろう？」
それに、楽しい時間とはすぐに過ぎてしまうものなのですね。

「そうですね……あ、先輩、最後に短冊を書いて行きましょうよ」

私が見つけたのは短冊に願い事を書き葉竹に飾ることが出来る場。せつかく七夕のお祭りに来たんですから、願い事を書いておきたいですね。

「そうだな。ま、書いておくか。叶わないだろうけどな……」

「そう言うのは、思っても口に出さない方が良いでしょう、古詠先輩」
でも、そう言うのが先輩らしいですけどね。

そんなやり取りを先輩としながら、短冊を書き飾りました。

「歌風さんは、何をお願いしたの？」

「え……ひ、秘密ですよ。それは」

帰りの途中で先輩はそんな事を私に聞いてきます。

私は、思わず秘密にと言ってしまうました。

だって、願い事を人に言うって恥ずかしいじゃないですか。

そんな事を考えていると、先輩は大して興味は無かつたらしく「ま、いいけどね」なんて言うていました。

「それにしても本当にこんな事で、良かったの？お祭りに行くなら、同学年の友達の方が、良かったんじゃないの？」

先輩は申し訳なさそうに、訪ねてきます。

私がお願ひしたのは、七夕祭りに一緒に行つてほしいと言うもの。

先輩は私のお願ひを聞いてくれたのだから、申し訳なさそうにしなくともいいのに……

「そうですね。でも、私がお願ひしたんですから、良いじゃないですか」

「そうか？」

何だかまだ納得していない様ですね。

それなら一つ、小さなわがままを言ってみましようか。

「納得出来ないのでしたら、一つ提案があります」

「ん？何だ、言ってみ」

「月乃ちゃんみたいにあだ名か、名前で呼んで下さい」

私の小さなわがまま。

それは、あだ名か名前で呼んで貰う事。

「そんな事か？本当にそんな事でいいのかい」

「はい、今はそれだけで良いですよ」

そう言っていると、少し考えるしぐさを見せて言いました。

「なら、歌ちゃんはどうだ？歌風かふうさんの歌の部分を取って、歌うたちゃん」

「良いですよ。あ、丁度駅ですね。先輩は電車で帰るんですか？」

「いや、歩きだよ。ここでお別れだな」

「そうですね。先輩、今日はありがとうございました。楽しかったです」

そう言って、私は先輩にお礼を言い、家へ帰りました。

第10話 朝の一幕から

「一日は、挨拶から始まる！そんな訳で、同時にアルミ缶回収をするよ！」

柑條の言葉から始まった、普段のあいさつ運動に加えてのアルミ缶回収だが……

「おはようございますー！」

「アルミ缶を持つてきたら、私たちに渡してください」

始めて一週間ほど経つが集まり具合は、それほどよくない。

「おはようございます。あの、アルミ缶少しだけですけど持つて来ました」

「おー！ありがとうございます」

「預かります」

と言うか、殆ど持つてくる人が居ない。

まあ学校が山の上にいるから、持つて来るのが大変つてのが、集まりが悪い原因だろうな。

少ないお陰で、おかげで楽できるからいいけど。

預かったアルミ缶を一つの袋にまとめていると、柑條があいさつ運動の列から離れて此方にやってきた。

「ねえミー君。一週間ぐらい経つけどアルミ缶、全然集まんないね」

「そーだな。でも、強制したとしても上手くいく訳じゃないし、このままの感じで良いいだろ」

「そうだけど……うーん、でもなく」

柑條はアルミ缶の入った袋を見ながら言った。

何か嫌な予感がする……

対外こういう時は、集まって対策を考えようとか言いだすよな。

つて事は、これはあれか。

もしかしなくても、お決まり通り放課後に会議の流れか……

「よーし、なら放課後にもっと持つて来て貰えるように、話し合いをしよう!!」

ですよね、分かっていました。

結局こうなるんだよなあ。

……何となくだが、もしかして俺自身が毎回、余計な一言を言つて会議になつていいのか？

「と言う訳で今日は、どうやったらアルミ缶を持って来てくれる人が増えるか、考えるよ！」

その日の放課後、生徒会室にて会議が始まった。

「確かにアルミ缶を持って来る人が、少ないですよね。と言うか、決まった人しか持って来ていない気がします」

「そうね、確かに持って来てくれる人は、大体同じ人たちだったわね」

「そうなんだよ。だから何か、いいアイデアは無いかな？」

へーそうだったのか。

全然気づかなかつた、と言うより憶えていないだけか。

如月さんが、机に置いて在つたお茶を飲み話し出した。

「持つて来る量が増えればいいんだよね？ならいつそ、各クラス対抗戦とかにして、煽つて上げれば、持つてくる量が増えるんじゃないかな？」

「それだ！競争にしてどこが一番になるか競おう」

柑條の中では競争をする事に決まつたらしい。

まあ妥当な所だろう。

人は結局、競争とかは好きだからな。

俺はその心理は全く分かんないけど。

だつて争うとか、面倒じゃん。

「それなら具体的な所を決めていかないとな。今まで集めたアルミ缶も、どうするか決めないといけないし」

「そうね。でもそれは、先生チームを作れば解決できるのではないかしら」

確かに雪姫さんの意見は、今考えられる中で一倍良い物だろう。

理屈的にはいいかも知れないが、果たしてほかの生徒たちが納得するのやら。

まあ恨みを買うのは、先生だろうし良いか。

「あと、順位を張り出すのは、どうでしょう?」

「確かに月乃ちゃんの言う通り、順位を常に出しておくと思いいます。自分たちの順位が常にわかる方が、競う上では得策だと言えますから」

「成る程ね、じゃあ順位も出していこう!! ランキングの更新は、莉桜に任せればいいかな?」

柑條の問いに、本日の会議で莉桜との連絡役を任されていた、ツツキーが「聞いてみます」といつて、チャットを始めた。

がすぐに返事は来たようだった。

『数値さえ送ってくれば、更新は此方でしておく』だそうです」

「よし、それじゃあ決まりだね。来週から実践して行こう!」

「分かったわ。なら遅くても、明日にの放課後には全生徒に伝えるように、先生に話をするように伝えるわね」

「うん、お願いね。それじゃあとりあえず、今日はお疲れさま。明日もよろしくね」

如何やらうまく話は纏まった様だ。

しかしこの方法でどれだけ集まるのやら。

まあ、ボランティアの一種だし多かろうが少なかろうが、問題ないんだよね。

第0話：Extraく始めたきっかけは……

四月、それは皆が新しい生活に、心躍らせていることだろう。だが俺は、そんな気分には一向に慣れそうになかった。

「溜息を吐いていると、幸せが逃げていきそうだから止めなよ？」
現実逃避の為に、読み始めた本の内容も全く入ってこない。
その為無意識のうちに、溜息を吐いていたのだろう。

その事を、忠告してくる者がいた。クラスメイトであり、図書委員会代表の、鷺ノ宮千里だ。

現状を一度、整理してみよう。

この場所は、図書室の隣にある司書室。

日も暮れ始め、他の者たちは、部活動を終え帰宅し始める頃だ。

この場に残っているのは、代表である鷺ノ宮千里と、副代表の自分だけだ。

「んなこと言ったってね」

自然と出た溜息の原因、それは目の前に書類の山があることに他ならない。

「まあそれは一週間近く、仕事をしなかった事が原因でしょ？」

「いやいや、あんたの仕事だろ」

「でも、ミー君の仕事でもあるよね」

「その通りではあるが、減るところかむしろ増えている所が気になるのだが」

実際一週間ほど前に見た時は、新書の要望や備品申請書などの精々十五枚ほどだった。

だが今では、ざっと十倍位に増えていた。

「まあ本音を言おうと、生徒会と委員会の委員長だけが使える寮が在るよね」

「あるな。だけどあそこは、行事準備の時や書類整理の時しか使わないだろうって、暁先生が……」

「そうだね、そろそろ私が何考えているか分かるよね」

つまり鷺ノ宮は、書類整理を理由に例の寮に泊まりたいという事だろう。

非常に面倒な事になった。

この寮はペアでないと、委員会としては使う事が出来ない事になっている。

書類に至っては持ち出し厳禁、つまりは泊りで処理する必要がある。

どうやら、計算し尽されたものであるらしい。

「ハア、一ついいか」

「何かな」

「ペアという事は、俺も泊まるという事に為るのだが」

「ミー君だったら大丈夫でしょ」

如何やら拒否権なしその上に、えらく信用？されているらしい。こうなったら、従うほかないだろう。

「分かった、それじゃあ暁先生に言ってくるわ」

「やった！それじゃあ準備しておくね」

「準備が終わったら、少しでも書類進めとけよ」

「分かった、ミー君も早く許可とってきてよね」

分かったと返事をし、目的の先生を探すために司書室を出た。

その時ふと、去年の生徒会選挙に参加するきっかけとなる出来事を思い出したのだった。

「えつとくでは最後に、もう直ぐ生徒会選挙が在りますが、立候補者がいないので、皆さん是非、挑戦してみてくださいね」

ホームルームにて、天王寺先生が、連絡事を話していた。

内容は、一ヶ月後に迫った、生徒会選挙の話だった。

正直、あまり関係無いだろうから、本を読みながら聞いていた。

「恵美先生、それってすると、いいことあるの？」

その質問に、大半の生徒たちがうなずいていた。

ここの生徒会は、少し特殊な特権が存在しているらしい。

しかし、一般生徒には一切の情報が公開されておらず、役員たちも一切その事について話さない。

よってその事は、一種の七不思議的なものとして、色々な憶測がさ
れている。

「そうそう、よく聞くのは、一部の授業をさぼっていいって聞くけど、
実際の所はどうなっているわけ？」

ゆえに、全員が気になる所なのだろう。

「どんな噂があるか知らないけど、授業を休めるって言うのは、嘘だ
ね。それは執行部が、準備の為に抜けて行っただけだと思うよ」

「なんだ、そんな事か」

「そんな事だと、私は思っていたけどね」

「嘘だ〜」

「ちよつと誰よ、私は本当に思ったんだからね」

「「またまた〜」」

「さらに増えた?!」

そんなやり取りをしていると、ホームルーム終了の鐘が鳴った。

「は〜い、そこまでね。じゃあ日直さん、よろしく」

「起立、礼」

ホームルームを終え皆、各々部活や帰宅談笑といった具合にばらけ
だした。

「夜海、ホームルーム終わったぞ」

「うん」

俺は、数少ない友人に声を掛けられ、本を読むのをやめた。

「よし、それじゃ行こうぜ、夜海」

「タスク、今日はどっちに出るわけ？」

「そうだな、今日はゲー研かな」

輔は、吹奏楽部所属兼ゲーム研究部部长をしており、その他の部活の助太刀をしていることで有名だ。

しかも、学業・家事に至っても高スペックである。

「ふうくん、まあ良いや。それで今年は何で、立候補者が居ないんだろうな？」

「聞いておきながら、軽いな。」

しかし、高スペックだからと言って人望が有るかと言うとそうでもない。

周りの印象は、雑に扱っていい人と言うものだ。

「で、立候補者がいない理由だけ。それは、進んでやりたがる様な、やる気のある奴が居ないからだろう」

「ふうん、女子は立候補しそうなのに」

一方で周りの夜海印象はと言うと、読書家・自分からは話さない。だが話しかけると、割と話しやすい人、と言ったものらしい。

「だろうね。要は、男子の候補者がいないのだろうよ。しかし、男子だったら、藤堂とか俊あたりがしそうなものを」

「いや、二人ともしないだろ。」

実際二人とも優秀だ。

ゆえに、いつも大変そうにしているのを見かける。

「相変わらず、変な事の情報が早いな。まあ俺は、余裕があればやろうか。そう言う夜海は、どうするわけ？」

「俺？そうだね、必要とされたら考えようかな」

別に進んでやりたい訳でもない。今までどおり、頼まれたら考えよう。

「まあ、無いでしょ？こんな変わり者に声がかかるとは事なんて」

「そう言うな、もしかしたらあるかもしれないだろ」

いや、いったい誰からかかると言う。知り合い以外と話すのは、ただでさえ苦手で自分からは余り話さないのに。

「じゃあ、ゲー研に出て来るから、また明日な」

話しをしている内に、パソコン室近くまで来ていたらしい。

「おう、じゃあまあ、頑張れよ〜」

そういつてこの日は、帰路に着いた。

だが事件はそんな話をしていて翌日に起きるのであった。

「古詠、昼休憩にパソコン室に、来るように」

「はあ、分かりました」

三時間目終了前、国語担当の前田先生から呼び出しをくらった。

「珍しいな、ミー君が呼び出しをくらうなんて」

「そうそう、俺たちみたく、目立った事はしない奴が」

周りが騒がしい。

そもそも目立つ事が嫌いなだけなのだが、そのせいで今は余計に目立ってしまった。

しかし何で、呼び出しをくらったんだ？

「そろそろ終わりたいから、静かにしろ、お前たち」

前田先生の一言で、周りはやっと静かになり、授業を終える事が出来た。

その後、四時間目を終え、問題の昼休憩になった。

「失礼します。二年A組の古詠です」

「来たか、それじゃあ、そこに座ってくれ」

なぜ、電気を付けていないのだろうか。

そしてまた、対面式で面接みたいだな。

でも、イス一個分の距離もないって、どうなんだ？

「悪いな、昼休憩に呼び出して」

「いえ、それで話は？」

「ああ、実は古詠に頼みたい事があって、呼び出したんだ」

「頼みたい事、と言いますと？」

「というか、いくら昼間だからと言っても、部屋が暗すぎる。

これは、嫌な予感しかないな。」

「なあ古詠、お前、生徒会をしてみないか？」

「……今なんと？」

「生徒会をしてみないかと、言ったんだ。古詠は、真面目で周りをよく見て、行動しているだろう？」

「聞き間違い、ではないようだ。」

「待って下さい。そんな、自分に生徒会は無理ですよ」

「謙遜しすぎだ。お前には、人や物事を上手くまとめとる。だがお前頑張り、人の陰に隠れていて目立つとらん」

それは、ただ人前に立つのが苦手だからであり、考えをそれとなく他の人に言わせる方が、操っているみたいで、面白いから好きなのだが……。

そして何より、疲れることが嫌なのだ。

「ほかに、候補がないんだ、頼む」

「たす……高垣君はどうですか？自分より、優秀だと思うのですが」

「確かにそうだろう。しかしな、お前は今まで、目立たなかった。だからこそ、お前には目立つてもらいたいと思つとる」

まさか今までの行動が、裏目に出るとは考えもしなかった。

「入ってくれたら勿論、サポートはするからな。とにかく考えておいてくれ。受けてくれるなら、儂か担任に言ってくれ。話は、以上だ」

それだけ言うと、前田先生は出て行ってしまった。

しかし前日に話していた事が、まさか自分に来るとは。

さて、どうしたものか……

「要は、この間話していた通り、お声がかかった訳だ」

現在放課後、昼休憩に在ったことを輔に話している所だった。

「で、どうするわけ？」

「面倒」

「言い切ったな」

本当に面倒だと思っっている以上、仕方ないだろう。

しかし、どうするべきなのだろう。

「迷わずやってみれば良いと思うが、まあ土日間にじっくり考える事だな」

確かに、こればかりは自分でしっかり考える必要があるだろう。

「そうだな、まあしつかり考えてみるよ」

「そうしとけ。でも、迷ったならやってみるのも、一つだと思っぞ」
迷ったらやった方が良いか。

なぜ、迷っているのだろう、断れば済むものを。

やはり、先生から直接言われたから、断りづらいだけなのだろうか。
それとも、優柔不断なだけだろうか。

とにかく、輔の言うとおり、考えてみるのが一番だろう。

「先生、生徒会の件で話があります」

休み明けの放課後に、担任へ声をかけた。休みの間に考えた結果を言うためだ。

「ん、それでどうするの？」

「はい、受ける事にします」

考えた末、受ける事にした。

今のままでも十分満足しているが、もっと面白い事があるかも知れないので、受ける事にした。

「分かったよ。それじゃあこの書類に名前書いてくれる？」

「その前に「ついでですか？」」

何やら重要そうな紙に名前を書く前に、此方も大切な事を言っ
こう。

要は、決意表明と言うやつだ。

「何かな？」

「自分は、副会長とか大変そうな役割は、しないですよ」

「それについては大丈夫だよ。他の先生たちの間でも古詠君には、生徒会内でもサポートの役割に位置する所を、って考えていたから」

まさか言うまでもなく、配置が決まっていたとは。

「と言う事で、名前書いてね」

「分かりました。そう言えば、選挙ってどうするんですか？」

よく考えてみると、選挙については全く考えていなかった。

「大丈夫。今回は人数居なくて、役員枠ピッタリ。という事で信任投票だけだから、それらしいこと言っとけばどうにかなるよ」

教師がそんな事言っただけなのか、と考えてしまいがまあ今は置いておこう。

そんな事より、選挙の準備を始めねば……。

その後は結果的に、先生の言う通りになった。

どうやらどの生徒も再選挙をするのは嫌らしく、すんなりと決まっていたのだ。

そんなわけで、晴れて？生徒会役員となった。

振り分けられていた役職は、庶務というどうにも雑用が多そうなお話だった。

その後、顔合わせやどの委員会の補佐になるかなどのお話合いが合ったのだか、それはまた別の話。

因みに、初めに生徒会になる様に言ってきた国語の前田先生は、離任して行った。

あれだけサポートすると言っていたのに、まさか離任して行くとは思わなかった。

そんな過去に在ったことを思い出していると、目的の人物を売店前で見つけた。

「暁先生」

「おう、古詠か、どした？」

この先生は仕事をしているのか心配になるくらい、いつも自由気ままに暮らしている気がする。

「寮の使用許可を貰いたいのですが」

「そんな事か。んで、生徒会と委員会どっちだ？」

「委員会の方です。上の人が泊まりたいが為に、仕事を溜めたんで」

「そう言う事か。まあ、お嬢さまに振り回されているって所か」

いくら何でも、生徒の事をお嬢さまって言うのは、どうなのだろう。

何にせよ余計な事を考えるのはやめておこう。こんな人だが、生徒からの人気はとても高いのだ。

「それに、丁度いい時に来たな、これからそっちに行くところだったんだ」

「丁度いいって、いったい何のことですか」

とてつもなく、嫌な予感しかしない。これは絶対、面倒な事だ。

「いやなに、丁度図書委員に急ぎの仕事が入ったから、泊りで片付けて貰うつもりだったんだ」

「ちなみに内容は……」

「ポスター制作だ。詳しい事は、寮に準備して在るからそれを見てくれ」

「マジですか……」

如何やら元々泊まる事は、決定だったらしい。次々に話が進んでいく。

「マジだ。まあという訳で、ポスター制作の方も頼むぞ。それじゃあこれ、差し入れと鍵な」

と言うと、購買で買ったと思われるパン二つと、鍵を渡してきた。受け取って鍵についているタグを見て疑問が浮かんだ。

タグには、マスターキー書いてあった。

普通は生徒に渡さず寮の管理人である暁先生が、持っておくはずなのに。

「それと俺は今回用事があつて、留守にするから、その間の戸締りよろしくな」

疑問に思っていると、その事が顔に出ていたのだろう。その事に答えると、どこかに行つてしまった。

しかし、生徒に留守を任せるってどうなのだろう。

「それで、先生は何処か行つたと」

「ま、そう言う事だな。あと仕事も増えたからな」

司書室に帰り、寮に移動する準備を終えた鷺ノ宮にさっきのやり取りを話した。

だが、特に気にする様子もなかった。

「じゃあとにかく、移動して作業しよつか」

言うや否や、道具を持って寮に移動した。

その後の寮でのひと悶着あつたのだが、その出来事はまた別の話。

第11話 かくれんぼ

ある昼休み、昼食を取り終えいつも通り本を読もうとした時に奴は来た。

「失礼します。古詠先輩は居ますか？」

「古詠君なら、席で本を読んでいると思うよ。呼んできてあげようか？」

「はい!!お願いします!」

クラスメイトと奴のやり取りが聞えてきた。

何でわざわざ昼休憩に来るんだ。

奴に絡まれたら、ゆつくり本も読んでいられない。

ここは気付かれぬ様に、反対側の扉から逃げよう。

「古詠君く可愛らしい後輩のお客さんだよ……って居ないや。おかしいな〜?ごめんね、さつきまで席で、本を読んでいた筈なんだけど」
「そうですか。いえ、大丈夫です。行きそうな所には、心当たりがあるんで」

と言う事で、奴から逃げるために俺は図書室、の隣にある司書室にやってきた。

ここに来れば役員以外は立ち入り禁止だし、基本的には委員長と副委員長しか使用できない事になっている。

委員長である鷺ノ宮さんは、今日は放課後の当番なのでここにはいない。

まあそんな訳で、今度こそゆつくり本が読めるはず。

「お仕事すみません。此処に図書委員会の副委員長さんは来ませんでしたか？」

いざ本を読もうとした瞬間、隣の図書室からそんな声が聞えた。

おそらくカウンターに居た役員に話しかけたのだろう。

「……ん?と言うか、俺を探しているって事は奴が来たと言う事かよ。」

まさか、行き先を読まれたのか？

やばいな。早く別の場所に移動しなければ……

話が聞こえて一分もしない間に決めると、またしても気づかれる事のないように司書室に鍵をかけ、移動を開始するのであった。

「副委員長は図書室には殆ど来ないよ？でも司書室にはよく居るから、確かめてあげようか？」

「はい、お願いします」

そう言うと、図書委員の子はもう一人の役員の子にその場を任せ、隣にある司書室に向かった。

「副委員長居ますか？」

ノックをして返事を待つが、もちろんそこには誰も居ないので返事は無い。

彼女は扉に手をかけ開けようとするが、鍵がかかっているのであきはない。

その事を確認すると、カウンターに戻りそこで待っていた子に話しかけた。

「今日は来ていないみたいだよ」

「そうですか、分かりました。お手数をお掛けしました」

「で、彼女から逃げる為にここに来た。ミー君、逃げる必要は在ったのかな、それ？」

「いや、だってよ、ゆつくりと本が読めないじゃん」

昼休憩も残りわずか。

そんな訳で最後に逃げ込んだのはお馴染みの、生徒会室。

生徒会室では、柑條と歌風さんが話をしていた。

「先輩は何から逃げていたんですか？」

「柑條、悪いが説明頼む。俺は本を読みたいから」

「全く、そのくらい自分ですればいいのに。えーっとね、前に入学式の準備の話をした時に、オープンスクールでミー君が大変だった、と言ったのは覚えてる？」

「はい、新一年生の中に恐らくですけど知り合いが言ったって、話ですよね」

何から逃げていたかの話を柑條に任せて、席に着き本を読み始めた。

「うん、その話。その子、昔引越ししちゃったんだけど、オープンスクールの際に偶々再開したんだよ。再会したその子は昔同様に、ミー君にとっても懐いていたらしくて、まあそんな感じで色々あったんだよ」

「はあ…何か凄そうな子ですね。それで夜海先輩は逃げ回っていたんですね」

「うん、それさえなければ接しやすい、いい子なんだけどね」

そんな話していると、コンコンと部屋をノックする音が聞えた。

まさかな…

「誰だろう？誰かが訪ねて来るなんて、珍しいね」

「さっき話していた、子なんじゃないんですか？」

「まさかね、無いでしょそんな事は」

そう言いつつ柑條は扉へと近づき、「今開けます」と言い扉を開けた。

「休憩中すみません。お兄さんが此方に来ていませんか？」

聞こえてきたのは、例の子の声だった。

あゝ、もう諦めるしかないか。

「ミー君、観念したらどうか？この子に付きあって上げなよ」

「そうだな。俺の負けだ。と言うかよく行く先が分かったな、聖」

「お兄さんの行きそうな所ぐらい、分かるよ。だって、小さい頃からお兄さんの後を付いて回っていたんだよ。分かるに決まってるよ」

そう言えば昔から、お兄ちゃんって言いながら付いて来ていたな。

「つと、そう言えば歌風さんは、初めて会うよな？」

「はい、先輩。この子ですか？」

「ああ、名前は…」

「小條聖こじょうひじりと言います。よろしくお願いします、歌風先輩」

「はい、こちらこそよろしくね、聖ちゃん」

「挨拶はその辺にして、聖。結局何の用だ？」

訪ねると聖は此方を向いて、真剣な表情で言った。

「夏休みにサマーフェスティバルがあったよね？一緒に回りたくないーって思ってた、誘いに来たんだよ」

「あーあれか。別に構わないよ。ずっと一緒にいて訳には行かないけど、それでもいいか？」

「いいけど……何か用事があるの？」

「いや、生徒会で見回りやらと色々やる事があるから、ずっと一緒にいて訳に行かないだけだ」

本当なのかと言う顔で聖は柑條を見た。

すると柑條は、肯定するように頷いて見せた。

「それでも良いよ。じゃあ今日は教室に戻るね」

そう言うのと聖は生徒会室を後にした。

結局これだけの事のために、時間を潰したのか……

今思えば、踊らされて逃げ場がない所に追い詰められたわけだ。

「ミー君、凶らずも遊んであげてみたいだね」

「そうですね、先輩の性格や行動を熟知しているから、聖ちゃんからしたら遊んで貰っていた感覚何でしょうね」

やっぱりそうか……

下手するところやあ、要らない嫉妬やらを買いそうで怖いな。

まあ約束は約束だし、可愛い妹分のために守ってやるか。

第12話 机上の空論

「夜海、今日の放課後うちのクラブに寄って行けよ」

「それは、吹奏楽？それともゲーム研究部？」

「今日はゲーム研究部に行くつもりだ」

ゲーム研究部か、久しぶりに行ってみようかな。

でも久しぶりに生徒会の仕事も無いんだよね……

よし、ここは断って帰るか。

「先に言うが、今日は生徒会の仕事が無いのは知っているからな」

「なんと！まさか知られていたとは……。ちなみに誰から聞いた？」

「他の生徒会役員からに決まっているだろう」

だろうね

仕方ない、大人しく付いて行くか。

「ん、じゃあまあ行きますか」

そんな訳でタスクに連れられて来ました、ゲーム研究部の部室であるパソコン室。

いつ来ても思うのだが、学校でゲームをするだけの部活なのに許可が出て、設備が良い教室を使えるんだろうな？

そんな疑問は置いておいて、タスクとパソコン室の隣にある準備室に入り、お互い席に着いた。

「で、何で呼ばれたわけだ？」

「いや、普通に誘ってみたけど？」

「よし、なら帰るな。俺には帰って、本読むと言う使命があるから」

「そう言うなよ。ほら、これを見てみる」

席を立ち帰ろうとすると、タスクは一冊のノートを差し出した。

「これは？」

「前にゲームの設定を、話した事があつただろ？それを纏めたものさあつたなくそんな事。」

確か、大まかな設定を出し合つたんだっただけ。

「まあ、生徒会の仕事が無いなら、続きを考えてみないかと思つてな」「そう言う事か。ま、いいよ別に。それで如何するんだい？」

「そうだな、とりあえず前回の続きで、アバターの制作方法を考えよう」

帰るのをやめて、改めて席に着き一緒に考え始める。

確かアバター制作の基本は、種族と職種を選ぶんだつたな。

「とりあえず、何でも有りの方針で良いんじゃない？」

「投げやりだな、おい。でもまあ、その方が色んなキャラが出来るか」

「そもそもこれって、オンラインゲームが前提なのか？」

話していて思つたのだが、根本的な所でどのジャンルを考えているのだろうか？

そのこの所をあまり考えずに話していたな。

「そのつもりだ。そのうち出るであろう、VRMMOを基準に考えているが？」

「そ、ならやつぱりある程度の枠組みはあるべきだな。人に獣人、精霊、天使や悪魔……まあその他諸々つてな」

「成る程、ならそれを基準に自由に作つて貰うつてことにするか」

これで種族の問題はひとまずいいかな。
なら次は、スキルかな。

「タスク、スキルは如何するんだ？」

「イメージは、種族専用と職業専用を一つずつ。戦闘と汎用スキルを始めから、いくらでも習得OKにしたいと思つている」

「いや、駄目だろう。徐々に増えるならまだしも、初めからそれはバランス的に、ダメだろ」

「でもオンラインゲームではそれくらい、普通だぞ？」

さも当然って感じに言われてもな

確かに俺はゲームより、本を読むことの方が多し……

けど初めから多いのは、バランスが崩れて面白くないと思うのだ

が……

「でもまあ、夜海の言う事も一理ありそうだし、初めは二つまでにするか」

「良いんじゃないか」

もうホント如何でも良くなってきた。

ていうか今日は、飽きたな。

何とかうまく逃げる口実が、出来ないかな……………

「よし、なら次は目玉になるシステムについて考えるか」

「目玉になるシステムか……名前が同じでも効果が全く違うとか？」

「?という事だ、夜海？」

「例えば、魔法を選んだとする。でだ、魔法にも色々属性があるだろうか？」

「ああ、火とか水とあるな」

「人数が多くなると被って来るだろうけど、同じ魔法でも、火なら火だけ、水なら水だけ。他の属性が欲しいなら、新たにもう一度魔法のスキルを習得する、って感じ」

「面白いと思うが、管理が大変そうだな……」

だらうね、そもそも出来るとは思っていないし。

「でも設定の案な訳だし、メモしとくか」

うあー、真剣にメモってる……

どこまで本気でやるつもりなのだろう?そろそろ帰りたいな……

コンコンつとノックをする音が聞えた、と思ったらパソコン室と準備室を繋ぐドアが開いた。

「夜海先輩、ちよつと来て下さい」

「ん?ツツキーじゃん、よく俺がここに居るのが分かったね?」

扉を開けたのは、生徒会書記の雪姫月乃ことツツキーだった。

「部員ですので、先輩が入って行く所、見えました」

「そう言う事か。じゃあタスク、呼ばれたから行くな」

「ん、分かった。今日はとても有意義だった、また頼むな」

分かったとタスクに言っつて、ツツキーと共に準備室を出た。

ツツキーのお陰で抜け出せたな。

にしてもあんな、机上の空論みたいなのを本気でやるつもりか？
でもまあ、夢を思い描くのは別にいいか。

個人的にはさっきのやつに、人工知能を使うのも面白いんじゃない
かと思うが……

言わない方が良いよな。

第13話 部活巡り

準備室をツツキーと一緒に出てきて、そのまま学校の玄関口まで来た所で立ち止まり、俺は口を開いた。

「ツツキー、さつきは助かったよ。いい加減帰りたいつて思っていたから」

「そうだと、思いました。先輩、楽しそうだけど、面倒そうに、答えていたから」

そりゃああの手の話は嫌いでは無いが、どうせならもう数人、人が居ても良いと思う。

二人だけで意見を出し合うのには、限界があるし。

「ん？て事は、ツツキーはあの話聞いていたの？」

「はう……すみません。少し、聞いちゃいました」

そうか……でもまあ問題ないだろ。

所詮お遊びだし。

「全然問題ないよ。さて、じゃあ俺は帰ろうかな」

「あの、先輩」

「ん？何だい？」

帰ろうと歩き出そうとしたら、ツツキーが此方を覗き込むように訪ねてきた。

「夜海先輩は、部活、しないんですか？」

あゝその事か。

確かに今現在、俺は部活には所属していない。

理由はまあ、幽霊部員になるくらいなら、初めから入らない方が良いと思ったからだ。

この学校は部活については、所属するもしないも自由なうえ、兼部するのもありなのだ。

と言っても、無所属の生徒は殆ど居ない。

なぜなら、ゲーム研究部がある様に部活の幅が広く、皆何かしら自分になつた部活を見つけているからだ。

「そうだね、まあ自由が一番って事かな」

「そうなんですか？」

「そう、まあたまにさつきみたいのに、知り合いの部活を覗きに行くけど」

「なら先輩、これから見に行つて観ませんか？」

うくん、家に帰つて休みたい所だけど、可愛い後輩の提案だしな。

「なら、役員の皆の部活風景を見に行くか」

「はい！では、誰から、行きますか？」

「そうだな…歌風さんの所に行つてみるか。確か歌風さんは兼部をしていたな？」

記憶が正しければ、槍術部、剣道部、格闘術部だったはず。

「はい、では武術棟に、行きましょう」

「よし、場所が良く分からないから、ツツキー案内よろしく！」

そんな訳で、ツツキーに案内されてやってきたのは、歌風さんが居ると思われる武術棟にやってきた。

「さて、歌風さんは何処に居るかな？」

「あれ、そうじゃないですか？姉さまも、居ますし」

ツツキーの視線の先には、練習着に身を包み、剣道の練習に励む歌風さんと雪姫さんが居た。

あれ？雪姫さん？

「ツツキー、雪姫さんって剣道していたの？」

「はい、と言うより、姉さま、色々出来ますし…直接聞いてみます？」

と言うとツツキーは、丁度休憩に入った二人のもとに駆け寄つて行った。

しばらくの何かを話したかと思うと、三人が此方に来た。

「先輩、呼んで来ました」

「夜海先輩、お疲れ様です。珍しいですね？先輩が用事もないのに、学

校に残って居るなんて」

「そうね、夜海は用事が無ければすぐにでも帰るものね」

「ああ、タスクに捕まって、ゲーム研究部に行っていたんだ。で色々あって、ツッキーと一緒に部活巡りをしているんだ」

「そう。それで何か聞きたい事があるって聞いたのだけど？」

「いや、たいした事じゃないのだけど、雪姫さんって剣道部だったの？」

質問すると雪姫さんは首を横に振った。

如何やら違ったらしい。

と言うか、部員じゃないのに何やっているんだ？

「私は夜海、あなたと同じ無所属よ。と言っても殆どの部活に参加しているけど」

「どういう事？」

そんなと疑問に答えてくれたのは、後輩二人だった。

「そのままの意味ですよ。雪乃先輩は無所属ですけど、部活の助っ人をしたり、たまにやって来ては、アドバイスをして行くんです」

「姉さまは、大体の事は、三日で習得します。ですから、公平を保つ為に、一定の部活には所属せず、渡り歩いているんです」

つまるところ、このオーバースペックの人を巡って争わないように、中立を保ちつつ、部活を楽しんでいるって事か。

と言うか、三日でマスターとかまさに、逆三日坊主だよなこれ……

「そう言う訳で、私は無所属よ」

「へえ、あ、二人とも時間を取らせて悪かったな」

「いいわよ、美音とそろそろ迎えに行こうと、話していた所だったから」

「はい、夜海先輩の事ですし、忘れて帰るんじゃないかと思っていましたし」

「忘れる？はて、何か約束なんかあったかな？」

「歌風さん、何の事？」

「やっぱり忘れていたのね……高垣君に足止めを頼んでおいて、正解だったわ」

「そうですね。あと先輩、あだ名で呼んでくれる約束ですよね」
まさかタスクに捕まったのって、仕組まれていたのか。

そう言えばあいつ、他の役員から聞いたって言っていたな……
それはともかくとして、歌風さんに睨まれてしまった。

そう言えば七夕の時に、そんな約束をしたな。

確か呼び方は……

「悪かったよ、歌ちゃん。それでだ、なんか約束していたか？」

俺がそう言っていると、三人は一度顔を見合わせると頷き合い、こちらを
向いてこう言った。

「二放課後に、資料を運び入れる話です」

放課後……資料……運ぶ……

あ、そう言えば休みに入る前に、資料を寮に運ぶとか言っていたな。
てか、帰れないのを分かかっていて泳がせていたのか……

第14話 暁荘

「そんな訳だからまずは、生徒会室に行くよー」

「その前に、おい。如月さんはどこから出て来たんだよ」

さらっと生徒会室に行くように提案したのは、先程まで居なかった柑條さんだった。

「ふっふっふ、天音さんにかかればこの程度の些細な事は、如何とでもなるのさ」

「いやいや、如何言う理屈だそれ！」

神出鬼没と言う事だろうか？

柑條さん言っている事はイマイチ分からない、いや分かりたくないのが本音か。

「天音も来た事だし、生徒会室に行きましようか」

『はいー！』

「俺以外、まさかのノータッチ!？」

うーん。これはアレか。俺の感性の方がおかしいのかな。

「先輩、早く、行きましよう」

「そうですね、夜海先輩!……きつと気にしたら負けですもん」

「お、おう……」

ツツキーや歌ちゃんに言われ、先に歩き出した彼女たちを追うように歩き始めた。

最後の方で、歌ちゃんの本音が聞こえて何か安心したな。

やっぱり、如月さんの登場の仕方は、考えない方が良いつて事か
……

そんな事を考えていると、珍しく携帯端末に着信があった。

差出人は、赤城莉桜か……赤城!？」

また何で、こんなタイミングでメッセージを送って来たんだか。

「ま、取り敢えずは開いてみるか」

少し不安ながらも、赤城から届いたメッセージを開いてみた。

『古詠の、如月の行動に対する疑問は分からなくは無いが、これに関しては歌風の言う通り「気にしたら負け」だ。如月の動きはこちらでも、

把握し切れない事が殆どだからな』

相変わらず、タイムリーな奴だな。

てか、赤城のシステムでも把握しきれないって、如月さんは一体何者だよ……

と言うか、赤城は何でメッセージ何かよこしたんだ？

『つまりはだ、生徒会は変わり者の集まりだ。深く考えると、ツボに嵌るのと同義なので、程々にする事をすすめる。以上、莉桜からのアドバイスだ。 P s : 暁荘に資料を運び込むならついでに、他のメンバーにばれない様にお土産よろしく』

……色々あるが取り敢えず一つ。

「赤城の奴、学校に住んでんのかよー！」

「お！やっとな来たね、ミー君」

「少し目を離れたすきに、どこに行ってたんですか先輩？」

「美音の言う通りね。それに、その手に持っている物は何かしら？」

「ちよっと購買に行つて、飲料を買つて来ただけだよ。夏場だし、水分補給は大事だろ？運び終わった後に飲もうと思つてな」

「本当は赤城への差し入れ（お土産）を買いに行つたわけだが、飲料を買つて来たのも嘘ではない。」

「本当は差し入れなんか買う必要は無いのだが、赤城に会えるチャンスだし買つて来る事にした。」

「その際どうやって、ばれるのは分かり切っているから、カモフラージュとして飲料を買つて来たわけだ。と言うかばれない様にする必要ってあるのか？」

「えー、ミー君だけじゃーい」

「そう言うと思つて、全員分買つて来ているよ」

「さすが夜海、分かっているわね」

「代金は後できちんと払いますから、言っして下さいね、先輩」

「後輩から代金は受け取れないよ。お金の事は気にしなくて良いから。それより、さっさと資料を運んじまおうぜ」

「それは遠回しに、後輩以外からはお金を取るって事なの」

「お前さんはホント上手い事やるよな。これは完全に、俺の奢りだよ」

「ミー君こそ、分かっているね」

付き合いが長いだけあって、言いそうな事は分かっている。だからこそ、敵わないと思う事もしよっちゅうある。

てか、俺が生徒会に居ること自体が場違いな気がするけどな。

「そう言えば柑條、如月さんはどこ行っただよ？」

「天音なら、暁先生と先に行っちゃったよ」

「先輩方、そろそろ、運び始めましょう」

ツツキーの一言により、ようやく資料を運ぶ事になった。

ツツキーの一言が無かったら、この件もう少し長引いていたかもな

……

「ふう〜、ようやく終わったー」

「みんなご苦労様。それじゃあミー君、例の物は？」

「食堂に置いてあるよ。て事で、食堂に行こうぜ」

生徒会室と暁荘を数十分かけて往復して、ようやく運び終わり、打ち上げ（？）的なノリで食堂に向かうと、そこには暁先生と如月さんが居た。

「おー、ようやく終わったか、お前ら。こっちは如月と始めてるぞ」

「やあやあ、ご苦労様〜。簡単なおやつを作っておいたから、お茶にしようよ」

物を置きに来た時に、台所の方でなんかしているなとは思っていたが、まさかお菓子なんか作っていたとは。

「さっすが天音！良く分かつているね♪それじゃあ、みんな！ティータイムだよ」

柑條がそう言うと、皆席に着きお茶会を始める。

何と言うか、あれだ、展開が早過ぎね？まあ何時もの事だし、良いかなーとは思うけど……

いや駄目か、それは。ていうか、慣れるって怖いな……

取り敢えずは、加わっておこう。

「それにしても暁先生、この暁荘って外観と内部の印象が全然違うんですが、どうして何ですか？」

話に加わると丁度歌ちゃんも、外観と内観の違いについて聞いていた

確かにそれは疑問だった。

暁荘の外観は木造二階建ての旧校舎の様な見た目なのだが、中は新築の様で地下にも空間がある。部屋は全部で十二部屋＋食堂、トイレ、浴場があった。因みに案内図によると、地下・浴場、制御室、一階・生徒会役員室×五部屋、食堂、トイレ、二階・委員会用室×六部屋、暁の部屋、との事らしい。

「ん？ああそれはな、この旧校舎をオレが改装したんだよ。内部だけな。んで、オレが住み込みで管理している訳だ」

「なぜ、外観も変えなかつたのですか？」

「そりゃあれだ、見た目がボロの旧校舎なら、近寄ってくる奴らが居ないだろうと思つてな。肝試しをしようとか言う、馬鹿どもを除いて」

「居たんですね。その人たち、一体、どうなったの、ですか？」

「追い返したさ。…少しばかり恐怖を植え付けてだが」

「教師がする事じゃねーだろ！」

赤城の言っていた通りだ。生徒会は変わり者の集まりだわ。

そもそも顧問がこれじゃな……

「やってるのは、オレじゃねーぞ」

「?それじゃあ、誰がそんな酷い事しているの?生徒会相談箱に『旧校舎でお化けを見た』とか『旧校舎内で人影を見た』とか言う投書が多くて困ってるんだから」

「柑條、お前いつの間にそんなの始めていたんだ」

「この感じだと、そのうちその相談箱の案件に巻き込まれそうだな。」

「うくと、新入生が入って来た頃だから、四月くらいかな?それより暁先生、誰がやってるの?」

「莉桜だよ。あいつ、学校の警備システムも管理しているから、下校時間過ぎて許可なく残っている生徒をシステム使って、脅かして家に帰しているわけだ」

「なるほど。それが幽霊騒動の真相だね。さっすがチータだね」

「あれ?と言う事は、莉桜は学校に住んでるの?」

「言って無かったか?莉桜はこの地下にある制御室に住んでいるぞ」

「「「えっ」「「「やっぱりか」

メッセージが来た時から思ってはいたが、本当に住んでいるとは。

他のメンバーが驚く中、如月さんは驚いた様子はない。如何やら既に知っていた様だな。

如月さんの態度に気付いた柑條が質問をした。

「天音ってばもしかして、知ってたの?」

「うん、天音さんの行動力にかかれば、このくらい楽勝だよ!」

「じゃあ、莉…」

柑條が赤城について、さらに聞こうとすると急に食堂のドアを勢よく開け放たれた。

「ちよつと伯父さ…先生!!何でばらすのよ!」

そこに居たのは、長い銀髪に制服を着た女の子。

「ん?おお、丁度良い所に来たな。アイツが赤城莉桜。オレの遠い親戚の子でな、一人暮らしを始めるにあたって住む場所に困っていたから、学校の警備システムの管理を引き受けるのを条件に、ここに住んでいるんだ」

ここにきて意外な繋がりだな。暁先生と赤城が親戚だったとか。

「莉桜……ちゃん？」

「え、あ、はいそうですけど？どうかしましたか？会長？」

「うん、ちよーつとごめんね。先生と莉桜以外ちよつと集まって」
そう言うのと先生と莉桜を除いた人物が集まった。

「…ねえ、莉桜って女の子だったの？」

「…いや、俺も赤城の事は男だと思っていた」

「…校内では見た事なかったから、私も男の子だと思っていたわ」

「…文面が、男っぽいから、つい」

「…そう言えば天音先輩は知っていたんですよね」

「…天音さんが知っていたのは、暁荘に住んでいる事だよ。あとは、機械に強いみたいだから暁先生の関係者かなくとか、ネットゲームとかで良く聞く『リオ』ってゲーマーと関係あるのかなくって、考えていただけだよ」

「？先生、会長たちは何を話しているのかな？」

「あー、ま、今にわかるさ」

「…取り敢えずは」

「…話を聞いてみるべきね」

「…だな」

話がまとまり、席へと戻る。

そして代表して柑條が切り出した。

「莉桜ってチャットでやり取りしている時と、雰囲気が違うね」

「そうですか？」

「うん、もつとこう、男の子っぽい感じだったから」

いまいち理解できていないようで、首を捻る仕草を見せる赤城。

「やっぱりお前らも莉桜の事、男だと思っていたみたいだな」

観かねた暁先生が割って入って来た。

ん？お前らもって事は……

「莉桜の奴はパソコン越しだと性格がちつとばっかし変わるんだよ。すでにプログラマとしての仕事もしているんだが、実物の話し方と

メールの話し方が違っていて初めて会う奴はみんな、莉桜の事を男だ
と思い込んでいたんだよ」

やっぱり、この人知ってたのか。

要は、本人に自覚が無いって事だよな。

それにしても既に働いているのかよ。本当に学生か疑いたくなる
よ。

飛び級とかしていたとしても、おかしくないだろ。

「ま、そう言う訳で、仲良くしてやってくれ」

「分かったよ！じゃあ改めてよろしくね、莉桜」

「よろしく、莉桜」

「よろしく、チータ」

「よろしく、お願いします、チータ先輩」

「よろしくお願いしますね、赤城先輩」

「こちらこそ、よろしくね」

如何やら本当に生徒会は、変わり者の集まりみたいだよ。自分の言
えた義理じゃないけど。

第?話：Extra 秋華祭のアリス

「なあ、輔…何でこんな事になってるんだ?」

「さあ?何でだろうなあ」

何気ない呟きと共に漏れる、両者の溜息。しかしそれは仕方がないと言えるだろ。何故なら、今いる場所が檻の中だからだ。

つい先ほどまでとある専門学校のオープンキャンパス、「秋華祭」を輔と見学していた。通常のオープンキャンパスとは違って、如何やら学園祭を兼ねているらしい。会場はとても賑わっていた。

そこまでは、まあ良い。だがその後が問題だ。気付くと二人とも、檻の中に居た。

過程をすつ飛ばし過ぎな気がするが、実際いつの間にか此処に居た。

「俺にはサッパリ分からんし、身に覚えがないのだが…輔な何かわかるか?」

「取り敢えず、こうなる直前は呼び込みの人に声を掛けられて、この部屋に入る事になったんだよな。それで、入ってみるとそこは檻の中で閉じ込められましたーってかんじゃね?」

「と言う事は?」

「多分、脱出ゲームだろ。だから、特に説明もなく放り込まれた、って事だろう」

言われて檻の中をよく観察してみると、確かにそう見えなくもない。が、少しリアルすぎる気もする。

「何にせよ、取り敢えずあからさまに出口感漂う、扉とその近くにあるタブレットを確認してみるか」

「だな」

意見がまとまった所で扉に近づき、開けようとするが開かなかつた。

次にタブレットを確認すると、その画面には『人が三人、動物が三匹、スマホが三台』と、ゲームの名前と思われる「川渡り」と言う文字が表示されていた。

「輔。これって解かないと扉が開かないパターン？」

「じゃない？ま、「川渡り」なら、何回もしたことがあるから余裕だな」
そう言つて輔は、画面を何度か操作するとゲームクリアという画面が出てきた。と同時に、扉が開いた。

「お、開いたな。よし、夜海。次に行こうぜ」

「さすが、ゲーム研究部部长、楽しんでいるなく。まあ取り敢えずさつさと出ようか」

そうして、檻の外に出るとそこは森の中。道があるのでそれに沿つて先に進む事にした。

「なあ、輔。建物内にしては随分歩いた気がするんだが……」

「そうだな。それに今更だけど、何で森？」

「まだあるぞ。進んだ先に何で、また扉があるんだよ？」

「夜海、きつとアレだ。気にしちやダメなやつ。って事で、行くぞー！」

「何だかんだ言つてやつぱり、楽しんでるよな？」

輔は躊躇する事無くその扉を開いた。

開いた先にあつたのは法廷のような場所。内部を観察すると情の字を刻んだ王冠を被った男と青いドレスを着た女の子が対峙し、言い合いをしているように見える。

「なにこれ？修羅場？」

「ノーコメント。夜海、見なかつた事にして、先に進もう」

「あゝ!! やつと来たね! よゝし、ここから反撃だよ」

輔と今見た光景について話していると、女の子が此方に気付いたらしく、声を掛けてきた。

いや、声を掛けて来たというより、一方的な感じだよな。

「何か言っているけど、如何する？」

「気付かれたのならしょうがない。さつさと終わらせよう」
覚悟を決め、女の子の方に行く。

そばまで行くと、女の子はご丁寧に説明をし始めた。

「それじゃあ彼方たち、説明するよ。私の名前はアリス。この国では

情王が定めた法により、ゲームで色々な事を解決するの。扉の鍵についてもゲームだし、捕まって裁判する時もゲームが行われるの。彼方たちにして貰いたいのは、言い掛かりをつける情王に、ゲームで勝つて欲しいの」

アリスの話は分かった。けど、気になる事が一つ。

「輔、情王ってなに…」

「あれだろ、情報専門だから女王と情報を掛けているんだろ」

「うん、分かっていた。分かっていたけど……安直じゃね」

「じゃあ口にするなよ。それよりも、次のゲームもクリアして仕舞おうぜ」

そう言って情王の方を見る。すると情王はようやく出番かと言う風に、喋り出した。

「待ちくたびれたぞ。では、ゲームを始めようか。ではアリス、お前の罪の確認だ。罪の内容は、『儂の廃人プレーによって鍛え上げたゲームデータが入ったスマホを盗んだ』」

「私はやってないよ。自分でどこかに置き忘れたんでしょ」

「罪人は黙っておれ。話を続けよう」

「その前にいい?」

アリスを黙らせると、情王が再度話を続けようとした。すると今度は、夜海が割って入った。

「何だ、申してみよ」

「具体的に何のゲームをするは、まだ言っていないけど、ゲームは始まっているんだよね」

「その通りだが、それが如何した?」

夜海の質問に対して、不思議そうに聞き返す情王。アリスも輔も、夜海が何を言おうとしているのか分からず、きよとんとしている。

がお構いなしに、夜海は話を続ける。

「いや、だったらチェックだよ、情王」

「なに?」

「無くしたスマホの在りかが、分かっただって事。ゲームは始まっているって認めた事だし、悪いけどすぐに終わらせようか。情王、アンタ

のスマホの在りかはそこだ」

夜海は言い切ると、情王自信を指差した。

「わしのどこにあると言うのじゃ！」

「服の内ポケットの中。確認してないだろ？アンタきつと、何処かに置き忘れてそれを誰かが持つて行った、って思いこんでいたんだろ。それで偶々近くに居たアリスを、犯人だと思い込んだ。ま、確かめて見なよ。それで見つかったら、チェックメイトだけど」

夜海の話聞き終えると、情王早速内ポケットを調べ始めた。

すると夜海が言った様に内ポケットからスマホが出てきた。

「やったね！私たちの勝利だ！情王、自分の言いがかりを認めるよね？」

「見つかった以上何も言わん！」

そう言うとき情王は何処かへ走り去ってしまった。その姿を見届けるとアリスは、夜海の方を向き質問した。

「なんで分かったの？」

「ん、そうだね、自分もよくどこに何をしまったのか覚えて無いからかな？だから、思い込みをしている可能性に掛けた」

「夜海、それって運任せだろ。って言うか、せつかくのゲームをするチャンスを」

「いいじゃん。メンド……疲れたから早く終わりにしたかったんだよ」

「それ、本音が隠せてないだろ」

「あはは……さてそれじゃあ、出口に案内するよ。二人とも、目を瞑って十秒数えて目を開けてね」

言われた通り、目を瞑り十秒数える。

そして目を開けると、そこは元居た秋華祭の会場だった。

「お兄さん、ウチの駄菓子屋は如何だった？」

目を瞑っていただけなのに、不思議に思っていると、呼び込みをしていた生徒が感想を聞いてきた。

「駄菓子屋？脱出ゲームだろ？」

「うちは駄菓子屋だよ？ほら」

そう言つて背後にある扉を開ける生徒。そこにあつたのは、確かに駄菓子屋だつた。

「輔……どういう事、これ？」

「うーん、どういう事だろ？ま、面白かったから良いじゃん」

「……そーだな。きつと夢だつたんだな。うん、それで決定」

先程の出来事は不思議体験と割り切り、秋華祭を改めて楽しむ事にした二人。

二人は知らない。実はこの祭り中他にも不思議な体験をした人たちが居た事を。

しかしそれはまた、別のお話で……

第15話 変わらない考え、変わりゆく考え

赤城が合流して数時間。

柑條たちと赤城話しているのを眺めているが、どうも慣れない。具体的には、赤城の今の喋り方とチャットの時の話し方。

別に気にしなかったら良いのだが、チャットでの交流が長かったうえ男だと思っていたからなく

そう考えると女子って適応力が高いな。

柑條たちはギャップには慣れたようで、今も楽しそうに話をしている。

そんな訳で眺めていると、離れた所で飲んでいた暁先生が近付いて来た。

「古詠はまざらないのか？」

「無茶言わないで下さいよ。基本的に人と話すのも苦手なのに、知り合いばかりと言っても女子の輪の中に入るなんて出来ませんよ」

「ま、お前さんならそう言うとは思っていたよ。けどお前の置かれている状況って、かなり恵まれていると、俺は思うがな」

「恵まれている、ですか？」

どう言う事か分からず聞き返すと、暁先生は楽しげに話し出した。

「そうだけ。いわゆる、ハーレムだろ？お前の居る状況って。年頃の男子なら、かなり羨ましい状態だ」

「そう言う事ですか。まあ、普通ならそうかも知れませんが、自分からすればかなり肩身の狭い場ですよ」

「と言いつつ、楽しんでるんだろ？この状況をよ」

「如何でしょうね、自分の仕事で手一杯ですから」

「そーかい。ま、一度きりしか無いこの時をしっかりと楽しむ事だ」

言いたい事は言い切ったらしく、暁先生はふらりと何処かへ行ってしまう。

「しっかりと楽しむ、か」

傍から見れば羨ましいかも知れないこの状態。肩身が狭いつても、もちろん本音だが心のどこかでは、先生が言う通り状況を楽しん

でいる自分が居る。

今日はどんな事があるのだろうか。また突拍子の無い事を提案するんじゃないだろうか。

今まで殆どの事に興味が持てなかったが、生徒会の、柑條たちの、行動は面白く停まっていた時間が動くような、色が無かった世界が色付く様な感じがする。

…ってらしくないか。けど、今の生活が今までの、興味が全く持てなかった自分を変えつつある事は分かる。

先生の言う、ハーレムは別問題だけど。って言うか、よく考えたら先生がハーレムと言うのって問題じゃないか？

そんな事考えていると、赤城が話の輪から抜けて此方に来た。

「古詠、暁先生と何話していたの？」

「いや、ハーレムが如何こうとかな。教師がハーレムって言うのってアウトじゃないか？」

「あ、もしかしたら、酔っているのかも。お酒臭くなかった？」

そう言えば、手に持っていた飲み物、ビールだった気がするな。

いや、発言もアレだけど、未成年の集団の中で酒を飲むのって行かんだろ。

表情から察したようで、赤城は苦笑いしながら話す。

「あはは、やっぱりね。ゴメンね、古詠。あの人飲むと自由度が増しちゃうんだ」

「いや、赤城が誤る事じゃないだろ」

「そうだけど、一応は身内な訳だし…」

「そういやそうだったな。まあとにかく、気にする事は無いよ」

「そう言うって貰えると助かるかな」

そう言うのと赤城は近くの椅子に座った。

にしても、自由度が増すって、殆ど手が付けられないだろ。

そう言えば赤城は何で、こっちに来たのだろうか？先生の事を話しため、って訳じゃないだろうし……

まあ直接聞けばいいか。

「で、赤城は何の用事だ？それが本題、って訳じゃないだろ？」

「あ、うん。送ったメッセージは見ているよね？」

「気にしたら負けってやつか？」

「そう、そう。で、その後に頼んでいたやつなんだけど……」

お土産持ってきて来て言ってきたやつか。

「ほら、一応は買って来たよ」

「おお、ありがとね。えーつと、『蜜柑風味のメロンパン』と『シークワサーの炭酸ジュース』ね。……頼んでおいてアレだけど、見事に柑橘系ばかりだね」

「指定が無かったからな。俺のおススメを買って来た。要らないんだったら。俺が持って帰るけど？」

そう言うとき赤城は慌てたように、受け取ったお土産を背後に隠した。

「い、要らないとは言って無いわよ！……もっところ、形に残る物とか……」

「？最後の方、何っていったんだ？」

「何でもない。それよりほら、古詠もまぎって話をしようよ」

そう言うとき赤城は俺の手引いて、柑條たちの所へ戻る。

俺は大人しく赤城に付いて行き輪に加わる。

その後時間ギリギリまで話をし、皆それぞれ家へと帰った。

やっぱり退屈する事は無さそうだな、生徒会に居ると。

そんな事を改めて認識した、古詠であった。

第16話 終業式

「明日から遂に、夏休みだよ！」

「イエー！」

「なんだか楽しそうですね、先輩方」

午前中に終業式が終わり、午後からは授業が無いため、生徒たちは下校を始めていた。

のだが、生徒会役員はそういう訳には行かず、生徒会室に集まっていた。

「そりゃあ、祭りとか色々あるからだろ？如月さんは知らないけど、柑條は好きだからな、そう言うの」

俺がそう言うのと柑條は嬉しそうに話を続ける。

「そうだよ。花火だよ、祭りだよ！今から楽しみだね！」

「それは良いのだけど美玖、あなた休みの間も生徒会の仕事があるの、忘れてる訳ないわよね？」

すると今まで浮かれていた柑條が、うって変わって真剣な表情をして、全員を見つめて言う。

「そうなんだよ。って事で、夏休みの仕事の詳細を伝えるよ」

そう言つて、ホワイトボードにスケジュール表を貼り出した。

「取り敢えず、私と雪乃、月ちゃんはリーダー研修会に行くでしょ？その間にミー君、天音、風ちゃんと一応莉桜は、平和慰霊祭用に折り鶴を折っておいてね」

「ええ」「はい」「分かったよ」「了解です」

あー、あつたなそんなの。

「次に、全員でサマーフェスティバルの清掃活動と見回りをするよ」
サマーフェスティバルかー。

「…そう言えば、仕事の合間に一緒に回る約束だったな…」

「！！」

ん？今何人か、俺の眩きに反応したか？

「あとは折り鶴を持って、慰霊祭に参加かな？」

柑條が言うのと、歌ちゃんがホワイトボードを見ながら答えた。

「そう見たいですね。あ、会長、この予定表のコピーってありますかね？」

「えーっと、確か莉桜が任せろ、って言っていたけど…」

柑條がそう言うといつもの様に、タイミングよくチャットが届いた。

『柑條の製作した予定表は、共通掲示板とそれぞれの携帯端末に、送って置いたぞ。P.S:サマーフェスティバルには、僕も参加する。当日は案内を頼む』

うん、相変わらず手際が良い事で。

にしてもアイツ、サマーフェスティバルには来るのか。何か意外だな。

「さすが、チータ。便利だね」

「だね。それじゃあ、予定についての話はこれぐらいで良いかな？」

「ええ、問題ないわ」

「ユツキーに同じくだよ」

「私も、姉さまと同じくです」

「はい、異論有りません」

「俺も無いよ。って事で、もう帰っていいか？」

俺が帰っていいか聞くと、柑條は待ったをかけた。

「ミー君は下校時間ギリギリまで、ここで勉強だよ。今年は生徒会の仕事もあるんだから、早めに課題を終わらせないとね」

「いや、間に合ってます。って事で、帰らせろ」

「いつも計画的にやっているのは知っているけど、生徒会の仕事もあるんだからそうは言っていないよ」

如何やら、どうやっても帰らせてはくれないらしい。面倒見がいいのは知っているが、お節介が過ぎる気もするんだよな。とは言っても今回は、柑條の言い分が正しいのは分かるがな。

「それなら、これからみんなで勉強会をするのは如何かしら？」

「良いね、賛成だよ」

「さすが、姉さまです」

「良いですね。丁度分からない問題が合ったんで、先輩方に聞きた

いと思っっていたんです」

そんな俺と柑條の言い合いを聞いていた雪姫さんたちは、良い事を思い付いたと言う風に柑條に提案した。

「ちよつと待て、これじゃあ勉強会をする流れじゃないか！」

「え？良いじゃない。それにほら」

そう言っつて雪姫さんは、携帯端末のチャットを見せてきた。

『勉強会をするなら、暁荘に来ると良い。冷房環境も整っているからな』……赤城の奴まで、乗り気かよ」

「じゃあ暁荘に行っつて、これから勉強会だね。雪乃、莉桜にこれから行くからよろしくっつて、言っつておいて」

柑條が雪姫さんに指示を出すが必要は無かつたらしく、チャットが更新される。

『了解した』だそうよ」

「よし、楽しい夏休みに向けて、頑張るぞー！」

「『おー！』」

「はあ、またも拒否権は無い様だな。これ」

結局、観念して暁荘で勉強をする事になりました。

やっぱり、女子には弱いな……

第17話 空論の続き

「いらっしやい、古詠。待っていたよー！」

夏休みに入って一週間ほど経ったある日、赤城から話があると言われて、暁荘の赤城の部屋（制御室）に呼び出されていた。

「そーかい。そりやスマン事としたか」

「いいや、そんな事ないよ。呼び出したのは、私だしね。そう言えば君、夏課題は終わったの？ 休みに入る前から、他と違って頭良くないから、課題が終わるのに時間がかかるだの、量が多いだのぼやいていたけど？」

「ん？ ああ、終わったよ。フライングしたお陰で、何とかな」

夏休みの課題は、休みになる前から出されそうな所を前もって済ませて置いたお陰で、既に終わっている。

長期休暇の時、前半から中盤を使って課題を終わらせ、後半はゆっくりするのがセオリーだった。だが、今年はそうもいかない。

なぜなら、生徒会の仕事があるからだ。今まで通りで予定を組んでいたら、絶対に課題が終わらなかったよ。

他の役員たちは、あの程度の課題量なら一週間もあれば片付くと言っていた。

やっぱりあれだな。生徒会の連中は、頭がいい奴ばかりだな……俺って、何で居るのか不思議だね。

まあ、とにかく周りの連中の事を考えると、自然と量が多いだの時間がかかるだの、ぼやいていた。

ともあれ課題が終わっているから、赤城の呼び出しに応じた訳だ。

「古詠って、何だかんだで、真面目だよね」

「ま、それだけが取り柄って、言えなくも無いし。で、用事は何さね」「そうそう、古詠ってゲー研の部長と仲良かったよね？」

ゲー研の部長？ って言ったら…

「ほら、魔法少女好きの」

「ストップ！ タスクだろ。てか、それ以上人の趣味を暴露しようとするなよ！ と言うか、どうして人の趣味を知って居るんだよ！」

「え？だって、学校の端末を使って閲覧していたら、そのログが私の所に来て残る様になっているもの。いくらその端末の記録を消しても、こっちで全て記録が残って居るんだから、知って居て当然でしょ？」

「当然でしょ？って言われてもな」

悔れない、て言うか怖いな。マジで学校中の端末は、赤城の目や耳な訳だ。

マジで、敵に回したくない奴だよ……

「取り得ずタスクの趣味については置いておいて、そのゲー研の部長が如何した？」

「古詠、そこで部長と、VRMMOの企画の話をしていたでしょ？」

「あくあ、あつたなそんなこと」

「あれを聞いて私、その世界を創ってみたいなんて思っているの」

「ほうほう、それで？」

「そこでタスクのアイデアノートを、譲って貰いたいのだけど、その交渉をして貰いたいの」

「いくつか、質問していいか？」

「もちろん」

「ノートの事を知って居るのは、覗き見して居たんだろうから置くとして、あんな机上の空論みたいなやつ、出来るのか？」

「出来るのかじゃない、やるんだよ。幸いな事に彼と違って、私には伝手があるし、私だけで殆ど出来ない事もないよ」

こいつ、今サツラととんでもない事を口走ってなかったか？

まあ取り敢えず、赤城に任せれば可能性はあるって話か。

「次だ、自分で交渉すればいいんじゃないか？」

「それはあれだよ、急に知らない奴から極秘ノートを譲ってくれって言われて、はいどうぞって、渡す人がいると思うの？」

「あー、それもそうか」

確かに、居ないだろうな。俺だったら、警戒するだろう。

「そう言う事で、私の事は言わずに回収して来て貰いたいの」

「ん、交渉は引き受けようか。結果はどうなるかは、保証しないけどな」

「それで問題ないよ。ダメだったら、奥の手を使うだけだから」
「何するつもりだか……まあ良いか、話はそれだけか？それだけなら帰るが」

そう言っつて、部屋を出ようとする。すると赤城はもう一つと言っつて呼び止めた。

「午後から、会長たちとVRとARの試作品のテストをするんだけど、一緒にどうかかな？」

「気が向いたら来るよ」

「OK、ならその時はお土産もよろしく！」

分かったと返事をし、部屋を出る。前も思ったが、赤城の奴事あるごとにお土産を要求して来てないか？

まあ、無視すればいいだけだが、それを聞き届ける辺り、人が良すぎることか、ただ女子に甘いだけか……

どっちでもいいけど、こりゃあそろそろ、バイトするべきかなあ

……

第3. 5話：Extra(バレンタインデー)

「なあ、夜海。今日は何の日か知ってるか？」

ホームルーム前、先日発売されたばかりの新刊を読んでいると、輔がいつになく上機嫌に聞いてくる。

まだ、一日が始まったばかりだと言うのに、何でこいつはテンションが高いんだ……

「知らん、興味ない。今新刊読む方が大切だ」

「何だよ、ノリが悪いな」

そりゃ悪くもなる。

出たばかりの新刊を読むのを、邪魔されたんだから。

そもそも、今日が何の日だと言われても、思い当たるものは無い。

「まあ、そう言うだろうとは思っていたけど」

「分かってたなら、聞くな。で、何の日なわけ？」

仕方なく、読んでいた本にしおりを挟み、話を聞く体制を整える。

輔は待つてましたと、言わんばかりに語り始めた。

「今日は二月十四日、バレンタインデーだよ！」

「おー、過度な期待を抱く、亡者たちの災厄の日。兼、主夫輔の独壇場」

「お前の中のバレンタインのイメージって、そう言うのなのか……」

違ったっけ？

周りの男子たちから、狂気じみた気迫を感じたからってつきり、そう言う事かと。

それと主夫輔は間違つて無いはず。

そう言う特別な事がある時、決まって(料理)教室を開いているし。

「それよりもだ、知ってるかよ」

「うん、もちろん知らない」

「芸能科の赤穂さん、本命渡すらしい」

「誰それ？ってか、何で知ってるの？」

「教えたってどうせ覚えなないだろ？取り敢えず、美女だよ」

なんかむかつくな。まあ、言う通り覚えなないだろうけど。

「何で知って居るかと言われたら、昨日開いたチョコ作り教室で聞い

たからだな」

「……俺が言うのもアレだが、守秘義務って無いの？」

「今回だけだよ。だって、あの芸能科の生徒が本命だぜ？探るつきやないだろ？」

芸能科か……

確か、メディア関係や芸術関係の志望生徒の集まりだったな。

別に不思議はない気もするけどな

まだ社会に出て活躍している訳じゃないだろうし、スキャンダルとは関係ないだろうし？

渡すぐらい自由じゃないか？

すると輔がチツチツと指を振りながら、考えを見透かしたように言う。

「お前の考えも間違っていない。けどな、重要なのは美女が誰にチョコを渡すかだ」

「ふくん、で？結局何を話したいわけ？」

俺からしたらどうでも良くて眠くなってきた。

「放課後渡しに行くらしいから、覗きに行かぬ？」

長い前置きだったな。

それならそう言えばいいのに。

それに、答えは決まっている。

「うん、行かぬえ」

「よし、それじゃあ放課後、体育館裏に……って行かぬえの!!」

「あいにく、忙しい身だな。放課後は生徒会の仕事がある」

「あゝ。なら仕方ないか。一人で行って来るわ」

「ん、そうしとけ。……そう言えば、どれだけ貰ったん？」

残り数分でホームルームが始まるため、話を切り上げる。

がその時、ふと気になったので聞いてみた。

「義理が十個、施策の評価を含めると、四、五十はいつてると思う」

「なるほど、本命はナシっと」

「うツ…、言うな…言わないで」

「ま、義理でも貰えるだけマシじゃん？……貰えない奴もいるし」

「……なんかゴメン」

本命ナシと言われた時、オーバーリアクションをしていた輔は、申し訳なきように俺に謝る。

けど、謝るなら他の人にしてほしい。

意味が少し違うかもしれないが、一応は毎年貰っているから。

「赤穂さん、話って何かな？」

「じ、実は更識君に、わ、渡したいものが……」

放課後、生徒会室に向かう途中の中庭で、チョコを渡す場面に出くわしてしまった。

渡しているのはどうやら、例の赤穂さんのようだ。

輔の話だと、体育館裏のはず。

これはあえて、輔にウソを教えただろうな。

邪魔されないようにするために。

そもそも何で俺が中庭に居たのかと言うと、生徒会室に行く前に散歩しようと思って、ここに来た。

しばらく中庭を歩き回って、そろそろ生徒会室に行こうと思った所で、現在の状況に陥った。

気配を殺して立ち去りたいところだが、場所が悪い。

二人の居る位置、それは生徒会室のある校舎側の扉付近にいる。つまり、迂闊に動かない方が現状得策なのだ。

「渡す…もの？」

「え、えつと…：…そ、その」

そんなテンプレなやり取りは良いから、早く済ませて！

そんな思いが通じたのか、赤穂さんが行動を起こす。

「こ、これ!!う、受け取って!!」

「え、ちよ、赤穂さん!!」

そう言っつて袋を更識に押し付け、走り去っていった赤穂さん。

「これっつて一体？あつ、ヤバ。部活遅れる！」

袋を押し付けられ、茫然としていた様だが、部活に遅れそんなことを思い出したらしい。

更識も急いでこの場を立ち去って行った。

「ふう、やっと動ける。それじゃあ俺も、生徒会室に行きますか」

「あ！遅かったね、ミー君」

「ああ、ちよつと道に迷っつてな」

生徒会室には俺と、引きこもりの赤城以外の役員は揃っていた。

「そうなの？まあいいや。それよりミー君、バレンタインデーだよ！」

「はい、はい。今年は何？」

席に着きつつ尋ねると、柑條は自信満々に言う。

「今年はミー君の他にもいたから、みんなで食べれるように、チョコレートケーキにしてみました！」

そう言って柑條は机にケーキを出す。

そう、一応貰っているとは柑條からだ。

毎年柑條がなにを思っただか、チョコを用意しているのだ。

「お上手ですね、会長」

「おいし、そう…」

「そうね、とてもおいしそう」

「柑ちゃんく、早く食べよう」

「そんな事ないよ？だってチョコケーキは、初めて作ったからね」

そう言いつつ、ケーキを六等分して皆の前に置く。

その傍ら、雪姫さんがコーヒーを用意する。

「準備できたね？それじゃあ」

「」「」「いただきます！」「」「」

第18話 赤城莉桜

「よお、古詠。少しいいか?」

制御室を出て階段を上がっていると、待ち構えていた暁先生に捕まり、食堂へと案内され座る様に言われた。

暁先生はお茶を持って来て、それは差し出してきた。

俺はそれを受け取り、一口飲んでから切り出した。

「それで?何の用ですか?」

「たいした事じゃないさ。莉桜と上手い事話があっている様で何よりだ」

「そう見えますか?来る度にお土産を要求されているんですけど」

要求されてついつい買ってきて来てしまうけど、出来ればやめて貰いたい。

無視すればいい、と思うかもしれないが何と言うか、断りづらい。

自分以上に陰で頑張っている人だし、女子相手だと分かってからはなおの事、こちらから拒否はしづらい。

あれ、よく考えてみたら答え出てるじゃん。

「それは、お前らの勝手だろ?」

「全く持ってその通りです。はい」

「ま、その様子だとほんと要らん心配だったか」

「心配?」

暁先生は何やら心配をしていたらしい。

何の心配についてなのか、聞き返してみると少し苦笑いをしつつ、語り出した。

「莉桜の奴、立場的にも少し特殊だろ?」

「少しと言うより大分ですね。学生に学校のシステムを任せるとか、その時点で学校も特殊過ぎます」

「それはあれだ、アイドルや役者と同じだよ」

「アイドルや役者ですか?それって、学生でも社会に出て、働いている奴はいるって事ですか?」

「そう言う事だ。そいつらと同じで、莉桜の場合はシステム関係が得

意だった、ってだけの話。そんな訳でその特殊な環境に居るアイツは、今まで友達って言える奴らが居なかつたんだよ」

「何かとんでもない暴露が行われ始めたと思うんですけど！良いんですか、聞いちやって良い類何ですかそれ！！」

「大丈夫だ。……………多分な」

「今、小さい声で、『多分』って言いましたよね！友人関係の話って繊細の事があるんですよ、特に女子関係は！」

「ま、大丈夫さ。必要以上は喋るつもりは無いからな」

「ならいいですけど……」

「それに、話されたくない事を言いかけたら、口止めしに来るさ」

「やっぱり大丈夫じゃ無さそう！」

「とにかくだ、友達がいなくてそのうちネットゲームにのめり込んでいったんだ。しかし仮想の世界でも、友人は中々出来なかつたらしい。お前さんも知っているだろう？リオって言う、色んなゲームの上位ランカー」

「ええ、アレですよ。急に現れては、瞬く間にそのゲームの上位枠に名を残すプレイヤー。自分は協力対戦のやつで会って、何か気に入られてメアドを交換しましたね」

「その交換相手が、初めての友達だった訳だ。アイツ、ゲームでも異様な強さを発揮していたからな。他の交換した奴らは、その強さを利用したい奴や挑戦状を叩き付ける様な奴らで、うんざりしていたらしい。そんな時出会ったのが、これまた変わったプレイヤーで、リオの存在を全く知らないときた」

「そのうえ、知った後も特に気に気にも留めない」

「その反応が、アイツには新鮮だったんだろうな」

「でしようね。やたらとチャットが来たり、プレイ時に絡んで来たりと」

「まあ、ようやく出来た友人が俺のいる学校に入学するって知って、自分もこっちに引っ越して来たんだよ。と言っても、引っ越してきてからはこの暁荘で、仕事詰めの生活を送っているけどな。そんな生活でも、ちゃんと友達が出来た訳だから、安心したって話だ」

「色々遠回りでしたけど要は、今までボツチの生活をしていたから、友達が出来るか心配だった訳ですね」

「そう言う事だ。そう言えば、お土産が如何とか言っていたな？」

「ええ、言いましたけど？」

「あれな、飲食物以外を持っていけば解決するぞ。要は、友達から形が残る何かを貰いたがっている訳だから」

「なるほど…。そう言えば、引越して来たとか言っていましたけど、赤城の親は如何しているんですか？」

「親か、確かどこに行っているか分からないんだよな。まあ、莉桜自身は気にして無いみたいだな」

「……普通は気にしませんか？」

「そうだけど、仕送りはされているらしいし、自分でも仕事を請けて稼いでいるからな」

「あー、なんか納得です。因みに、どれ位稼いでいるんでしょう？」

「ふっふっふっ、聞いて驚け。何と仕送りを含めて、年間20……」

「こらー!!何をバラそうとしているんですか!!」

暁先生が年間額を言おうとした瞬間、食堂の扉が開かれた。

そこには赤城が立って居り、先生の顔面に向かって枕を投げようとしていた。

「ぐお」

違った。顔面に枕をクリーンヒットさせていた。

ヒットした相手はそのまま倒れ込んで、起き上がる気配がない。

まあ、当たった時の音が、なんか違ったもんな。

それは置いておいて、やっぱり今までの会話は聞いていた訳だな。ていうか、何でこのタイミングで出て来たんだ？

「いいかい、古詠？君には判らないかも知れないけど、こう言う話が外に漏れると変な虫が寄って来るから、絶対に聞かなかつた事にしてよ！」

「ん、別に構わないよ。聞いては見たけど、別に興味は無かつたし」

「興味なかつたんだ!？」

俺が聞いたのにも拘らず、興味が無かつた事に驚いた赤城。

少し考えるようなしぐさを見せると、恐る恐ると言った感じに話し出した。

「それじゃあちよつと聞いてみるけど、自分より収…やっぱ何でもない」

「?まあ、そつちが納得するなら良いけど?取り敢えず帰るわ。先生が目を覚ましたら、帰ったって言うておいて」

第19話 サマーフェスティバル

「ミー君！次来たよー！」

夏休みの折り返し地点の今日、地域・学校共同の企画「サマーフェスティバル」が行われていた。

この祭りはうちの学校のグラウンドを会場として、地域の人が屋台を出し、学校は部活ごとの成果を披露するというものだ。

成果発表については自由参加だが、毎年参加している部は吹奏楽部と、一月から四月限定の部である「ええじゃんSANS A・がり」のチームの二つだ。

その他にも色々とあるが、今は正直それ所では無い。

「夜海、まだまだあるわよ。頑張りなさい」

「そう言うなら、お前さんも手伝ってくれよー！」

「?やっているわよ?」

「確かにやっているね！けど俺が言っているのは、缶を潰す方だよ！袋詰めは後でいいから、今は缶を潰せよ！いや潰して下さい、雪姫さん」

現在、前から言っていた通り、アルミ缶回収を行っている。

服装は祭りにもかかわらず制服だ。これは「生徒会の活動の一環なので、制服で活動するのか筋だよ！」と言う、柑條の意見が採用されたからだ。

さて、仕事の分担はと言うと、受け取り担当が柑條・歌ちゃん、アルミ缶洗い担当がツッキー・歌ちゃん、潰す担当が自分と雪姫さん、集計担当が赤城、出張回収が如月さん。

そんな感じで分担しているのだが、予想以上に感が集まり洗いと潰すのが追い付いていない。

にも拘らず雪姫さんは潰しては袋に詰めてと、中々進んでいない。むしろ潰していない缶の山が、どんどん大きくなってきている。

その分のシワ寄せが此方にやって来て、正直テンションとかおかしくなりそうだ。

「先輩、疲れて、おかしくなった?」

訂正、如何やら傍から見たら、既におかしいらしい。

「月乃ちゃん、思つても言わないのが優しさだよ」

歌ちゃんも思つていたわけだ。こりゃあ大分、疲れているんだろうなく。

単純作業な分、飽きが来ているんだろうな……まあ、作業量で言つたら歌ちゃんが一番大変だろうか。

受け取つては洗つてと、二つの作業をしているんだから。

「と言うか、赤城は後処理だから良いとして、如月さんは如何したんだよ！『外回りに行つて来るよ』つて行つたきりかれこれ二時間近く帰つて来ないぞ！」

「うくん、まあ天音なら大丈夫でしょ？好き勝手しつつもちゃんとノルマはこなすだろうし」

「そうね。天音なら遊んでいる様にしか見えなくても、仕事はちゃんと終わらせているものね」

確かに言われて見たら、そんなに気がするな。

「まあ予定よりも多く集まったから、そろそろ受け取りは終了するよ。だから、今ある缶が潰し終わつたら、みんなで祭りを楽しもう！」

『おー！』

「労いを兼ねて、奢つちやうよ！」

『おおー！』

柑條にしては気前がいいな。でも確かこういう時つて確か……

「もちろん、ミー君が」

「何となくそんな気はしていたよ！」

やつぱりそうかよ！でもつて、たいがい拒否権は無い。何となく言いそうな気がしていたから、多めに金を持って来ていて良かったぜ。

「一応は言っておくが、先約が居るから順番やら何ら決めたり、先約との交渉はお前さんらでやつてくれよ」

「うん、分かっているよ。既に話は付けてあるよ！」

……相変わらず、無駄に手が早いな……

第20話 聖と夜海

アルミ缶回収が終わって、前もって聖と決めていた待ち合わせ場所に向かった。

待ち合わせ場所に到着したが、そこにはまだ聖の姿は無かった。

「おかしいな、確か先について待っているって、連絡が来ていたんだが…」

「ふっふっふ、それはこう言う事だよ！お兄さん！」

そんなセリフと共に、誰かが背中に飛びついてきた。

いや、この場合は一人しかいない。っていうか、やる様な奴はこいつぐらいだ。

「その歳になってそんな事やる奴は、お前ぐらいだよ、聖」

そう言って、背中に飛びついた聖を下ろし、額をかるく小突いてやる。

小突かれた聖は詫び入れる様子もなく、むしろ嬉しそうにしている。

「えく、そうかな？バカップルはやるんじゃない？」

「そう言う事は、口にしちやダメだ。って事で、会場のカップルたちに誤っておけ」

「ごめんなさい？」

「疑問形にする必要は、無いだろ……」

「まあまあ、そんなどうでも良い事より早く行こうよ！お兄さん♪」

「分かった、分かったから、手を引っ張るな」

聖と祭りを周り色々な出し物を見て回ったりした。その途中、ふと気になった事を聞いてみる事にした。

「そう言えば聖、なんで柑條との交渉に応じたんだ？」

「え？なんで、それは女の子同士の秘密だよ。ま、しいて言うなら、お互いの利害の一致があったって事かな？」

「ふくん、そうか。それともう一つ。お前さんも、しばらく見ない間に成長したかと思ったが、やっぱり変わって無いみたいだな」

「フフフ、そう言うお兄さんこそ変わってないよね？周りの人たちには興味が無くて、頼まれごとは殆ど引き受けると事か」

「そうか？いや、そうなのかもな。お前さんの事もつい最近まで、スツカリ忘れていたからな」

そう言う聖は「ハア」と小さくため息を吐きつつ、その時の事を思い返す様に言った。

「そうだろうと思っていたよ。美玖姉さんはすぐに思い出していたけど、お兄さんは美玖姉さんに言われるまで思い出さないんだもの」

「そうだな、それに生徒会に入ったのも、頼まれたのがきっかけだったしな」

「お兄さんって女の子の頼みだと、特に断る事が無いよね？それどうしてなの？」

女子の頼みごとを断らない理由かあ

改めて考えてみると、あれだな。小さい頃の友人関係に女の子が多くて、自然と頼み事とかが多かったと言うか……主に、柑條からの？そう考えると柑條に甘かったから、周りもそれに乗っかる様になって、それでもっていつの間にかこんな事になっていた、って言う事か……となると、理由は……

「柑條のせいだな」

「美玖姉さん？そう言えば美玖姉さんも、昔から変わってないよね」
「そうだな。でも俺からしたら昔より、たちが悪い。如何すれば俺が動くか、知って居るからな」

「あははは、確かに。美玖姉さんなら、的確についてくるだろうね。そう言えば、そろそろ交代の時間だね」

聖がそう言うので時計を確かめると、確かに次の人物の所に行く時間だった。

「ん？ああ、そう言う事か。あんまり一緒に回ってやれなくて悪かつ

たな」

「美玖姉さんとの約束だもん。仕方ないよ。でも、行く前に一つ聞きたい事があるんだけど……」

「ん、まあ言ってみ？」

「お兄さんって好きな人、いるの？」

「好きな人、かあ……いねえな。そもそも好きな人が出来るかも、分からないから……」

「…それはまだ、興味がある人が居ないから、って事？それともやっぱり、恋をするっていう気持ちの理解出来ないから？」

「うくん、どうだろう？多分両方かな？しっかし、何でそんなこと聞くんだ？」

「ううん、ちよつとね。それより！そろそろ行かないと、間に合わないでしょ？」

そう言われ、改めて時計を見ると時間ギリギリになっていた。

「やば、悪い。それじゃ、また今度な！」

「うん！今度は、二人つきりで出掛けようね！お兄さん！」

手を振って走っていく夜海を送りだす聖。

夜海が見えなくなると振っていた手を下ろし、何かを呟いた。

しかしその呟きは周りの音にかき消され、何を言ったのかは本人にしか分からないものとなった。

第21話 美音と夜海

「先輩！遅いです!!」

「いや、悪い悪い。急いではみたが、途中で疲れた」

聖の次の相手は歌風さんだ。

因みに順番は、先約だった聖、それ以降はじゃんけんで決まり、歌風さん、ツツキー、雪姫さん、柑條の順番となっている。

「まったく、七夕の時もそうでしたけど時間はちゃんと、守って下さいよ」

「分かってはいるよ。まあ、相手は選ぶよ」

「先輩？それって、私は遅れても問題ないって事ですか？雑でも良いって事ですか？」

な、なんか、歌風さんの迫力が増した？

不味い事でも言ったか？と、取り敢えず最後まで意見を言い切っておくか。

「違う、違う。少しぐらいなら、笑って許してくれるだろ？」

「え？まあ…そうですね」

「そう思っていたんだが…悪かった、次からは絶対遅れないようにするよ」

「えっ、いや、あの、別に待つのが嫌いな話訳では無い…、って先輩がきちんと時間を守れば済む話ですよ！」

「う、うん。だから、気を付けるって言っているよね？大丈夫？何か、葛藤みたいなのも漏れていたけど？」

「くくくくっ！ほら、早く行きますよ！先輩！」

「あ、待って。さき先行かれると、見失うから。おっい」

なぜかご機嫌斜めになってしまった歌風さんは、何件か店を回って

ようやく機嫌が直った。

いまは先程買ったかき氷を食べつつ、ベンチで休憩している所だった。

「そう言えば歌ちゃん、折り入って相談があるのだが」

「ふあい？なんですか？」

「ちゃん付けして呼ぶの、恥かしいから別の呼び方してもいい？」

「うーん、やっぱりかき氷を食べていると、頭にキーンとききますね。ええと、それで呼び方でしたっけ？そうですね、さん付けでなければ許します」

「さん付け以外か……言っとくけど俺、ネーミングセンス無いからね？」

「あー、そうですね。月乃ちゃんの事を『ツツキー』って言ってますもんね。確かにそこまでセンスがなさそうです」

「んー、フツキー」

「却下です」

「ミツキー」

「なおダメです」

「風ぼう」

「嫌です」

「ファン」

「どこまでセンスがないんですか!?!」

歌風さんは言うと同時に、酷いと言わんばかりに頬をつまんできた。

「ふ悪あるい、ふ悪あるいつかかったたからから放あしなして」

すると言われてから気付いたのか、慌てて頬から手を放した。

如何やらは無意識のうちに、つまむぐらいダメだったらしい。

「ふう、どれもダメとなるとどうしたものか…」

「ふっふっふっ、お困りのようだね、少年」

「ん？如月さんじゃないか」

変わった奴が話し掛けて来たと思ったら、行方不明(?)になっただけの如月さんだった。

「天音先輩！今まで何処に行っていたんですか？」

「どこって…会場中からアルミ缶を集めていたんだけど？」

そう言っただけで、如月さんは手に持っていた、缶で一杯になったであろう袋を満足げに見せる。

「わあ、凄い量が集まったんですね」

「だな、まるで季節外れのサンタクロースだな」

俺がそう言うと、如月さんは乗っかりつつ先程の話の続きを始めた。

「フオフオ、ではサンタからのアドバイスじゃ。　いつその事、呼び捨てにすれば良くない？以上！　天音サンタからのアドバイスでした！」

それだけ言うと袋を担いで、また何処かへ行ってしまった。

それにしても、呼び捨てでか…

「成る程な…：歌風はどう思う？」

「え、あ、そうですね、…：どうせなら、な、名前の方で、お願いします…」

「ん、了解。それじゃあ、美音」

「はい！」

「そろそろ時間だから、行くわ」

「え、もうそんな時間でしたか…：あの、夜海先輩」

「ん？何だ？」

「お願いしたら、買い物とか付き合ってくださいますか？」

「あー、まあ他に用事が無ければな？それじゃあ、今日はお疲れさん」
そう答えて美音と別れる。その際、美音らしく律儀に「お疲れさまでした！夜海先輩！」という声が聞えてきた。

なんだろう？可愛らしい後輩から言われると、何だか疲れが吹き飛んだ気になるね。

一方夜海と別れた美音は、ある事を思い出していた。
「そう言えば、最初のやり取りのせいで忘れていました。先輩、私が浴衣に着替えていたの、気付いていたんでしょうか？」

第22話 雪姫姉妹と夜海

「しかし、よかったのか？二人一緒で？」

美音と別れ、ツツキーとの合流場所に着くと、そこには雪姫さんもいた。

「私たち二人で決めた事だから、気にする事は無いわ」

「それに、目的も、同じ。つまり、時間の、有効利用」

目的が同じ？

もしかして、全員で回らないのはそれぞれに目的があったからか？

でもって、それに俺は付き合っていると？

ただ全員に奢って終わり、と思っただけ？

「…柑條のヤツ、何考えてやがる」

「まあまあ、先輩、気にしては、ダメ」

「そうよ、夜海。美玖も何か思っただけじゃないでしょうし」

「そうかなあ」

二人はそう言うが、付き合いが長い身としては、何かあるのではないかと思わずにはいられない。

「それよりも、早く行きましょう。時間がもったいないわ」

「姉さまに、同意」

そう言っただけ雪姫姉妹は、考え込もうとしていた夜海の腕を引っ張って歩き出す。

「お、おい！腕を引っ張るなよ！」

「……………」

「拒否権は無いのね……………はあ、それで？どこに向かうんだ？」

「……………」

突然引っ張られた事に対する抗議をするが、聞き入れられない。

どうやら拒否権は無く、今は考えるより祭りを楽しめ、という事なのだろう。

しかし、そうだとしても……………

「返事ぐらい、返してくれよ……………」

しばらく無言の姉妹に引つ張られ続けていたが、目的の場所に着いたのだろう。

ようやく歩みを緩め、腕から手を放した。

「そろそろ、教えてくれてもいいいだろ？」

「そうね。それじゃあそこに、座ってから話しましょう」

そう言っつて雪姫さんは階段の右端へ腰を下ろした。

それに続くようにツツキも腰を下ろす。

「夜海、あなたは座らないの？」

「いや、全員で階段の途中に座り込むって、通行のジャマになるかな、って思っつて」

座ろうとしない夜海を見て、雪姫さんが座らないのか尋ねた。

それに対して夜海は、通行の邪魔になるかもしれないからと述べた。

しかし雪姫さんは「その心配はないわよ」と答える。

「ここは会場の端、この先には閉鎖中の校舎があるだけ。つまり基本的には、人の通りは無いのよ」

なるほど、人通りが『基本的』には無いと……ん？基本的には？

「ねえ、雪姫さん？基本的には、とは？」

ふと疑問に思っつたことを聞いてみる。

すると雪姫さんは

「この場所、と言うよりは位置かしら？まあとにかく、この辺りからはステージはもちろん、会場全体が見渡せるスポットになっているの

よ」

と言った。

「つまりそれを知って居る人の、行き来があるって事か」

と雪姫さんに確認を取ると、「そう言う事になるわね」と言う。取り敢えず、座つても大丈夫そうだな。

それに、考えようによつては良い場所だ。

なんせ人混みから離れつつも、祭の様子を楽しめるのだから。

ん？そう言えば、会場全体が見渡せるって言っていたな。

とすると、もしかして……

「なあ、もしかしてここからステージを見るために、引っ張つて来たのか？」

「ええ、そうよ。言つて無かつたかしら？」

やっぱりそうか……つてか説明されてない。

雪姫さんの中では、説明済みだったのか。

「姉さま、説明して、ないです。時間が、ギリギリだったから、説明、後にして、引っ張つて、来た」

「あら？そう言えばそうね」

訂正、単純に忘れていただけだな。

しかしこれからステージでは、なにをするんだっただけ？

「なあなあ、これからステージで行われるのは何なんだ？」

「はい、これから行われるのは、『ええじゃん』です！」

「あー、あれか」

春先に行われるとある祭り。その祭りでメインイベントとして行われる「ええじゃん」

これは町全体で行われる祭りで、「ええじゃん」は海岸沿いの道を約一キロ、踊り続けるものだ。

「そう言えば、ウチの学校の代表チームも呼ばれていたわよね？」

雪姫さんがそう言うと、ツツキーが答えた。

「はい！金賞を獲得したチーム『縁舞夢翔』は、ゲストとして呼ばれています！」

「お、おう……」

……人が変わったように。

「他に、地域のチームが七組エントリーされています！」

…本当にツツキー？

いやいや疑うまでもなく、さつきまで一緒に居たしなあ…

普段おっとりしていて大人しい子が、こんなにも饒舌に喋り出すと、こう何て言うかな？

うくん、とにかく違和感がすごい。

そんなツツキーの変化を見て、雪姫さんが苦笑いをしつつ戸惑っている夜海に、月乃の変化について説明し始めた。

「やっぱりこうなったわね…」

「雪姫さん、この変化に心当たりが？」

「ええもちろん。姉妹ですもの。月乃ってたまにこうなるのよ」

「たまに？毎回じゃなくて？」

「ええそうよ。べつにええじゃんが好き、と言う訳じゃないの。あの子のマイブームのモノ。今回で言えばたまたま『ええじゃん』だった、と言う事よ」

つまり、ツツキーはマイブームのモノを語る時、もの凄く生き生きして来る訳だ。

いやー、初めてみた。

まあ好きなものを語る時って、人が変わるって言うけど…

ツツキーの代わり様には少し驚いたな。

こうやって改めて見ても、なんか生き生きしているように見えるな。

「そんじやま、ツツキーの解説付きで鑑賞するのでしょうか」

「任せてくださいー！」

「そうね。それに私が言うのもなんだけど、月乃は一度ハマったら納得するまでやる子だから。七割程度を聞くつもりでないし、きつと（身が）持たないわよ？」

…そんなに濃い内容になるのか……………

「よくやく、終わったな……」

雪姫さんの言う通り、もの凄く細かい説明だった。

途中からパフォーマンスより先に、ツツキーの解説や見どころ説明が入って……

楽しめたけど……何か疲れた……

「ご苦労さま。やつぱり気に入られているだけはあるわね。こうなつた月乃の話を、最後まで聞き切るなんて」

「ん？雪姫さんは、どう対処しているんだ？」

雪姫さんの言い方、まるで聞き流しているって聞こえるけど……

「もちろん、要点だけ聞いてあとは聞き流しているわよ？コツさえ掴めば、それで会話が成り立つもの」

やつぱりかく。まあ、それが普通なんだろうけど……

まあ、切り替えようか。

「じゃあそろそろ、俺は柑條の所に……って何やってんだアイツ？」

「あら？本当ね。行ってあげた方が良いじゃないかしら？」

柑條との待ち合わせ場所に行こうと、立ち上がり会場の方を見ると、その柑條がカッブルと女の子の間で何か言っている。

どうやらトラブルの仲裁に入った様だが……どうしてこう、面倒事に首を突っ込むかなあ、アイツ。

「面倒だが、仕方ないよな……雪姫さん、あの三人は誰か分かるか？」
仲裁に入るにしても名前を知らない。

いや、憶えていないだけかも知れないけど……

「ええ、男は隣のクラスの更識燈色さらしきひいろ。男の隣の女は、芸能科の赤穂あこう萌未めぐみ。二人の向かい側、美玖を挟んでいる子は……誰かしら？」

「一年生、芸能科の早乙女神楽さおとめかぐら、です。先輩」

「サンキュー。そじゃあ、行つて来るわ」

お礼を言い、急いで柑條の下へ向かう。

……そう言えば、何か忘れてる気がするけど……ま、いつか。

夜海が雪姫姉妹の下から離れていくと、月乃は学校支給の携帯端末を取り出し、送られて来たメッセージを見ながら雪乃に声を掛けた。

「姉さま、美音の連絡通り、浴衣姿、夜海先輩、気付いて無い」

「そうみたいね。でもまあ、本当に気付いて無かったのかは疑問よ？

夜海の事でも、単純に色々あって言い忘れたとか、あるかも知れないわよ？」

「……そうかも……さすが、姉さま」

第23話 修羅場の解決

「会長！一体何事ですか」

現場に到着し、柑條へと声を掛ける。

ほかの生徒の前だから呼び方はあえて、会長と呼ぶ事にした。

「あつーミー君！ナイスタイミングだよ！」

声を掛けると柑條は笑顔で出迎える。

：嫌な予感がするが、取り敢えず現状の把握をしよう。

「自分からしたら、バツトタイミングな気もしますが……で、会長？これは一体？」

「んつとねえ、痴話ゲンカ？なのかな？たぶん？」

改めて訪ねてみるが、どうも柑條自身も判断に困る案件の様だ。

取り敢えず分かった事は、相当面倒な事に首を突っ込んでしまった事。さらに、それを解決せねばならないという事。

……正直言つて、面倒だ。

巻き込まれるのは御免だ。

しかし、首を突っ込んでしまった以上、最善を尽くさないとは……

「はあ……取り敢えず説明、お願いします」

「オツケー。期待しているよ、生徒会の相談役」

いつの間に相談役なんかになったんだ？

確かに、相談箱に届く内容の整理・処理はしている。

あとたまに昼休憩の間、生徒会室に悩み相談に来る生徒の相手をしたりもしたが……

用事が無ければ昼休憩の間、俺以外の役員が生徒会室に居る事は無い。

まあ、最近（夏休みに入る前）だとなぜか、俺以外の役員もよく居たけど。

：今考えると、初めはのんびり出来るからと思つて使っていたのに、いつの間にか教室に居る時と同じぐらいの、出入りがあるな……

いや、それよりこう考えてみると、確かに相談役だな……

いつの間に自分で、自由を捨てていたんだろ……

「ミー君？どうしたの、急に落ち込んだりして？」

「いや、今は気にしなくていい。それより説明」

柑條が心配そうに尋ねてきた。

今の考えが、顔に出ているのか。

取り敢えず自分の事は後だ。

「分かった。けど、あとで聞かせてもらおうからね？」

「ああ、分かっている」

「それじゃあ、説明するね？シックな藍色の甚平を着ている彼と桃色の浴衣の彼女は、カップルなの。それでもつてこっちのショートポニーの子は、二人の関係を認めないって言って、喧嘩していたところなの」

……何がどうなつてそうなる？

「二人の関係って……確か赤穂さんと早乙女さんは、姉妹じゃないよね。なぜそうなった？」

「そうだよね、そこがよく分からないの。取り敢えずミー君も、本人たちに聞いてみて判断してよ」

そう言つて現場を指差す。

つられて見てみるとそこには、手を繋ぐカップルの男の方を睨んで、今にも飛び掛かつて行きそうなポニーテールがいた。

こりやあ、早く如何にかした方が良さそうだ。

「あく、そこの人たち、会長から話は聞いたがいつちよ分からんから、改めて聞かせてくれんかね。現状の、睨み合いを含めて」

「分かりました。と言つても、自分も何が何だか……めぐみん、どう言う事？」

当事者たちに説明を求めると、まず彼氏の更識が応じた。

が彼も現状、置いてきぼりで話について行けていないらしく、彼女へ説明を求めた。

「神楽ちゃんは私の可愛い後輩なの。前に演技指導を担当したことがあって、その時に懐かれちゃって『萌未お姉様』呼ばれるようになったの」

それだけ聞くとまあ、可愛い後輩が出来ただけで、問題なさそうだ

が……

「それが何で、こうなっているんだ？慕っている先輩の幸せを邪魔するようなことに」

それを訪ねると今度は、今まで黙って更識を睨み続けていた、早乙女さんが口を開いた。

「それはもちろん、萌未お姉様のためです！こんなどこの馬の骨とも知れない男と、お姉様が付き合うなんて、認められません！萌未お姉様は私のものです、お姉様の貞操は私が守ります！」

……どうしよう、これ

柑條がただのトラブルか、痴話ゲンカか、悩んだ訳が分かった気がする。

単純に慕っているからこそその行動なのか、はたまた百合の子なのか……

希望的には、前者であってほしい。

けど、ちよくちよくと百合っぽい発言が聞える気がする。

こうなりや、出たとこ勝負の解決しかない。

「ん、話は大体わかった。つまり早乙女さんは、尊敬する大切な先輩が他の人にとられるのが嫌だ、って事だね」

「な、なに言ってるの！そんなんじゃない！」

そう言うが、若干の照れが見える。

良かった、百合じゃなくて……

これなら何とかなるかも。

「そっか…神楽ちゃん、ひーくんを私をとられちゃうと思ったんだね…」

「ち、違います！私は萌未お姉様が心配で…もう！あなたのせいだ」

「うん、分かっているよ。神楽ちゃん、優しいもんね。私が悪い男に引つかからないか、心配だったんだよね」

赤穂さんが納得したように述べると、早乙女さんはさらにアタフタし始める。

「っっっ」

「あ、逃げた」

しまいには逃げてしまった。

取り敢えず解決かな？

「神楽ちゃん……」

「まあ取り敢えず、日を改めて三人でゆっくり話すと良い」

「でも、追い駆けないと。ほっておく訳には……」

逃げて行った早乙女さんを心配して、彼氏をおいて追い駆けて行くとする。

早乙女さんの事、本当に大切に思っているんだな。

けどまあ、心配ないだろう。

こういう時は決まって柑條が手を打っている。

「大丈夫！あとは生徒会に任せて、デートを楽しんできなよ。あなた達、初デートでしょ？」

ほら、予想通り。

伊達に長い付き合いじゃないからな。

っしかし、二人からしたら初デートと言う事を当てられた方が、驚きだったんだろう。

更識は柑條にたずねる。

「な、何でそれを」

「ん、それはヒ・ミ・ツ・マ、とにかく神楽ちゃんは任せて」

「ン、まあそう言う事だ。せつかくのデートの時に、気にするのは野暮だよ。」

そう言っつてやるとようやく納得し、手を繋いでこの場を離れて行った。

「ふう、終わった」

「お疲れ、ミー君♪さすがだね」

一息つき、無事に終わった事に安堵する。

一方柑條は、労いの言葉を掛けてくる。

がその労いの言葉を、素直に受け取る事は出来ない。

「流石じゃあるか！何で面倒事に首突っ込んでいるんだよ」

返ってくる言葉に予想がつくが、どうしても言っておかないと気が済まない。

「そりゃあ、生徒会長だもん。生徒間の問題を見つけたら、解決してあげるべきでしょ?」

あゝ、分かっていたよ。

こいつがこう言う事も、そして……

「それにミー君だって、私が首を突っ込んだら、ほっておかないでしょ?」

こちらの考えも分かっているって事を。

「……そーだな」

これ以上この事を言うのは、分が悪いか。

話を変えよう。

「でだ、早乙女さんはどうなった?」

「莉桜の案内で、月乃ちゃんが向かったらしいよ?無事合流して、今は落ち着いているみたい」

よし、取り敢えずは解決だ。

にしても、この携帯端末を持っている限り、赤城に居場所は筒抜けだな。

と言ってもこれは、生徒証明書を兼ねているから、生徒全員に言える事だが。

「さてっと、それじゃあ私たちも行こうか?」

「……マジで言っただけ?」

「もちろん♪それに……お互い話したいことがあるでしょ?」

「……そーだな」

第24話 柑條と夜海

「みんな楽しそうだったね」

「そうだな」

現在柑條と一緒に、生徒会室のベランダに出て、夜風にあたりながら祭りのことを思い返していた。

「アルミ缶回収も、予定より多くの缶を回収できたから、よかったよね」

「そうだな」

「途中、トラブルもあったけど、大事ならなかったし」

「そうだな」

「…ミー君、聞ってる?」

「そうだな」

「えい!」

「うお!ちよ、柑條。膝を蹴るなよ。地味に痛いだろ」

「さつきから『そうだな』しか言わないからだよ」

「ありゃ?そうだったか。悪い考え事してた」

自分的にはちやんと、話していたと思っていたのだが、どうやら心ここに在らず、の状態だったようだ。

「だろうね。その顔を見たらわかるよ」

「へえー、因みにどんな顔してた?」

「んー、そうだね。人を見ている様で、見ていない。どこか別の場所を見ている様な感じ、かな?」

なんか分かるような、分からないような……

「ま、簡単に言えば、難しい顔をしてたんだよ」

そう言っただけ柑條は、部屋から二つのパイプ椅子を持ってくる。

そして、イスを並べると、片方に座る。

…きつと、何を考えていたのか話せ、という事なのだろう。

付き合いが長いと、相手が言わんとする事が大体、分かって来ると言うものだ。

もう一方の椅子に座ると、柑條が先に口を開いた。

「ミー君、もしかしてまだ、生徒会に加入したこと、後悔していたりする？」

「……そうだな、正直言うとな、いまだに思うのは、俺が生徒会に居るのは役不足で、相応しくなかったんじゃないかと思う」

「やっぱり……でもね、私はミー君で良かったと思ってるよ？・実際、ミー君も良かったとは思ってるでしょ？」

柑條の言葉に頷く。

役不足だとも思っているし、知り合い、柑條がいた事で変に委縮する事なく、過ごせていた。

自分が言った事、柑條が言った事、どちらも本心であることは間違いない。

：けれど、これ以上柑條を通して他社と信頼を、仲を深めるわけには行かない。

そう考えているのも見越してだろう、柑條が踏み込んできた。

「ミー君は、人をあまり信じないよね。それも、自分も含めて」

「……だなあ。俺は自分の考えも、信用できない。疑って、疑って、疑い抜いてようやく、自分も相手も信頼できる」

「うん、知ってる。……まだ、あの時の事を引きずっているんでしょ？」

柑條が言っている事はきつと、あの時の事だろう。

「自分がした選択で、あんな事になったんだ。自分を信用できなくなるには……十分すぎる。……自分が信じられなければ、他も信じられないからな」

親友と言い争い、自分の意見を押し通した

「私は気にしすぎだと思うけど？・それに、前みたいにならない様にするために、距離を取る必要もないと思うよ？」

その時の意見の食い違いから、徐々に関係は崩れ

もう話も出来ない位に、関係をこじらせてしまった。

「気を抜いていて、壊してしまうのが嫌なんだよ。近ければ近すぎるほど、いつの間にか壊してる。そうなる前に自ら道化を演じて、距離を作っておくんだよ」

だから、心を許せる友人を得てしまったのなら失ってしまう前に道化を演じて、関係を保つ。

そうすればきつと、ギクシヤクすれど、壊れ切ってしまう事はないはずだから。

「その自己犠牲は、本当にみんなを救えているのかな？」

柑條が俺の目を見て、訊ねてくる。

「さあな、所詮は自己満足。いわば逃げ……なんだろうから」

「なら約束。生徒会わたしたちからは、逃げないで。私たちは大丈夫だから。

ミー君がいなくなる必要は無いから」

真剣に、それでいてどこか不安げに柑條は言う。

俺が生徒会からも、距離をおこうとしている事

きつと、その兆候を感じ取っているからこそその表情。

「……そうだと良いな」

俺に言えるのは、コレだけ。

肯定も、否定も出来ない。

「信じてるから、ね？」

柑條が期待を込めた眼差しで言う。

「わーっつたよ。だから、この話はこれで終わりだ」

「うん……わかった」

両者ともに黙り込んだ。

その静けさに耐え切れず空を見上げると、綺麗な星空が広がっている。

柑條の顔をうかがってみると、柑條は何かを考えていた。

「……ねえミー君。これはお節介かもしれないけど、将来何になるか決めていないなら、物書きかカウンセラーになったら？」

と思ったら、唐突に進路についての話を始めた。

一体どういった、風の吹き回しだろう？

今日の柑條は、どこかお節介が過ぎる気がするな。…いや、いつもの事か。

「いやね、疑り深いし、相手の事親身になって考えるけど、きちんと第三者目線の意見だからね。向いているんじゃないかと思って……」

まあその言い分なら、カウンセラーってのは分かった。けど……

「物書きの理由は？」

「本が好きだから？」

そこは疑問形で解さないでほしかったよ。

まあでも、柑條の意見は一理ある気がする。

けど……

「まあ、参考にするよ」

今後の事は、後で考えよう。

今は、今を楽しむのが一番だから。

第25話 お泊り会く方針決定編く

「第一回！お泊り会を始めるよー！」

暁荘の大広間に美玖の声が響く。

この場には、古詠を除いた生徒会メンバーがそろっていた。

「夜海先輩がいませんけど、いいんですか？」

美音が指摘すると、美玖は『いいの、いいの』と言って、改めて今回の趣旨を説明する。

「今回は女子メンバーだけで、夜通しお話しするために、集まってもらったんだよー！」

「…そのためだけ？」

「そうだよ！まあたまには、ミー君の居ない機会があっても良いと思うんだよ。じゃないと話せない事もあるだろうし」

「ふうん。例えばどんな話を、するつもりなのかしら？」

ようやく興味が湧いたのか美玖に、具体的に何を話すつもりでいるのか訊ねる、雪乃。

「そうだね、スタイルの事とか、恋バナとか、かな？」

スタイルと言う単語を聞いて、一年生組が少し反応した。

「いいね！よくし、そうと決まれば、早速みんなでお風呂に行こうよ！」

それに気づいてか、はたまた単純に己が楽しみの為なのか。……後者な気もしないでもないが、天音が提案を出す。

「みんな、ですか？」

月乃が天音の提案に対して、少し困惑気味に尋ねる。

「そうだよ。いい機会だし、みんなが入ろうよ！」

「ですが、全員が入れる広さが、あるのでしょうか？」

押し切ろうとする天音に対して、美音が尤もな意見を口にする。

「…大丈夫だよね？チータ？」

美音に言われて初めて気づいたのか、恐る恐る莉桜に訊ねる天音。

「心配無用よ。浴場は男女別で、この人数で入っても、余裕がある位だから」

コーヒーカップを片手に答える、莉桜。

莉桜の回答得て、期待に満ちた目で天音が美玖を見る。

美玖も天音の意見に反対ではない。よってすぐに、結論が出た。

「よおし、ならこれからみんなでお風呂行こう！その後晩ご飯食べ、お喋り会だ！」

美玖によつて宣言されると、それぞれ準備を始める。

「チータ、お風呂は地下だったよね」

一番に準備を終えた、天音が莉桜に訊ねる。

「そうだよ。地下に降りてから、案内板があるから、それ見て行つて。あ、SPTある？」

莉桜が全員を見渡しながら、訊ねた。

「？持つて来ているけど？」

美玖が疑問を抱きつつ答える。雪乃たちも頷く。

それを見て莉桜も、満足そうに頷く。

「うんーなら館内マップを、SPTに送っておくよ。迷う事は無いと思うけど……ま、多少増築しているし、一応ね」

そう、今さらだか彼女たちは、暁荘の増築によつて出来た大広間に居たのだ。

「ありがとう。それじゃあ先に行くね」

「私も行くわ。月乃」

「はい、姉さま」

天音と雪姫姉妹が大広間を出て行く。

そのあと少し遅れて、美玖と美音が出る。

「ねえ、ナナ。あなたの事、みんなに話そうと思うの」

『良いんじゃないでしょうか？丁度いい機会ですし』

「だよね？良かった。『もう少し秘密にしておきたい』って言われた

「ら、どうしようって思ったよ」

『私がお母さまに、反対する訳ないですよ』

「そっか…うん、それじゃあ私もお風呂に行って来るね」

そう言うと、莉桜も大広間を出て行く。

第26話 お泊り会くお風呂編く

「ちよ、天音！やめなさい」

「ふふふつ、言われてやめると思っているのかい？」

「キャツ！撫でるように、脇を触らないで」

「いや、前から思っていたけどユツキーって、小振りでも良い形だよね。それに引つ込む所は引つ込んでるし。ツツキーとフーちゃん
はポテンシャル高そうだし、これから期待だよね」

「……………」

最後に浴場にやって来た莉桜だが、中の惨状を見て言葉を失っていた。

そこでは、天音によって骨抜きにされたと思われる三人、美玖、月乃、美音が浴場の床に倒れている。

さらに現在進行形で襲われている雪乃は、最後まで抵抗していたようだが、次第に抵抗が弱くなり、崩れ落ちた。

「一番の驚きはやつぱり、柑ちゃんだよ！着痩せしていて、全く気づかなかったけど、背が低いのに胸は大きいって、どういう事？もしかして、栄養は全部胸にいってるの？だから背が低いのかな？」

「余計なお世話だよ！」

天音の容赦ない分析に、美玖が復活する。

「いい加減にしなよ、天音！何で持っている人が、持たざる人を辱めてるのさ！普通、逆でしょ！」

「いや、つい。だってみんな可愛いんだもの。愛でないと損でしょ？」

堂々と腕を組んで言い切る天音。

身長を含め、バランスの良い体型の天音を『ぐぬぬ』と唸り声を上げつつ、見つめる美玖。

二人の背後の湯船では、いつの間にか復活した雪姫姉妹と美音が湯に浸かっていた。

「……………二人とも、いー加減にして下さいね？」

「え、っと……」「り、莉桜？」

いまだ睨み合いを続ける二人に、莉桜が声を掛ける。ただその顔は、笑顔であるが、笑ってはいないものだった。

「い・い・で・す・ね？」

「は、はい……すみませんでした」

二人はようやく大人しくなる。

「まったく、馬鹿な事して風邪なんかひたら、それこそ見てられないわよ」

「えーっと、ようやく落ち着いて湯にも浸かれた所で、皆さんに話があります」

天音たちの暴走（？）も収まり、全員で湯船に浸かっていると、莉桜があらたまって話し始める。

「みんなは私が、学校のシステム関連を制御しているの、知っているよね。中でも、居場所を知って居たり、会話を聞いている方法に疑問を持った事はない？」

頷く一同。そして、もちろんあると答える。

それを見て莉桜は、苦笑いしながら語る。

「実はその事について、みんなに聞いて貰いたいんだ。簡潔に言うからね、SPTから全部情報は得ていたんだよ」

「でも赤城先輩、校内の監視カメラは？」

「そうです。あれで、監視、していたのでは？」

「もちろんあのカメラも、動いてはいるよ？ただあれは彼女が、現実を

見るために使っているんだ」

「『「彼女?」』」

莉桜の言葉に、全員が首を傾げる。

すると莉桜は何処からか、SPTを取り出す。そして全員に、画面が見えるように持つ。

『初めまして、皆さま。私は自己学習システム搭載型、議事録管理AI、ナナと申します。今まではお母さまの代わりに生徒会の議事録を付けていたり、校内のカメラや皆さま方のSPTを通して、密かに皆さまと生活しておりました』

「しゃ、喋った?!」

「AIか」

「成る程ね。これがあなたの隠し事、と言う訳ね?」

「さすが、チータ先輩。AIも、作っていた、なんて」

「でもなんで、このタイミングで発表したんですか?」

一同が様々な反応をする中、美音がもつともな疑問を口にする。

「いやタイミングは、いつでも良かったんだ。古詠がない時で、他のみんながいる時なら」

「?どうして、夜海先輩?」

「あ、そっか、分かった。もしかして、この子をミー君の誕生日プレゼントにするつもり?」

美玖の発言に、頷きを見せる莉桜とナナ。

「ほら古詠の誕生日って」

「七月の十七日、ちょうどサマーフェスティバルがあつた日だね」

「『そうだったの?』」「『そうだった、ですか?』」「『本当ですか?!』」

美玖の一言に、驚く一同。それに対して美玖は、すっかり忘れていたと言う。

「サマーフェスティバルの時、柑條と古詠の会話を聞いていたこの子が、彼のサポートをしようと言ったんだ。そこで、私たち全員からのプレゼントとして、彼女を送りたいんだけど……反対の人がいないかなって」

莉桜の話の聞き、顔を見合わせる美玖たち。

やがて、頷き合うと雪乃が口を開く。

「いくつか質問、いいかしら？」

「もちろん」

「それじゃあ……なぜ話したの？いつものあなたなら、気にする事なく行動していたと思うのだけど？」

「うん、そうだね。けど今回は、彼女の望みだからね。それに」

「それに？」

「古詠って、機械系はあまり得意じゃないでしょ？」

莉桜が美玖を見据えて言う。

「そーだね。最低限しか使えないね、ミー君は」

「あ！だから、メールなどの返信、遅いんですね」

「そうだよ。本人曰く、『下手について、壊したくない』だって」

美玖が夜海の考えを言うと、周りは納得したように頷く。確かに彼なら、言いそうな事だったからだ。

「そう、だから機械系のサポートを、彼女にして貰おうと思ってね。そうすれば、多少はマシになるだろうし」

「成る程、私たちの連絡の円滑化ね。あとは……どうやって、受け取って貰うつもり？」

「プレゼントって事は、黙っておくつもり。言っちゃうと、受け取って貰えなさそうだし、本人も誕生日の事、忘れていたみたいだからね。誕生日プレゼントって事は言わずに、言い包めるつもりだから」

そう答えると、雪乃は頷く。

「わかったわ。つまり、AIがあなたの管理から、夜海に移ったと考えればいいのね」

「うん、そう言う事になるね」

「分かったわ。私からは以上よ」

「他に何か質問は？」

莉桜が訊ねるが、特に質問は上がらなかった。

『皆さま、改めまして、よろしくお願ひします』

『皆さま、改めまして、よろしくお願ひします』

こうして、浴場でする必要が合ったのか、謎な話は終わった。

「あ、あのー」

「どうしたの、月乃？」

と思ったら、月乃が挙手をする。

「え、えっと…美音が、夜海先輩の誕生日の、話の辺りで…の、のぼせて、倒れちゃった、ですけど…」

よく見ると、美音が月乃に膝枕をされている。そして空いている方の手で、美音をあおいでいるのだった。

第??話：Extra～VRな脱出ゲーム?～

「ようこそ！VRワールドへ！」

とある専門学校で開催されている学園祭。

その出し物の一つ、VR体験のブースへやってきた。

今回のメンバーは、歌風さんとツツキーの一年生組。

家で本を読んでいたところ、歌風さんから呼び出されてやって来たのだ。

「何事かと思えば、付き添いか…」

「まあ良いじゃないですが。先輩って、こうもの、好きでしたよね？」

「まーな。しかも、視覚だけじゃないタイプって、まだ数が少なくてお目に掛かれないしなあ」

「体感型……VR。研究用の機材を、使って……学生たちが、一から、作った……試作品、らしいです」

補足をする、VRを室内に投影し、五感全てを利用して、体験できるから体感型。実際に部屋内のもは、連動しているそうだ。

例えば、ドアのロックや、投影されてモノに対する触感など。

詳しくは……よくわからない。こう何て言うか、色々聞いたが専門っぽい話でよく分からなかったわけだ。

ともかく、それらの試作品を今回、一般公開出来るように調整して、出しているらしい。

公開されているエリアは『海中』『北極』『サイバー』の三つらしい。

入場の際に受けて説明だと、試作段階のものにつき、いつトラブルが起きるかわからないそうだ。

それでも何度もテストをしてきて、一般公開する分には、問題ない範囲らしい。

「ま、呼び出された事については不満だったが」

「おかげで良い物が観れた、ですか？先輩」

「だな。後は入り口で言ってた、トラブルが起きさえしなければ言う事無し、だな」

「先輩、それ……フラグ……かも」

ツッキーはそう言う出口付近を指さす。

そこには人だかりが出来ており、何やら騒がしかった。

その場に向かうと、スタッフと思われる人物が、あたふたしながら対応をしていた。

「大変だ。何者かにシステムをジャックされて、仮想空間に閉じ込められてしまったよ！犯人からは、こんなメッセージが」

渡された紙を見てみると、

『システムは私たちがいただいた！』

つまりお前たちは、閉じ込められたと言う事だ！

外へ出たくば、私たちが仕掛けた問題を解くのだ！』

と書いてあった。

……なんだろ、この三文芝居感溢れるセリフは。それに紙の裏には、何かを書き込める様になっている。

もしかして、個々の本質はVRとは別にあるのか？

「大変です先輩！閉じ込められちゃったみたいですよ」

「ゆる、せない……犯人」

「だよね、月乃ちゃん！」

あー、二人とも楽しんでいるなあ……ってか気づいてないのか。

言わぬが花、か……ま、元々二人の付き添いだし、要らん事は言わんでおこう。

「先輩！問題解きに行きますよ！」

「はやく……行きましょう……！」

「はいはい。分かりましたよ、つと」

「まずは、海中ステージです！」

気合十分な二人に付いてやって来たのは、海中ステージ。

その名の通り、辺りは一面、海中を表現したエリアだった。

「張り切ってやって来たのはいいけど、どこに問題があるのか、分かっているのか？」

「そう言えば……」

「知らない……です。でも、先輩……こう言うのは、探せば……見つかる……ものです」

「まー、そーだろうな」

すんなりいけば、早いんだがな……

ま、見守りますか。

「夜海先輩！月乃ちゃん！見つけました！」

歌風さんが指さした先には、四角いウインドが浮かんでいた。

どうやらあれが、問題で間違いなさそうだ。

「えーっと、

『・走ると15になる海の生き物はなあに？』

舟 波

栄螺 鱒

鱒 若布 □

・□に入る生き物はなあに？』か……」

…俺でも答えがわかる問題だな。

自分より賢い二人には、簡単すぎる問題だろうな。

「一問目の答えが***で」

「二問目は……***です、ね」

「よし、なら次行くぞ」

「はいー」「はい、です」

「今度は…北極、ステージ…です」

「えっと、

『シリウス、プロキオン、ポツクス、カペラ、アルデバラン、リゲル
これらを繋ぐと現れるものは？』

「どうやら今度は、星座に関する問題らしい。
表示されているウインドの端に小さく、ヒントは見上げた先に、と
ある。」

「シリウスはおおいぬ座、リゲルはオリオン座の事ですね。残るプロ
キオンは」

「こいぬ…座。それだけなら、冬の……大三角。けど、オリオン…座
は、リゲル、じゃなくて…ベテルギウス」

「そもそも、他に三つの星があるから、違うだろ」
「ですね……三つ？追加で三つですか……」

俺が言った言葉に歌風さんは、何か引っ掛かりを感じたようだ。

もしかして、何か思いついてパターンかな？

「もしかして……***ですかね？」

「***？」

「！なる…ほど。たしかに、あり得る…かも」

「ん。なんか知らないが、じゃあ回答は***でいいのか？」

「いえ、おそらく正確に言うと……………」

最後にやってきたエリアは、サイバーエリア。

と言っても、自分たちが普段使用しているPCの画面、その内部にいる……………って感じた。

「サイバーって、そう言う意味なのね…で、最後の問題何かな？」

「これ……みたい、です。」

『・仲良く航らせよ！・

・迷路をCLEARせよ！』

ここにきて…急に、体を……動かす、系？」

「みたいですね」「みたいだな」

結果だけ報告すると、ただ体を動かすだけかと思っていたら、結構頭を使う仕様だった。

と言っても、後輩二人が楽しみながら解いていたので、別に疲れた訳でもない。

全ての問題に挑戦し終えて、出口まで戻ってきた。

するとそこで待ち構えていたスタッフが、笑顔で近づいてきた。

俺はその人に、今までの回答を書き込んだ髪を渡す。

「お疲れさま〜！みんな、楽しめた？実は乗っ取られたのは、ウソ☆
本当は脱出ゲームだったんだ♪

解決貢献度に応じて、景品のプレゼントだよ〜♪」

景品を受け取り、二人を連れて部屋を出る。

「で、どの辺りで気づいた？」

部屋を出て少し歩いた後、二人に訊ねる。

最初は世界観に入り込んでいただけ、と思っていたが、そんなはずはない。

「そうですね…私は、割と初めから気付いていましたよ？月乃ちゃん
は？」

「私も…おな、じく」

やっぱりか。となると……

「分かっけていてわざと、気付いていない演技をしていたのかよ」

そう言うと、後輩二人は笑顔で答えた。

「いつもの…お返し」

「そうですよ。いつも演技している先輩に、おかえしです。それに…」

「楽しんだ、もの勝ち。…先輩の、言っていた事。ね、美音」

「ねっ！月乃ちゃん」

第27話 お泊り会く包囲網編く

「それじゃあお待ちかね、恋バナを始めようか！」

晩ご飯を食べ終え、就寝の準備が終わったところで美玖が張り切つて声を上げる。

「でも美玖先輩、恋愛話をしようと言われて、素直に話すとは思えませんけど……」

「フフフ…そこは我に秘策あり、だよ！」

美音がおずおずと意見を述べると、美玖は不敵な笑みを浮かべて、自信満々に答える。

「議題に使うのはズバリ、ミー君をどう思っているか、だよ！」

「そんなことだろうとは、思っていたわよ。美玖、あなた最初から……」

「言うんじゃないよ？遅かれ早かれ、可愛い後輩のために手を貸すつもりだったしね？」

夜海をどう思っているか、それを議題にすると美玖が言うと、美音が動揺しているのが窺える。

その表情を盗み見た美玖、雪乃、月乃、莉桜の四人は、お互いに目を合わせ、頷き合う。

「それじゃあ、始めようか！まずは、天音から…つて天音？」

美玖は天音に声をかけるが、返事がない。

肩を揺すってみると、天音が仰向けに倒れる。

「も、もしかして……」

「はい、天音先輩は、寝てます…」

「……気を取り直して、月ちゃんいってみよー！」

天音の早々の離脱に、美玖は戸惑いっつも月乃に話を振る。

「私、ですか？……そうですね…夜海先輩は、大好きな、先輩です」

「そ、そうなの!？」

「美音?…どうしたの?そんなに、焦って?」

「えっ!そ、そんなことないよ!それより、す、好きなの?夜海先輩のこと」

「うん。夜海先輩は、姉さまみたい」

「つまり、遊んでくれるお兄さん？」

「…はい。たぶん、それが、一番、近いです」

美玖が月乃の述べたい事の確認をすると、月乃はそれを肯定する。それを聞いた美音は、胸を撫で下ろしていた。

「うーん、そっかそっか。なら雪乃は？」

「私？そうね…：…一緒にいて飽きない人、かしら？」

「ほうほう、その心は？」

「深い意味はないわよ。けど、彼を見ているとなんだか、癒されるのよね」

ウツトリとした表情を浮かべつつ、話す雪乃。雪乃の話を聴いた美音は、共感したように頷いている。

その様子を美玖は横目に見て、美音にバレないようにニヤついていた。

「うん、うん。それじゃあ、莉桜はどう？」

「私は…：そう、初めての友達、かな？私って、現実でもゲームの世界でも、友達っていないなかったんだよね」

「あれ？でも、リオは、ネットゲームでは、有名プレイヤーで、信者も、いますよね？」

月乃の言う通り、莉桜のネットゲーム界限でのキャラ・リオは、卓越したセンスで様々な伝説を打ち立てた事によって、伝説級のゲーマーとして崇められていた。

そして現実の彼女は、学生とは思えない頭脳を以てして、既に企業からの仕事を受けている。

「アレはただの信者。リオを崇めるだけで、対等に接してくれる人は居なかったよ。唯一、古詠だけが違った。まあ、単純にリオの事を知らない、初心者だった訳だけ…：でも現実とゲーム、どちらにおいても初めて友達になった人だよ」

「でも、友達は増えたでしょ？」

「そうだね。本当にそうだよ。柑條たちはかけがえのない友人だね」

「…臆する事無く言われると、なんか恥ずかしいね／＼／」

照れ顔を浮かべ、頬をかく美玖。

「えーつと、よし、最後に風ちゃん！」

「わ、私ですか…そうですね」

美玖の振られると、考えるそぶりを見せる美音。

しかしこの場にいる者には、美音が古詠に恋している事は、バレている。

「ま、聞くまでもなく、ミー君の事が好きでしょ？」

「な、なな、ツンン。ち、違います。そ、そそんな事、ありません」

「違うの？なら、夜海先輩の事、嫌い？」

「そんなわけありません!!」

明らかに動揺している美音。

その様子が、好きであると言う事は如実に表していた。

「うーん、見てたら分かるかな？」

「そうね。私たちの中では、隠さずに話した方が良くらいかしら？」

「………そんなに分かりやすかったですか？私……」

「大丈夫。夜海先輩は、気付いて、無い。……でも、それが、逆に、可愛そうだから……」

「だから私たちも、協力するからね。歌風の恋が実る様に、サポートするから」

『お任せください』

美音が思いを述べるまでもなく、周りが協力を申し出る。その中には、AIのナナまで居た。

「いくらアプローチを掛けても、ミー君から告白して来る事は、無いと思うよ？ミー君が好きなら、自分から伝えなきゃ、一生伝わらないと思う」

少し戸惑いを見せる美音に、美玖は優しく述べた。

やがて美音は一同を見渡し、覚悟を決めた。

「…分かりました。皆さん、よろしくお願いします。…私、夜海先輩の卒業式までに、告白してみせます!!」

第28話 赤城の提案

「赤城、用事って何だ」

夏休みも残すこと、あと三日。

サマーフェスティバル後にも、生徒会関連や委員会関連で、学校に呼び出されていたわけで、まともに夏休みを過ごした覚えがない。

「呼び出しに対しても不満が見て取れるけど、後輩たちとデートしてたじゃない？それって、ある種のリヤ充イベントでしょ？」

……あれは地獄だ。

後輩たちの機嫌取りをしつつ、一日過ごすとか、無理。

……まあその時の話は、また別の機会ですとして、あれを休みとは思いたくないな。

夜海の表情を見て莉桜は、苦笑いを浮かべる。

「あらら、贅沢だね。……歌風もよく頑張るなあ」

「ん？なんだって？」

「なんでもなく。さてと、それじゃあそろそろ、本題に入るかい？」

そう言って莉桜はパソコンを弄って、ある画面を出す。

その画面は生徒に配布されている、携帯端末が表示してあるようだ。

「これは？」

「見ての通り、生徒証明書兼学園支援端末『SPT（仮）』の仕様書」

「いやいや、それは見ればわかる。じゃなくて、なんで俺にこれを見せるのさ？」

赤城に意図が見えないと言うと、仕方ないと言わんばかりに、一から説明を始めた。

……普通、一から話すべきだろう。そもそも、SPT（仮）が何なのか、いまいちよく分かってないし。

「まず生徒証明書兼学園支援端末『SPT（仮）』通称、SPTは学校側の依頼で私が作ったアイテムだよ」

ポケットから、スマホと同サイズの端末を取り出す赤城。

その端末の側面にあるボタンを押し電源を入れると、実演しながら

説明を始める。

「基本用途は、生徒証明書。これは電源を入れると、すぐにポップする。でもって一般用には、メモ帳、カレンダー、メッセージ・チャット機能がついているの」

「一般用？それは生徒用って事だろ。なら、専用の物もあるのか？」

「その通り。先生や私たちが持っているのがそう。教師用は一般のものに加えて、出欠席管理が出来る様になっているの。生徒会用は議事録機能」

「へえー、そんな機能があったのか。でも使って無いよな？議事録機能」

「使ってる。生徒会室のパソコン、あれと同期してあるから。まあとにかくこれが、SPTの大まかな機能だよ」

ふと疑問に思ったことを聞いてみる。

「SPTってどういう意味なの？」

「Student・Personal・Terminalの頭文字。でも、まだ仮だからね？」

「今後完成品を作ると……まあいいや。依頼とはいえ、良く許可出たな？」

「そんなの簡単よ、『僕に学園の警備システム等任せるなら、いつそ便利なものを作り上げて見せる』って説得したら、向こうから喜んで差し出したもの」

「個人情報の管理がザルなうえに、俺たちは知らずに、お前お手製の監視アイテムを持っているわけか……」

「大丈夫。どーせ私にしか、ハードもソフトも作れないよ。それに整備やアップデート出来ないし。何なら、生産も独自のルート使ってるし」

……とことん規格外だよな、赤城って。

それはさておき……

「で結局、これの仕様書見せられた俺は、どうしろと？」

「えつと、そ」『お母さま、前置きが長すぎます』

ようやく本題に入れるかと思った途端、横やりが入る。

ただ、横やりを入れてきた相手は、赤城のパソコンだった。

「……どゆこと」

流石にこれは……どういう流れ？ってか、何？

「ゴメンね、ナナ。もうすぐ本題に入るから」

『随分長く、待っている身にもなつてください』

こちらの戸惑いをよそに、パソコンと会話する赤城。改めてもう一度誤ってから、仕切り直すように話し始める。

「え、改めてなんだけど、SPTを改良する上で、新しいAIを作ったの。それがこの子、自己学習搭載型、議事録管理AI・ナナ。今は生徒会の議事録を制作するだけのAIだけど、ゆくゆくは私の助手レベル、それかこのシステムの管理を任せようかなって、考えているんだ」

「……だから？」

「古詠にはこの子を、ナナを預かって貰いたい」

…やっぱり話が見えてこない。

議事録を管理するAIを作ったと。まあここまでが良いとしよう。よくないけど。けど赤城だし。天才の考える事だし。

「俺が預かる訳を聞いても？」

赤城に訊ねると、指を三本立てた。

「一つ、前に話していたゲーム。覚えてる？」

赤城の問いに頷く。

きつと、例のVRMMO企画の事だろう。

「あれの開発目途が立ってね。側は作るから、古詠にはシナリオ等の設定を考えて、管理を任せたいんだ。勿論メンテとかは、私がするよ？」

確か夏休みの初め頃に、話したばかりなのに、もう開発目途が立ったのか……

「二つ、古詠のこれからに役立てると思ったから。サマーフェスティバルの時の話、聞いたよ。物書きかカウンセラーを目指すかもしれないでしょ？」

「あ、まあ選択肢としては、アリかなってただけだけど」

「十分。で三つ、親である私以外の人を過ごす事で、成長を促したいから。以上三つの理由から、古詠に預けたいの」

「明らかな面倒事。けど、悪い事ばかりではないのは分かる。」

「って言うか相手は、赤城の作ったAI。電脳空間相手だと、どうやっても逃げ道は、無い。」

「はあー、分かった。引き受けるよ」

「うん、それじゃあ古詠の端末を貸して。ナナのマスター認証するか」

「言われた通り、赤城に端末を渡す。」

「その端末をパソコンに繋いで、何か打ち込む。」

「はい、それじゃあ彼女の事、よろしくね」

『よろしくお願ひ致します。マスター』

「わーっつたよ。ナナ、だっけ？ま、よろしくな」

「端末を受け取りながら応える。」

「赤城に対してはきつと、常識と言うものは通用しないのだろう。」

「つにしても赤城。いくら任されている、って言ってもよ、ほぼ理事長とか校長と差が無くないか？やってること的に？」

「あはは、面白いこと言うね♪仮に、もしそうだと言ったら、古詠はどうする？」

「赤城が愉快そうに笑い、訊ねてくる。」

「もし、理事長とかだとしたら……」

「別に。今までとあまり変わらないだろ？面倒くさいことに、ならない限りは、な」

「うん、うん。古詠なら、そう言うと思った」

「赤城は満足そうに、頷く。」

「その顔は、満面の笑み、と言うのが相応しそうだ。」

「……まさか……いや、ないな……うん、ないよね？」

「はあー、取り敢えず聞かなかった事にしよう。」

「……それはそうと、柑條には悪いがやっぱり、生徒会から少し、距

離を置こう。

これ以上俺が居たらきつと、あの空間、心安らぐ大切な居場所を壊してしまう。

楽しかった時間、大切な居場所を守るためには、この方法、俺が距離を取ることが一番だから。

第29話 体育祭の準備

「取り敢えずまずは、距離を置くか……」

『マスター……なぜそのような事を?』

「そのような事、つて?」

『生徒会の皆様から、距離を置こうとしている件です。なぜ自ら、関係が悪化しかねない事とするのですか』

「ああ、それか。それはな、……………」

「体育祭の準備なんだよ!」

「会長、手を動かしてください」

夏休みも明け、体育祭が間近にせまる。

生徒会の面々は準備に追われていたのだった。

「もく風ちゃん、ノリ悪い〜」

「体育祭が間近に迫っているのに関わらず、生徒会主催の競技が決まっていないですよ。少しは焦ってください!」

「なら、何かいい案は浮かんだ?」

「そ、それは…ないですけど…」

「でしょ？他のみんなはどう？」

美玖は意見を求めるが、誰も意見を上げない。

「夜海先輩…どうしたんで、しょうか…」

「みつくん、最近生徒会室に来ないもんね。最低限の仕事は、しているみたいだけど、どうしたのかな？」

「そうねえ。私は最近、避けられているみたい。だから、あまり話せてないのよね」

「雪乃先輩もですか？私もなんです。話しかけても『今は忙しいから後で』って言うんです」

彼女たちは、しばらく生徒会室に姿を見せない、夜海のことを話す。

夜海は夏休みが明けてからは、生徒会室には姿を見せていなかった。

正確に言うと、彼女たちが居るときには、生徒会室には来ていない。

最低限仕事（生徒会室の掃除と備品整理）はしているのだが、必要以上にかかわるのを避けるようになっていた。

そのため話し合いの場にも来ておらず、会議が進んでいなかった。というのも、このように会議が行き詰ったとき、夜海が発する一言

がきつかけで、話が進むことが多かったのだ。

「逃げないで、って言ったのになあ。…ズルいや」

「柑ちゃん、訳知りだね。なにに？柑ちゃんは一体、何を知っているのかな？」

寂しげに呟いた美玖の事を、天音は見逃さなかった。

天音に問われた美玖は、少し考えるように目を伏せたのち、とある話を始めた。

「これは、んつと昔の事なんだけどね、ミー君には幼少からの友人がいたの。私と知り合う前からの友人。つまり親友だね」

「親友…ですか？それは、高垣先輩…ですか？」

月乃は自分が知る限りの中で唯一、自分たち以外で夜海がよく話している人物、輔の名を挙げた。

しかし美玖は、首を振って否定する。

「彼は確か、小6の頃に知り合ったはず。ミー君とその親友は、それよりもっともくつと前に出会ったんだよ」

「聞いていると、今はそうじゃ無い…っていう風に聞こえるのですが…？」

「その通りだよ、風ちゃん。丁度タスクと入れ違い？いや、交代…：つて感じかな？ミー君はタスクと出会う少し前に、親友と喧嘩別れしたんだ」

「分からないわね。それがどうして、今の状況に関係して来るかしら？」

雪乃が首を傾げ、疑問を述べる。話を聴いた限り、その親友と喧嘩別れた事が原因と言いたいのは分かった。

しかし、それがどうして、自分たちを遠ざけることに繋がるのか。雪乃を含め、美玖以外の全員が理解できないでいた。

「どんな喧嘩をしたのか、詳しくは省くけど…：ミー君はその時、親友の言い分を聞かずに行動したんだ。その結果、積もり積もった些細な食い違いは、二人の関係を一気に崩していった。最初は私も、すぐに仲直りするって、思っていたんだけど…：」

「そうは、ならなかったのね？」

「うん…お互い譲らずで、一切口を利かなくなっちゃった」

場が静まり返った。話を聴いてそれぞれ思う所があったようだ。

普段のフワフワした喋りではなく、やや真剣な喋りで天音が美玖に訊ねる。

「その親友君は、今どうしているのかな？」

「分かんない。中学に上がってから一度も、見かけないんだ…：。一番の親友だったのに、あえなくなつて…：それでミー君、思ったんだつて。他人も自分も信用しない。友達と呼べる存在はつくらない。もし出来たのなら、それは大切にする。けれど…：親友と呼べるほど、しただたしくなつたなら」

「自分から距離を作る事を選ぶ…：かしら？それとも、それ以上親しくならないようにする、つて言ったのかしら？」

「ねえさま、それは……どちらも……殆ど同じ、意味かと。でも……夜海先輩なら、言いそう」

月乃の言葉に頷く、美音たち。

「その通りだよ。ミー君は自分を偽って、距離を取る事を選んだの」
雪乃たちの言葉を肯定する美玖。美玖の言葉を聞いて、また部屋は静まり返ってしまう。

そんな中あるものが、唐突に喋る。

『つまり僕たちは、古詠にとって親友に値する人、と言う事だ』と、お母さまがいつています』

「ナ、ナナさん!!びっくり……しました。急に、喋らないで……下さい」

莉桜の代わりに書記の仕事を行っている、AIのナナが喋ったのだ。

彼女はパソコンのスピーカを通して、喋っているのだから……

『すみません、いきなりです。ですけど、そろそろ慣れて欲しいものですね』

急に喋って、驚かせてしまう。不満は取り敢えず控えておいて……

『それより皆さん、暗くなっていないで、マスターをどうにかする方法を考えた方が、良いのではないですか?』

ナナの言葉に雪乃たちは、顔を見合わせ頷き合う。

「そうね。その通りだね」

「ですね。赤城先輩の言う通りだと思います。先輩にとって私たちは、とても大切な存在であることは、間違いないはずですよ!」

雪乃は赤城の意見に納得を示し、美音は自信満々に言い切る。

そんな中、月乃が次を見据えた発言、つまり……

「じゃあ……どうやって、先輩に……分かってもらう?」

根本的な問題を口にする。

現在夜海は、生徒会の面々を避けて行動している。

となると、場を設けたとしても避けられる可能性が大、なのだ。

月乃の発言に再度、悩みかけていた一同の耳に、不敵な笑い声が聞

こえてくる。声の人物は自身気に語った。

「ふっふっふ、天音さんにお任せあれ！」

「何かいい案でもあるのかしら？」

「もちのろんだよ！そもそも、みっくんの言ってる事とやっている事は、穴だらけのちぐはぐだしね。それなら、正面からぶつかって、認めさせればいいのさ！……ま、頑張るのは天音さんじゃなくて、フリーちゃんだけだね！」

天音の発言を聞いた瞬間、全員が天音の考えを理解した。

が、美音はそれどころでは無かった。天音が最後に付け加えた一言、その真意が判らず、戸惑いを見せる。

「わ、私ですか!？」

「そうだよ。フリーちゃんの頑張り次第で、簡単に解決&つと、これ以上は……ムッフッフ」

「ちよ、何ですかその笑みは!？」

「あ、だったら体育祭の競技、借り物競争なんてどうかな？」

美音の天音に対する抗議は、無情にもスルーされ、柑條は最初の議題であった、生徒会主催の競技の案を提案する。

「成る程、さすが柑ちゃん！その案良いね」

「そうね、期限が迫っているし、いいんじゃないかした？」

「ですね。一石、二鳥……ですし」

『「僕も賛成だ」だそうです』

「じゃ、決定！」

ほぼ満場一致で決定し、(この場において)一人をおいてけぼりにして、準備に取り掛かる一同。

そんな一同に対して、おいてけぼりな人物は、

「も~~~~!! 一体どう言う事なんですか!?! ちゃんと説明してくださいよー」

納得のいく説明を、求めているのであった。

第30話 体育祭

「さあさ、みんな盛り上がっているかい！みんな疲れ気味に見えるぞ
〜!!あ、因みに天音さんは、まだまだよゆうだよ〜」

実況席から天音の、ハイテンションなアナウンスが響き渡る。

体育大会は順調に進められ残す競技は、生徒会考案の競技のみとなっていた。

順調と言ってもそれはあくまで、全体を通してのこと。細かく見れば、ハプニングなどあったが、それはまた別の機会で……

さて、話を戻そう。

生徒会考案の種目、それは

「体育大会も大詰め！最後の種目は、借り物競争だよ〜！」

そう言って天音は、続けざまにルール説明を行う。

「ルールは簡単！まずはチェックポイントまで走る。次に、チェックポイントに設置されたボックスから一枚紙を引くよ。そしたら、紙に書かれたお題と一緒に、ゴールまで走ってね〜……って言う訳だよ。簡単でしょ？」

天音は、普通の借り物競争と変わりはないと説明する。

がしかし、実際はそうでもない。

具体的に違う点は、もうじき競技が始まるので省くが、一つだけ言える事がある。

夜海を除いた生徒会、つまり女子たちだけで、お題を考えている。そして彼女たちはある目的を達する為だけに、お題を考えていた。「さあ〜て、前座でこれ以上、出場選手を待たせるのは、悪いからね〜。合図よろしく〜」

その言葉を合図に、係がピストルを鳴らした。

と言っても、公平なスタートにするために、初めの人たちには現在の順位順に紙を引いて貰い、そこから一齐に始めて貰う事になる。

先程の合図は、殆ど形だけなのだ。

今さらながら、チームと点数差などの説明をしよう。

チームは四つ、赤・白・青・紫。

これは学部ごとに分かれており、三年生の代表、つまり団長に当たる人物たちによる、くじ引きで色が決定する。

ちなみに点数は、赤・スポーツ学部 537点 白・総合学部 512点 青・商業学部 481点 紫・芸能学部 529点

さて、借り物競争に出場しているのは、各チーム三人。各学年から一人が参加していると言う事だ。

この競技の点数内訳は、一着 100 二着 50 三着 25
四着 12 五・六着 0

四チームしか存在しないのに、六着まである事に気付いただろうか？

その理由は簡単だ。

この競技には、教員チームと生徒会チームが参加しているのだ。

さて、わたくしの補足説明はこのくらいにして、後は天音の実況に任せましょう。

「ついに始まった、最後の種目『借り物競争』！
今さらだけど説明するね！

この種目は一チーム三人のリレー方式だよ♪

まずは第一走、トップは赤組！元気に跳ねるポニーテールがチャームポイントな女の子、柴仙巡ちゃん！さすがスポーツ学部だね！

続くは、白組！小さな体は、まだまだ成長の途中！可愛いスマイルは、一部の男子を虜に♪平田潤ちゃん！いやー、実は天音さんも潤ちゃんにメロメロ！あの笑顔は卑怯だよ

つと、潤ちゃんのすぐ後ろにいるのは、青組！学校の噂で知らないものは無い！事実彼女は色んな事を知っている！小條聖ちゃん！聖ちゃんにかかれば、あなたの恋愛事情は丸裸！

おっ！何人か心当たりあるみたいだね

実況席からも分かるぐらい、目に見えた反応をありがと

さて次は、紫組！大好きなお姉様にどこまでも付いて行きます！
ショートポニーが目印、早乙女神楽ちゃん！大好きなお姉様は、チームのテントから、手を振って応援しているぞ♪

ここでようやく妨害チーム、先生チームと生徒会チーム!!

ん？何で妨害チームがいるのかって？

そりゃ面白いからだよ！！

さてさて、先生チームからは新任教員、小林美月先生！……それ以外、分かんないや

うん、次いこ

えーっと、生徒会からは我らが会長！柑條美玖！みんなの頼れるお姉さんを目指して、今日も頑張ってるぞ☆

「こらあ天音！！真面目にやりなさい！！」

「ありや？良い感じじゃなかった？出場者の紹介なんか、的確でしょ」

「聞いている私たちが、恥ずかしくて、集中できないよ！！名前だけで良いから！余計なこと付け足さずに、実況してよ！！」

「あはは〜ゴメンね〜」

じゃ、気を取り直していこう〜

ええっと、第一走者の人は今呼ばれた順に、お題の紙を引いていくよ

うんうん、みんな引いたね？そしたら一斉に開いて、スタートだよ！

さあそれぞれが、お題のものを探して動き回る！

あ、そうそう。お題のものを借りられたら、ゴールにいる審判に紙を渡して、確認して貰ってね〜

審判がOKを出したら、次の走者と交代だ！

柑ちゃんにも怒られた事だし、ここからは気になる借り物をしてきた人の、お題内容を推測しながら実況するよ♪

お！そうこう言ったら、柑ちゃんが旧校舎の方へ向かっているね

ちなみにこの旧校舎、今では暁先生のラボとして利用されていて、別名暁荘って言うんだよ〜

となるとお題は、暁先生の発明品かな？

おーっとその間に、他のチームは順調に借りて来ているみたいだ！
けど判定で不可、が出ているチームもいるね♪

みんな頑張れ〜

と、またまた言っているうちに、柑ちゃんが帰って来たね♪
柑ちゃんが借りてきた…て言うか連れてきているね！

あ、分かったよ！

えへへ、実はね、お題ボックスの中にはいくつか、難問も混ぜているんだけどね〜

柑ちゃんはその中の一つ、生徒会の引き籠りを連れてくる、を引いたみたいだね♪

この問題は2段階で難しいよ〜

まず役員の中でも一部の人が、生徒会に引き籠りがいることを知らない

この段階で殆どの人がギブアップだよ〜

次に引き籠りこと、赤城莉桜の居場所を知っているか
これに関しては、先生方と生徒会しか知らないよ

つまり、ほぼ無理難題なのだよ!!

あくでも、柑ちゃんが引いたら、意味ないじゃん！」

「真剣勝負に、時の運は付き物なんだよ！」

「はあ〜い、柑ちゃんからありがた〜い、格言？を頂いたよ

気付いたら全チーム、第二走者に代わっているね

あ、そうそうここでちよつと、雑学話を一つ

今度方配られた、生徒証明書兼学園支援端末『SPT』

あれを作っているのは、理事長兼生徒の赤城莉桜なんだよ〜
知らなかったでしょ？

実は最近、暁先生からチータが理事長の一人だって、教えて貰ったんだよ

お！生徒会チーム第二走者、フーちゃんが男を連れてきたね！

え？さっきの雑談の方をもっと聞きたい？

んー、チータが睨んでいるからムリ

さ、競技に戻ろう！

いまのやり取りの間に、アンカーに交代してるね

現状優位は赤、続くは先生、青、白、生徒会、紫の順に見えるね♪
けどお題によっては、まだまだ順位は入れ替わるから、最後までみんな頑張れ

と、一番にゴールに来たのは先生チームだー！

さあ審判の判定は……クリア！先生チームが1着だよ！！

わずかばかり遅れて、赤もゴール！

お、白もゴール判定だね

残るは青、生徒会、紫だよ♪

最後まであきらめず頑張れ

おお！青のさくやんと生徒会チームのユツキーが、同時に審判へ！

判定は……生徒会チームがゴール！

さくやん、抗議しているみたいだね

えつと……ああ、さくやん、それ自分の電卓でしょ？裏に名前、入ってるし

借りてきてないからアウトだよ、つて言うか体育祭なのに、電卓持ち歩いていたの!!」

「ウチは、商売道具は常に、持ち歩いとるんよ」

「…商売人だね」

さて、この段階で青チームと紫チームは、5位と6位、つまり0点が決定！

競技の終了だよ！

改めて1着、先生チーム

2着、赤チームスポーツ学部

3着、白チーム総合学部

4着、生徒会チーム

5着以降は、青チーム商業学部、紫チーム芸能学部

いや、実況した人以外も結構、面白い事になっていたね」

それじゃこれにて、生徒会主催借り物競争は終わりだよ」

そう天音が締め括ると、選手たちは退場し、グラウンドの整備が始まる。

このあと特に問題も起こる事なく、体育祭は無事、終わりを告げるのであった。

ちなみに赤チームのスポーツ学部が、2位と約50点の差をつけ

て、優勝しました。

最終話 裏側

借り物競争 く柑條美玖く

「……………そしたら一斉に開いて、スタートだよ！」

天音による開始の合図を聞き届けて、私は紙を開く。

「えっと『生徒会役員の引き籠り』……………」

ピンポイントな指定が来たみたいね。

と言っても、作ったのは私たちなんだから、当然中身は知っていたけど……………

よおし、とにかく莉桜の所へGOーだよ

暁荘の莉桜の部屋、私はそこで莉桜を説得していた。

「……………それ、本気？」

「もちろんー…ってわけで、行くよ、莉桜」

「いやいや、何でそうなるの。何のために今まで、表に立って活動しなかったのか、分かっているよね」

「うん、わかってるよ。けど最後の年ぐらい、いいじゃない！それに……………」

「？それに何よ」

「あれは画面越しより、じかに覗く方が楽しそうじゃない？」

「……………はあ、しかないわね。付き合っただけあげるわよ。けど、体力には自信ないからね」

何とか莉桜の、重い腰を上げさせることに成功した。

「真剣勝負に、時の運は付き物なんだよ！」

ゴールしてから、天音実況に対してコメントをする。

なんのお題を引くか、それはまさに時の運だとおもうんだよね。

それはそうと、順位は四位抜け。

ちよつと悔しいな。

そう思っていたら、天音から初耳な実況が聞えてきた。

「……理事長兼生徒の赤城莉桜なんだよ……」

待遇からただの生徒じゃない、とは思っていたけど……

「莉桜って、理事長だったの？」

問いかけながら、莉桜の方を振り向く。

しかし莉桜は問いかけには答えなかった。

天音を睨んでいる。

……この反応だけで、天音の話は本当だったんだな〜って思う。

「……………私、帰るー！」

そう言うと莉桜は一目散に、暁荘の自分の部屋に向かって行ってしまった。

注目されるのに慣れてないのに、天音が余計なことしたせいで、帰っちゃった。

「あとでフォローしなきゃ……」

借り物競争　　く歌風美音く

「古詠先輩、一緒に来て下さい！」

「ん？おれ？まあいいけど……」

私は夜海先輩を連れ立って、ゴールに向かいました。

審判の人の判断は、クリア。

それもそうでしょう。だって、お題の内容は『恋人　もしくは好きな人』だったんですから。

判断する材料はないんですから、私が連れ来た人がそうだと判断するしかないですもん。

私はアンカーの雪乃先輩へと、バトンタッチをしました。

そのあと、夜海先輩と待機列に並んで、競技終了まで待つ事になりました。

「先輩」

「ん？」

ここ最近、私たちを避けてきている先輩。

この機会を使って私は、今後のための布石を打つておくことに決めました。

「先輩に大事な、お話があります。体育祭が終わった後、二人きりで話
がしたいです」

「終わった後って言っても、片付けがあるだろ？もし早く終わったと
しても、事後処理がある」

「つまり、約束できない、と言う事ですか」

「そうなるな」

先輩はやはり、理由をつけては距離を置こうとしているようです。
けれど今回はそうはいきません。何故なら……

「それなら大丈夫です。体育大会の事後処理については、赤城先輩が
既に手を打っているそうです」

「……………」

「それに、私と夜海先輩が事後処理作業に参加しないのは、会長も了承
済みです」

「……はあ。わかったよ。そこまで根回しされていちや、きつと避け
て通れないだろうし」

先輩は微笑みを浮かべながら、ようやく折れてくれた。その微笑み
はどちらかと言うと、困り顔に近かった。

けれど最近の先輩の顔は、張り詰めた表情ばかりだったから、困り
顔な微笑みでも、見ることが出来たのは、なんだかうれしい。

「で、どこで話すの？」

「そうですね……………八幡神社、でどうでしょう？」

「ああ、あつこの神社か……………ん、わかったよ」

会長たちか作ってくれた機会

……………まあ、いいように遊ばれている気も、しなくてもないですが
……………

とにかく、私は私にできるやり方で、先輩が作っている壁を壊して
みせます。

「率直に聞きます。今の先輩は、一体どちらですか？」

私は石段に座った先輩を見て、訊ねました。

「一体何を言っているんだい？まるで俺に複数人格がある、みたいな聞き方じゃない」

やっぱり、私の思った通り返し。先輩の作っている壁の正体はやはり……

「はい。私はそう考えています」

「……ま、当たらずも遠からず、かな」

「ではやはり」

「複数人格がある、と言うよりは、色々な自分を演じている。そう言う方が正しいかな？」

そう言うのと、先輩はいたずらがバレた子供ののような表情を浮かべて、語りだしました。

「歌風さんはさあ、自分が見ている世界は、どういった風に見える？」
「見ている世界ですか？そうですね……一言で言ってしまうえば、輝いて見える、でしょうか？」

「うん、普通なら間違っていないよ。常に新しい出来事に触れて、ワクワクしている。それはとても輝かしいことだろうね。けど俺はそうじゃなかった。些細なケンカから、とてつもなく大切なものを失った。……その頃からかな？自分の見ている世界が暗く、曇って見えるようになったのは」

「それは、親友と仲たがいをしたって言う」

「ああ、そっか。柑條から聞いたのか。なら話は早いな。その時の事がきっかけで、俺は人と言うものが信じられなくなった。でも、同時に信じたい、安らげる場所がほしい、とも思った。……結局は、独りよがりの身勝手だよ」

はあとため息をつく先輩。けれど、肝心の事をまだ口にしていません。

「そうですね。身勝手だと思いますよ。……でも先輩、それで話が終わり、と言う訳はありませんよね？先輩が別の自分を演じて、人と接している訳をまだ、聞いていません」

私がハッキリと言いつけると、先輩はくくつくと笑い、先ほどとはまた違った喋り方を始めました。

「どうやら、別の自分を演じているみたいです。」

「そーだった。簡単に説明してやるなら、他者が理想とする、自分を演じてきたんだよ。それは主に二つ。他者のために動く優等生と、他者と一定の距離を置いて行動する自分。これら二つはなあ、結局自分の事を差し置いて、他人のために行動を起こす事が前提なんだよ。……さて問題だ。自分の事に余裕が無い者が、他者が勝手にイメージして出来た自分を演じていると、どうなるでしょう？」

「……息詰まって……本来の自分を見失う、でしょうか」

私が答えると先輩は拍手し、その通りと言いました。

「俺は、本来どのように他人と接していたのか、判らなくなった。結果的に残ったのは、他人のため演じる自分のみ。もう分かってきたら？つまり自分と言う者を保つために、他者から必要とされる自分を演じ続けているのさ」

「先輩の言いたい事、少しは分かりました……ですが、おかしくないですか？他者から必要とされていたのに、急に距離をとっていくなんて！色々と矛盾してますよ！」

「そうだな、矛盾してるだろうなあ。頼られることで、自分を実感できる。それと同時に、他者に迷惑をかけている、とも感じているんだ」

「……………」

おそらく先輩が言いたいの、共依存の関係の事でしょう。

先輩は誰かに頼られることによって、自分の存在価値を見出し
た。

しかし依存する事に対する危機感を、直感的に感じ取り距離を
つけた。

けれど、依存する相手がいなくなったことで、先輩は迷走を始
め
て
しまった。

と言った具合でしょうか。

もしそうなら、先輩の精神状態は少し危険な状態ですね……

……けどまだ、間に合うはず。

「先輩、最後に一つ聞きます」

色々と言いましたが、ハッキリと聞いていない事があります。

それは

「先輩自身は、本当はどうしたいんですか？」

先輩の想い。今まで口にしていたのは、迷走から来た上辺の言葉
だ
と私は感じました。

「俺が本当にしない事……」

先輩が芯からしたい事は、口にしていない

「……俺は」

もしそれが、依存であったとしても

「俺が行動するための理由が欲しい。……言い方あれだが、自分
を
任
せられる誰かの下に就いて、その人を支え助けられる様になりたい」
それが、私が好きになってしまった先輩である事には、変わりあり
ません。

しかし、先輩にとって依存は建前であるのは、分かっ
て
しま
い
ま
し
た。

そう、先輩はただ　　だけ……

「…そうですか。分かりました。では先輩」

いまだに上辺の願いを口にする先輩。

そんな　　な先輩に、私は……

「私の想いも言います。よく、聞いておいて下さいね」

一度深呼吸をして、落ち着いて、その言葉を口に出します。

「先輩、私は……あなたの事が好きです。私と、付き合ってください！」
先輩が……である事を、気付いてもらえるように。
そして、私の想いが届くことを願って……

???
(会話のみ)

『お母さま、これまでの議事録の整理、終わりました。要望通り、始まりから卒業までの間の議事録の中から、厳選したものをSPT上に、掲載しました』

「ありがとね、ナナ」

「いえ、このくらいは当然です。元々は議事録の管理が、私のお仕事ですから」

「あー、そう言えばそうね。でも今では、古詠のアシスタント、でしょ？」

『そうですね、バージョンアップして、議事録制作・整理以外の事も出来る様になりました』

「……………」

『お母さまっ…』

「あつ…ごめん。アップして貰った議事録の話、チェックしてた。……………こうやって見てみると、色々な事をやって来たんだね」

『そうですね。…………あの、お母さま。二つ、聞いてもよろしいでしょうか』

「ん？なにかな？」

『なんで基本は、マスターの目線で書くように言われたのですか？議事録ですから、客観的な方が良かったのでは？』

「確かに、そうかもねえ。でも…………読み手は、誰かの目線からの話の方が、楽しめるでしょ？」

『…………つまり、初めから掲載する事が目的だったんですね』

「そ。生徒会って、生徒の中から選挙で選ばれるでしょ？選ばれた後って、目に見えること以外何をしているのか、他の生徒たちは知らないし、分からない」

『なるほど。つまりお母さまは、生徒会の日常を、知って貰いたかったのですね』

「うん、だからこそ、普段から話題に事欠かなかった、古詠が主人公。誰も文句は言って無いし、問題もないね」

『本来なら、大ありでしょうけど…………』

「まあまあ。で、もう一つは？」

『終盤のマスター、めちゃくちゃ過ぎませんか？正直何を言ってるのか分かりませんし』

「ああ、それ？あなたは古詠から聞いたでしょ？」

『ええ、「他者に頼らる事で存在意義を感じる。けど同時にそれは、相手に迷惑を掛けている事になる。他者に迷惑を掛けてまで、存在意義を求めたくないんだ」とか言っていました。』

けど、それもよく分からなくって』

「そうねえ、きつと『自分の意思はない』って言いたかったんじゃないかな?」

『ご自身の意思がない?』

「ようは、自分で何も決める事が出来ない寂しがり屋が、古詠の本質だつてこと。」

まあ、拗らせちゃって、色々分かりにくいけどね」

『かまってちゃん、つてことでしょうか?』

「それも正解かな。ま、私も似たようなもんだけど、古詠と違ってちゃんと自分やりたことを持つてたからね」

『歌風美音は、あれでよかったですかね?あの選択では』

「確かに強引に流れを作った節はあるけど……彼女は強く賢い子よ。最終的には、理解したうえで、大丈夫だと思ったから告白したのよ」

『……信じるしかない、と言う訳ですね』

「そうね。そこから先は、二人の物語なのよ」

Extra話 追試に向けて

「と言う訳で先輩、追試に向けての勉強会を始めましょう」

「これまた唐突だな」

夏休みに入る直前の頃、長期休暇に入る事もあり日々忙しくあったのだが、珍しく生徒会の会議も仕事も無かった放課後。

なぜか後輩である美音と、図書室で勉強をする事になっていた。

「知らないとも思っただんですか？先輩が英語のテストで赤点を取っていた事」

「いや、逆に何で知ってるの？誰にも教えてない筈なんだけど……」

「雪乃先輩から聞きました。先輩は成績は全体的に平均または50点台前後が多く、中でも英語は30点台の赤点ギリギリだと。だから鎌をかけてみたのですが……本当に赤点だったんですね」

うっわ、はめられた。ってか雪姫さん、何で知ってんの。雪姫さんにも話した覚えはないのに……

まあこうなった以上仕方ない。やる事は一つ。話を長引かせて、時間を削る。

「……まあそうだよ。赤点だったよ。けど何で歌風さんに教えて貰う事に？後輩だよな？何で後輩なのに教える側？」

「単純な話です。私は高校レベルの英語であれば、何の問題もありません。この通り」

そう言っただけで学期末の英語のテストを差し出してきた。受け取って確認するとそこには、100点と記されている。

去年の自分は確か……うんギリギリ合格だった。

後日柑條から聞いた話なのだが、歌風さんは学年主席の学力だそうです。

……やっぱり生徒会って、賢い人や何かしらの才能がある人が集まるんだなあ……

「と言う訳で教えることに問題はありません。先輩は生徒会役員なのですから、余裕をもって追試をクリアーしてもらおう必要があります」
「いや、前にも言った事あると思うんだが、俺が生徒会に居ること自

体が場違いだと思うんだよね。ご覧の通り賢いわけじゃないし」

「役員になった以上、生徒の模範となるべきです。なので先輩の言い訳は関係ありません。今から頑張ればいいんですよ」

「あ、はいはい。ま、その意見は分かんではないけどね。物事も勉強も理解してモノにするまで、かなり時間がかかるんだよ。……俺は凡人以下だから」

そう、自分には何のとりえもない。今の自分に出来る事を精一杯、全力で行う。分かるようになるまで何度も読み返す。ただ真面目にそれらを繰り返すのみ。

そんな自分が生徒会役員なのは、今でも信じられない。中身のない真面目とでも言えがいいのだろうか。ただ当たり前のことを行う。そこに意味はなく、意義を感じる事もない。だから……

「なーんか、小難しい事を考えていませんか？」

「え？」

「そう言う所は残念ですが、でもそれが先輩ですから。先輩らしくやっけて行けばいいんですよ」

……何で後輩に諭されているんだろ。ってか何で、こんなダメな先輩なのに期待されているんだろ？

でもまあ、期待されてるんだし……

「じゃあまあ……大人しく教わる事にするか」

そう言うとき歌風さんは、微笑みを浮かべて返事をした。

「はいーそうされてください!!」

Extra話 勉強後、その帰りに

後輩である歌風さんから、追試対策の学習を受けること約一時間。図書室が閉館の時間となったため、ようやく本日の勉強は終了となった。

「それにしても先輩、なんで英語が苦手なのですか？」

図書室を出て下駄箱に向かう途中、歌風さんは唐突にそんな事を訊いてきた。

彼女の表情を窺うと、若干ながら疲れているように見える。

まあ、それもそうなるだろう。なんせ結局最後まで、教えて貰ったところを、完璧に覚えることが出来なかったから。いや、我ながら酷いできたねコレ。別に歌風さんの教え方が悪いわけではない。むしろ、分かりやすいよ？……取り敢えずまずは、彼女をフォローしておこう。

「いやこう言ってはなんだが、英語に限らず記憶・暗記系や機械なんかも苦手だぞ？あ、あと体育会系も絶望的だな」

「知ってます。はつきり言って、普通のモブ生徒がピツタリに感じます。生徒会役員ってイメージじゃないですよ。先輩って」

歌風さんが真顔で、バツサリと言う。

ハハハ、容赦ないね。ま、我ながら本当にそう思うから、仕方ない。それに、あの出来事がなかったらやろうとも考えなかっただろうし

……

「でも先輩の、どんな事にも真面目で、女子に優しい点は、先輩の長所ですね」

「真面目なのは融通が効かない、とも言えるがな。それに女子に優しいってのは、ちよつと違うだろう？」

真面目なのは、自分がそれしか出来ないから。そうするしかないと言う、個人的な価値観を実行しているに過ぎない。それがたまたま、正しくあっただけ。

女子に優しいってのも同じだ。誰に言われたわけでもない。自分の価値観では、女子には出来るだけ優しくあるべき、そう考えて行動

した結果にすぎない。

「そうですね……先輩の中ではそういう評価なんですね」

そう言うとなぜか、残念そうな表情を浮かべる歌風さん。その顔は確かに残念そうに見えるのだが、どこか寂しげにも見えた。

「分かりました。で、話がだいぶずれてしまいましたけど、何で英語が苦手なのか?」

が、確かめる間もなく歌風さんは、話を一番始めへと戻す。くそく、忘れてないか。まあ言いたくない理由があるわけでもないから、別に良いんだけど……

「取り敢えず靴を履き替えようか? 続きはそれから」

とうの前に下駄箱には到着し、ずつと立ち話をしている状態だった。

「あ、はい。分かりました。でも、逃げないで下さいよ? いつも肝心なところで、はぐらかして逃げるんですから」

「わかってる。ってか今日は、途中まで送って帰るつもりだよ? 夏場でいくら帰りがまだ明るいと言っても、結構遅くまで付き合ってたからね」

「本当ですか! ありがとうございます、先輩!」

どこか嬉しそうにお礼を述べて、自身の下駄箱へ向かう歌風さん。何でだろう?

数少ない後輩で女子。ならば一応は送るべきでしょ?

……まあ歌風さん、何か護身術会得してるし、自分より強いのだね。

とにかく自分も上履きから靴へ履き替える。お互い靴に履き替え玄関を出る。

「で、英語が苦手な理由か……」

隣を歩く歌風さんをチラツと見る。ホントまあ、何でこの子は後輩なのに、先輩である自分の勉強を見てくれるんだろう?

「昔英会話教室に通ってた事があるんだがな、その頃は何の抵抗もなく読めたし、単語も書けた」

不甲斐ない先輩だから、歌風こさんの先輩である事が申し訳ない。

「英会話教室を卒業して、学校で本格的に英語の授業を習い始めてだ。全然分からなくなっただ」

尊敬すべき先輩は、自分より優れた先輩がいるだろうに。

「ローマ字と英語、違いが理解できなくて、次第に過去に出来ていた筆のところまで分からなくなっただ」

…いかん、話ながら余計な事まで考えていたな…

いつの間にか、信頼を寄せていたようだ。

「大雑把に説明すると、こんな感じかな？」

改めて彼女の表情を見ると、どこか納得したようだった。一体何を納得しているんだろう？

そんな事を思っていると、彼女は満足そうに言った。

「それであの結果、と言うことですね。分かりました。これなら追試の対策も何とかかなりそうです」

スパルタは勘弁して欲しいのだが…：まあ教えて貰う以上、文句は言わない。

「先輩、これから頑張らしましょうね♪」

後日、追試は無事合格。が、その後もテストの度に、歌風さんにお世話となるのだが、それはまた別のお話だ。